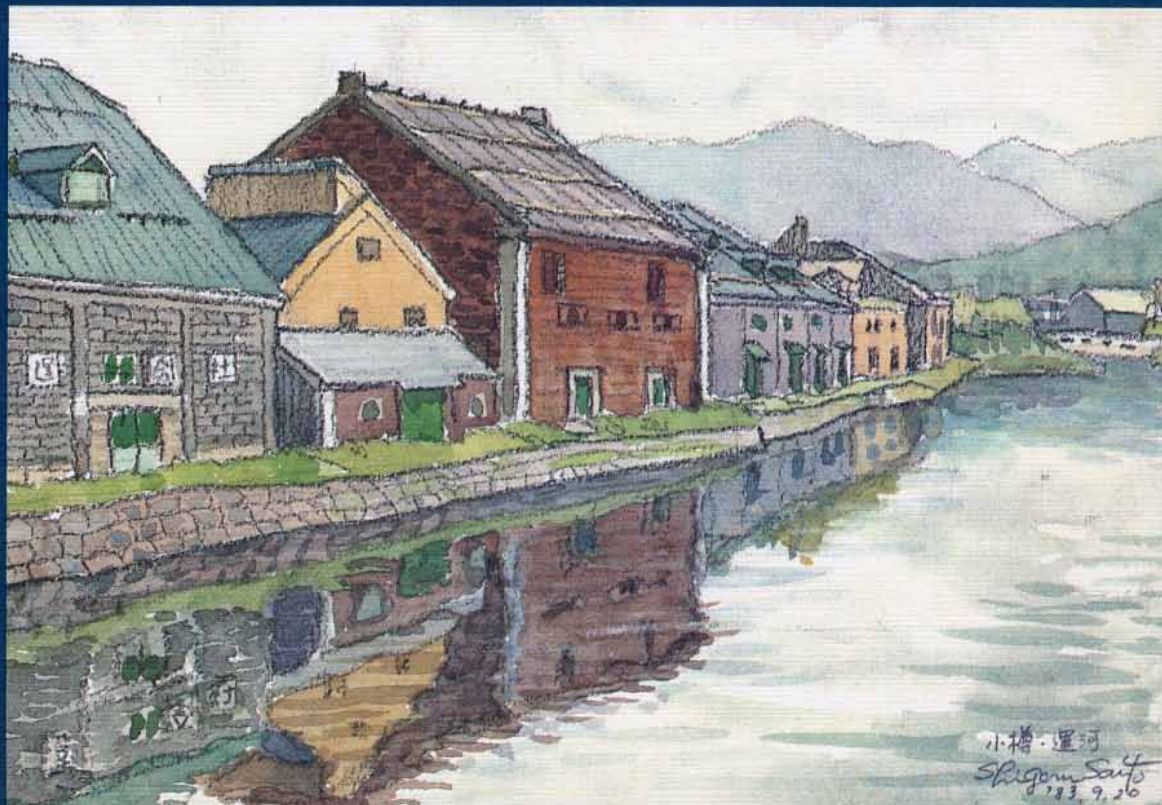


さざうの詩 あしたの詩

日本作詩家協会年刊詩謡集

1984年版



小樽・運河
Shigemi Saito
1983. 9. 26

詩人の詩と詩人

日本作詩家協会年刊詩謡集

1984 年版

序 文

会 長 西 沢 爽

作品はその人の心の記録でもある。

歳月が流れ、年齢を重ねるうちに、詩情もまた変貌してゆく。末熟には若さの輝きがあり老練には滋味の横溢がある。

時すぎてこの詩謡集を手にしたとき、それぞれに自分の軌跡がよみがえるであらうし、仲間たちの遠い微笑みが甞のようにかえってくる想いをおぼえるであらう。

来年はあなたは何をうたう？。

百花撩乱の詩苑に誰がどんな花を咲かすか、私には待遠しいことである。

もくじ

〈作品イロハ順〉

序	文	西沢	爽	一
一瞬恋人	風見 瑛子	六		
幾山河	美志磨 優樹	九		
イエス ミス ロンリー	九条 たかね	三〇		
生きがい	石黒 忠	三三		
ロックは男の子守唄	かわうち のぼる	三三		
ロマン街道	五分木 敦美	三三		
拝啓「嵯峨野」サマ	道山 直樹	三四		
ハイキング	はぜやま 清美	三五		
母の粉挽き詩	水鷺 乗	三六		
八幡船節	日下野 天星	三七		
春の雪	大沼 里栄	三六		
春雨	加藤 完二	三九		
花 一輪	いたくらひろゆき	三〇		
花 林 檎	佐藤 秀千代	三一		
浜 人 よ	峰 よしを	三一		
函館恋港	山田 世津夫	三三		
にぎり酒	能丸 武	三四		
人情紙吹雪	那須野 巖	三五		

人間賛歌	関根	照子	三
ほとゝぎす物語	田村	和男	七
ほたるぐさ	小林	すみ江	三
螢雪	こばやし	克至	三
豊太閤幻想賦	青木	三郎	四
望郷橋	おおやぶ	直子	四
慕情はんや節	久仁	京介	三
利根の哀歌	伴在	主計	三
ドナウの雨	渡辺	千楨	四
東京かくれ街	中村	葭一	五
東京ダモイ	八木	吾郎	四
東京子守唄	倉持	あきを	四
陶酔	おだ	みさを	四
戸惑い春	鈴木	れい子	四
小さな恋のメロディ	みずの	稔	五
秩父路にて	さかき	じゅん	五
陸に上がって	田畑	しげき	五
姨捨ホロリ	たかぎ	かずお	五
男涙のみれん酒	橋間	哲也	五
おとこ富士	飯塚	義美	五
男坂・女坂	新井	三七二	五
男の祈り	北村	直之	五
男の風車	近藤	しげる	五
男の願い	石本	美由紀	五

男のてのひら	玉利	要	六
大 晦	伊野上	のぼる	六
大阪暮らし	柴田	恒男	六
大 棧 橋	高 取	武	六
大須の灯	滝田	常晴	六
おねがい恋心	矢島	弘英	六
親 子 船	内田	善士	六
おやじの願い	庄坪	正雄	六
おやじの島	新條	カオル	六
お前と一緒に	村上	文恵	六
おふくろさんへの土俵入り	真弓田	幸一	七
想い出新橋鳥森	牧	房雄	七
面 影 橋	下野	登美子	七
面 影 山 唄	たなかゆ	ゆきを	七
女 郎 橋	ごとう	としのぶ	七
女があげる別れ唄	平井	健一	七
女の生きがい	山田	博康	七
女の肩は風の宿	平野	ひろし	七
おんなの裏酒場	高野	礼子	七
女の恋唄	伊藤	悟	七
女の交差点	藤沢	庸子	八
おんな舟	黒川	良人	八
おんな・ひとり酒	仁井谷	俊也	八
わたしは希望という女	佐藤	進	八

「わびすけ」の花	鈴木	貢	四
忘れ旅	水上	幸子	五
湾岸道路	若林	澄人	六
海峡酒場	田村	重雄	七
海峡ひとり	甲斐	新	八
可児の夜	白川	鮎太	九
刈干し十三夜	夢	虹二	九
鏡のわたし	秋本	敦	九
語り明かそう何年ぶりだろ	田中	凡夫	三
肩ぐるま	佐久間	常夫	三
片恋占い	角田	摩由子	四
絡み酒	叶	命恵	五
かくれんぼ酒場	塚谷	清一	六
かくれんぼ峠	荒川	利夫	七
風花の女	三丁目	高時	九
風花の宿	河野	充伸	九
仮面の街	星	秀和	一〇
神のめぐみ	松尾	ゆきを	一〇
宵待ち時間	大和	千泉	一〇
夜に生きる	終	たけし	一〇
夜の浜辺	新谷	政浩	一〇
夜の舞姫	佐々木	安伸	一〇
夜の砂時計	佐藤	正美	一〇
夜ふけの町で	砂美	爽爽	一〇

夜明けの訪問者	山北	由希夫	二〇八
吉野山	萩原	秀夫	二〇九
大漁酒	岩瀬	ひろし	二一〇
たった五つのかなだけど	上田	有策	二一一
騙し船	山本	恵三子	二一二
旅の宿	木立	雄幸	二一三
恋情	杉山	英香	二一四
追伸	諸我	聡一	二一五
壺占い	萩真	利子	二一六
つっぱり芝居	宇山	清太郎	二一七
通勤野郎	小島	高志	二一八
月夜の忘れ貝	成瀬	左千夫	二一九
ネオン砂漠に	大森	富士子	二二〇
猫	ふくだ	みおる	二二二
中洲ネオン恋しぐれ	傳祖	恭	二三三
なつ姿	長谷川	洋	二三三
夏の後先	佐東	たどる	二三四
ななかまど挽歌	小川	比富美	二三五
泣き砂浜	藤田	鶴之丞	二三六
泪ポロン	おち	としこ	二三七
涙の港	小野	津加佐	二三八
泪の詩集	秋ひ	ろし	二二九
南国慕情	井田	誠一	二三〇
LOVE IN SOHO	三木	悠花	二三三

むすめよ	菊地	英夫	一三
うわさ船	山田	晃義	一三
噂のあと	白井	克治	一三
詩で愛してくれた人	鈴木	孝	一五
歌人時雨	小林	金次郎	一六
嘘つきつばめ	小出	アキ	一七
裏通り	麻こ	よみ	一八
裏町しぐれ	板倉	文子	一九
裏酒場	根本	昌幸	二〇
うぐいの詩	玉木	一史	二一
海の蝶	鳥羽	貞子	二二
ウスバカゲロウ	牧野	おさみ	二三
能取岬	荒木	忠雄	二四
野ら犬のブルース	秋本	昭	二五
くるめ木囃子	英	玲	二六
屈折の花	桜本	繁	二七
役者ひとすじ	水野	甚太郎	二八
山間の宿	伊藤	一生	二九
夜愁	湯浅	としあき	三〇
舞姿	周東	敬二	三一
まぼろし女	川西	美智子	三二
迷い	高瀬	臣子	三三
松食い虫	三宅	立美	三四
マ	門井	八郎	三五

結婚しませんか	山上	路夫	一五
結婚ものがたり	どい	あきら	一七
原生花園	池田	充男	一六
ふりむけど	大屋	哲夫	一五
ブルースター讃歌	原	牧江	一六
ふるさと	古野	哲也	一六
故里は富士のみえる町	雪野	斗詩夫	一三
ふるさとの家	篠原	順子	一三
ふるさと夜愁	山上	雅人	一四
ふるさとへ帰ろう	黒滝	高一	一五
風雪日本海	小川	淳	一六
冬支度	若山	かほる	一七
恋はL・S・D	鈴木	陽子	一六
小犬の唄	西沢	爽	一六
恋なじみ	宴	ゆり	一七
恋の色彩り	能勢	英男	一七
恋の荷物	相馬	詩彦	一七
恋のゴンドラ	江橋	富子	一三
恋の数え唄	竹村	勝	一四
恋灯り	宮部	好弘	一六
ゴニョラゴニョラと雨が降る	徳永	みどり	一七
氷の音の子守唄	松生	静	一六
誤解	美貴	ひろこ	一七
今宵かぎりの	木原	悦子	一六

小平次舟頭唄	有田	花外	一八二
駒彫一代	田口	もりを	一八三
こころ化粧	折戸	勝史	一八三
小雨の海峡	浅野	哲秋	一八四
故郷の天地	越野	みのもる	一八五
こんな女でいゝのなら	さきゆう	かつみ	一八六
根性船	亜樹	純	一八七
江戸前舟唄	岩田	道之輔	一八八
江の島慕情	おだ	みつ	一八九
鉄橋	鈴木	昭一	一九〇
出直し列車	出島	ひろし	一九一
愛に	紫野	ゆき	一九三
愛はオーロラ	岡本	和子	一九三
哀恋	山口	純	一九四
愛のさすらい	倉島	雅三	一九五
愛の忍草	植田	竹雄	一九六
哀愁の炭坑節	村山	務	一九七
青いスーツの女	折井	一光	一九八
赤いお守り	石井	まこと	一九九
赤いカンナを忘れたの	戸成	ふさ栄	二〇〇
赤坂育ち	中西	寛	二〇一
燃いお湯割り	江馬	つとむ	二〇三
あなた慕情	やまだ	りゅう	二〇三
あなたをさがして	矢真田	真沙恵	二〇四

あなたは海	横井	弘	二五
あの人を下さい	羽村	真人	二六
あくまで悪魔	松代	達生	二七
悪夢	芝山	和子	二八
あやめの宿は	文月	豊	二九
A・G・A・I・N	仁位	美由紀	三〇
油手にして	中里	晴夫	三一
あ、沖田総司	竹内	きよと	三二
あ、落日燃ゆ	ぼく	はじめ	三三
浅太郎子守唄	市川	武志	三四
あざみの君	岐多川	純	三五
旭川慕情	松本	摂子	三六
雨の硝子窓	白水	かおる	三七
雨模様	やま	一央	三八
さいはて流れ旅	富田	清吾	三九
幸子の雨	伊予	圭相	四〇
盛り場おんな唄	小林	佳恵子	四一
嵯峨野慕情	南	早苗	四二
坂道の踏切	炭谷	昌彦	四三
さよなら異国	新保	治平	四四
サラリーマンが一番偉い	みや	秀和	四五
桜	詩	和峯	四六
酒のえにしにしばられて	友里	裕介	四七
さすらいの宿	鈴木	きよ	四八

三番波止場	津田	辰臣	三九
山東省之旅の歌	山門	芳馨	三〇
35才主婦	星野	哲郎	三二
シへんの女	大澤	陽央	三三
霧降り港	松井	由利夫	三三
祇園・おんな雨	星合	節子	三四
京都しのび傘	高田	ゆきお	三五
今日から明日へ	神作	光志	三六
京の宿	大坂	秀次郎	三七
北の旅愁	高橋	直人	三八
北風海峡	多岐川	昌史	三九
北の棧橋	大橋	哲郎	四〇
北の港町慕情	渡辺	和於	四一
北の銀砂漠	鮎川	公正	四二
北航路	息吹	詩郎	四三
北へ帰る女	飛鳥井	芳朗	四四
キャバレー	小島	香澄	四五
如月哀歌	坂本	一男	四六
帰郷	真樹	亜矢	四七
九州人	本間	繁義	四八
君のアルバムを見たい	千葉	幸雄	四九
夕顔暮らし	栗沢	涼	五〇
夕月の雨	大倉	芳郎	五一
佑子	表八	千代	五二

有	情	貫井	昭五	二五三
湯の町哀歌	中山	二夫	二五四	
湯沢エレジー	松平	史紀	二五五	
雪・とけておんな	みやけ	知絵	二五六	
雪と水	渡辺	治	二五七	
雪割燈	秋田	泰治	二五八	
雪のアトリエ	のたき	ひであき	二五九	
雪灯り	三浦	康熙	二六〇	
ゆきずりカモメにや	伊丹	將人	二六一	
夢日記	池上	信	二六二	
夢堀川	あき	たかし	二六三	
夢無情	山中	しげる	二六四	
夢の中の夢	鈴木	実利	二六五	
夢あかり	海老沢	孝一	二六六	
夢あざみ	高畠	諄子	二六七	
夢見花	室屋	安美	二六八	
夢一夜	萩原	百合子	二六九	
夢浄土	斉藤	卓	二七〇	
夢しぐれ	三谷	勉	二七一	
譲り船	上野	たけし	二七二	
名刺舟	高上	あゆむ	二七三	
夫婦旅	滝川	たけお	二七四	
夫婦岬	中野	惣太郎	二七五	
短恋	松本	敦央	二七六	

みちづれの花	齊藤	清吉	二七
みちのく酒場	豊原	史丈	二七
みちのく未練恋	有加利	淳	二七
乱れ	淡島	千佳夫	二八
水たまり	藤岡	真理	二八
港よこはま恋時雨	谷田	草路	二八
港のおまえ待ってろな	外松	たつ雄	二八
港…恋町・泪町	眇田	榮一	二八
萎れ花	藤枝	省一	二八
情の川	村馬	慎一郎	二八
上州湯の香唄	丘	治也	二八
傷心ひとり旅	村田	安広	二八
正直人生	仁礼	美智雄	二八
初体験	中川	連	二九
信濃川・流れ花	志賀	大介	二九
白川の宿	柴田	よしかず	二九
志野	横山	光夫	二九
しぐれ茶屋情話	鳥居	浩子	二九
しぐれ宿	荒木	良治	二九
幸せにしてあげて	大前	裕子	二九
倅せそうだね	木村	賢司	二九
倅せくれたうちの奴	木谷	鴻治	二九
倅せまわり道	西	順子	二九
出世太鼓	増山	一郎	三〇

終 恋	山崎 公聖	三〇三
新宿横恋慕	栗田 治夫	三〇三
新宿みれん唄	鈴木 夜詩夫	三〇四
人生大曲り角	泉 淳	三〇五
ひろげよう愛の輪を	浦田 常治	三〇六
ひと	愛 行子	三〇七
ひとりぼっちの子守唄	松崎 暎子	三〇八
ひとりうもれた私でも	篠田 定吉	三〇九
悲 恋	原 文彦	三一〇
焚 ^ひ 惑 ^ご 星 ^{ぼし}	百瀬 淑子	三一
日昏れの波止場	高安 弘	三一二
ひ き 汐	やました しん	三一二
秘 め ごと	大溝 玲子	三二四
もういちどコウノトリ	小谷 健一	三二五
燃え立つ時が人生だ	榎本 克彦	三二六
紅 葉 川	石川 泰久	三二七
瀬戸内情歌	水木 れいじ	三二八
線 路	高畑 和之	三二九
善三母恋しぐれ	熊 たけし	三三〇
酔 歌	堺 ナオコ	三三一
素適な他人	土屋 正敬	三三三
あとがき	牧 房雄	三三三

きょうの詩

あしたの詩

一瞬恋人

風見瑛子

ここへ来れば 逢えると信じて
待っていたのよ 今夜は
何も言わずに 隣りの席で
少しブルーな 心をなぐさめて
このグラスを あけるまででいい
恋して…… 私に
熱い目をして 見つめてほしい
そしたら 一瞬 恋人

うすいお酒 誰かと約束
夜は気ままね いつでも
貴方の好きな 海の色した
スーツを着た日に また逢えるかしら
あの扉を あけるまででいい
淋しい気持で
うしろ姿を 見ていてほしい
そしたら 一瞬 恋人

幾 さん 山 が 河

美志磨優樹

幾山河 足をひきずり 今日も又
ゆけど 里の灯は 遠く
さればとて もとに戻れぬ 茨道
姿無き 犬の遠吠え 凍みて悲しく
かじかむ指に 息を吹きかけ 暖とれど
己の影さえ 闇に消されて

後ろを見れば あとに続く者もなく
追いかける 声とても無し
あるものといえば やつてきたことや
やらなかったことの 悔いばかり
ヒューヒューと 風穴のあいた心繕い
繕う端から 風がこぼれて

へこの山の刈干しや すんだヨ
あとは田んぼで 稲刈ろかヨ

嗚呼山河 父よ懐かし 恋し母
これぞ 人の世の 真実
夢に酔い 夢に破れて この町の
石になる 我にたむけよ 野辺のひと花
凍えた身体 二つ合わせて ぬくもりに
淋しさ埋めたい それも幻

イエスミス ロンリー

九条たかね

優しい黄昏 マリーン ラフに着込んで

通りを行けば ミス ロンリー

街の人達 誰もが振り向く

おんなって モナリザ ミステリー

微笑みが 哀しい分だけ 神秘的ね

前を急ぐ 広い背中 たぶん空似

思い切るのも 愛のうちよ

※イエスミス ロンリー

失くした恋なんて 乗り損ねた電車

5分も待てば 次の来るわ※

煌く街の灯 肩先 軽く弾いて

交差点を渡る ミス ロンリー

孤独いろした 瞳が揺れてる

おとなって みな ハート ブレイカー

そして出会い 本当の恋まで重ねるのね

過ちさえ いま鮮か だけど忘れて

諦めもまた 恋のうちよ

イエスミス ロンリー

戻らぬ愛ならば 見送ったら良いわ

5分もたてば 次の来るわ

生きがい

石 黒 忠

肩をたがいに 寄せ合いながら
あなたの背中に もたれていると
命燃やして 命燃やして
明日を夢みて 生きがいが
長い苦勞に あなたが揺れる

にぎりしめてる 心の灯り
胸にすがった かぼそい指が
可愛いひとりの 可愛いひとりの
あなたの情に 酔っている
涙を浮かべて ひとつの躰

はなしはしないと しっかり抱いて
すまぬ想いが 胸にこみあげる
惚れていりやこそ 惚れていりやこそ
やつと伴せ うす灯り
夢が待つてる かなえてほしい

ロツクは男の子守唄

かわうちのぼる

世の中暗いと 嘆くじやないよ

自分の道は 自分で照らせ

命のドラムを しつかりたゝき

あばれさそうよ 熱い血を

男のリズムは 負けん気ビート

涙が 瞼 こじあけりや

意地でそいつを 押し戻す

根性という名の よく寝る子

ロツクで起こして さあ行こう

表をきれいに 飾っていても

中味がなけりや 人形も同じ

真心ひとつに 希望を足せば

三や四になる 幸せが

男のリズムは 負けん気ビート

苦勞の山の てっぺんにや

きつと咲くだろ 夢の花

明日^{あした}という字も 踊りだす

ロツクは男の 子守唄

ロマン街道

五分木敦美

(男) 数多い 女の中で

" なぜ お前なのか

" うまく 言えないけれど

" 幾度も ぶつかる 悲しみを

" 健気に 笑って 付いてくる

" その心意気が 嬉しいぜ

(男女) ああ 幸か不幸か ロマン街道

(女) 数多い 男の中で

" なぜ 貴方なのか

" うまく 言えないけれど

" 明日に 大きな 夢賭けて

" 自信と 不安が 交錯する

" その横顔が 素敵なの

(男女) ああ 夢に水やる ロマン街道

(男女) 数多い 出合いの中で

" なぜ 二人なのか

" うまく 言えないけれど

" じくざく 歩いて 傷ついて

" 互いに 労り 生きてゆく

" この優しさが 心地良い

" ああ 風に吹かれて ロマン街道

拝啓「嵯峨野」サマ

道山直樹

24

やさしい恋人と 肩を寄せ

日暮れ静かに 迎えたら

とてもすてきです きれいです

拝啓 晩秋の日の「嵯峨野」サマ

めぐり逢った あの人のすべて

「想い出草」に したためて

あなたにそっと 打ち明けます

嵯峨野につづく この橋を

渡り切れたら 愛になる

幸福すぎます 夢のよう

拝啓 晩秋の日の「嵯峨野」サマ

からめあった あの人の指が

私の休む 場所です

あなたにそっと 打ち明けます

ためらいがちに うなづいた

紅葉の下に 約束に

私変ります 二十歳の日

拝啓 晩秋の日の「嵯峨野」サマ

湯豆腐の店 苔の道までが

想い出染めて 浮かびます

あなたにそっと 打ち明けます

ハイキング

はぜやま 清美

谷のせせらぎ 見下ろしながら
君と渡れば 吊り橋ゆれる
ヤッホー

峰までひびくよ 若人の唄
元気を出そう ハイキング

山の細道 どこまで続く

行けば緑の 牧場に出るよ

ヤッホー

も少し頑張れ すぐ頂上だ
かけ声合わせ 登ろうよ

みんな集まれ ラジオを鳴らし
踊ろ仲よく 手を取り合って
ヤッホー

あなたも私も 心ゆくまで
日暮れも忘れ 唄おうよ

母の粉挽き詩こなひ うた

水 鷺 乗

十五燭光しちくこうの 灯り背に
石臼回せば 餅する
五反百姓びざしやうの 貧乏の谷間
苦勞夜業くろうやぎの 粉挽く音は
母がやりくり した詩さ
へ素麦すまいめしでも 黄粉を塗ぬぶしや
腹が喜ぶ ゴンゴラ ゴンゴロリ

箸を伸ばせば 西空の
明りが撮とめる 早や仕舞い
年に二度しか 巡めぐつて来きない
祭り団子の 粉挽く音は
母の樂しみ 招まぶ詩さ
へ明日は晴れ着を この手で引ける
宮で何買おう ゴンゴラ ゴンゴロリ

とかく饑うしい 思ひはさせぬ
愛のこもった 粉挽く音は
母が子育て した詩さ
へ五反百姓じや 子供が宝
腹を減へらせよ ゴンゴラ ゴンゴロリ

八幡船節

日下野天星

へ怒濤千里の

踊る舳先が

渦が笛吹く

潮できたえた

南無や 南無や八幡

詩う 詩う男の

ドッコイ エンヤラセ

ドッコイ ドッコイセ

へ咆哮える竜波に

丸太腕に

汗が玉散る

肌で笑った

南無や 南無や八幡

海の 海の男の

ドッコイ エンヤラセ

ドッコイ ドッコイセ

へ獲物狙った

暴れ倭寇は

強手分捕り

風もふるえた

南無や 南無や八幡

花の 花の男の

ドッコイ エンヤラセ

ドッコイ ドッコイセ

ドント荒海で

音頭をとれば

玄海灘の

あので

ヨイシヨ大菩薩

ソレ読経節

ドント無法者が

生命を賭けりや

赤銅色の

入れ墨は

ヨイシヨ大菩薩

ソレ守り神

ドント目が光る

闇夜の嵐さ

うら商いに

旗見れば

ヨイシヨ大菩薩

ソレ八幡船

春の雪

大沼里栄

あなたひとりで 旅立つ駅の

駅の灯りが かすかに揺れる

今なら間に合う 走れば乗れる

最後の汽車に 最後の夢に

いいのあなたがこまるから

頬にひとひら春の雪

たった三月の 短い恋を

恋を命と 思つて燃えた

生まれてはじめて ほんとの愛と

死ぬほど辛い 別れを知つた

時の流れを恨んでも

決してあなたを恨まない

雪をはらつて あなたが乗つた

乗つた夜汽車が 遠くへ消える

ぬけがらみたいな 女の目には

明日の夢も 見えなくなつた

せめてわたしの心だけ

あなた隣りに座らせて

春 雨

加 藤 完 二

宿の浴衣を 払ってあげる
雨の哀しい 忍び合い
恋は一夜で 終ってしまう
泣けば抱いた 優しいあなた
誰もあげない 春雨の宿

記念写真は 撮れないけれど
ぬれた瞳に 写します
山の湯けむり やさしく包む
そつとこのまま 溶けたいふたり
明日はいらない 春雨の宿

花も散るよな 短かい愛に
すがる女の 顔を見る
無理な約束 うなづくあなた
命かけたい 噂になろうと
燃えてゆきます 春雨の宿

花 一 輪

いたくらひろゆき

一生俺に つき合えと
言うのを喉で 引つ込めた
先に苦勞が 見えていて
泣かせるだけの 道づれに
なんで出来よう 男なら

うらんで今は 泣くだろが
わかつてくれる 日も来よう
指を一つも ふれないで
大事にした この恋を
男心と いうものを

荒くれ俺の この胸に
あの娘は咲いた 花一輪
人に負けない しあわせを
つかんでくれと 祈りつつ
枯らすことなく 咲かせてる

花 林 檎

佐藤秀千代

霞むあの空 都に遠い

お岩木山の 涙雲

愛の細道 恋しくて

夢を追いかけて 名を呼べば

肩に散る散る 花林檎

燃える思いに 面影残し

待つ身にいくつ 春暮れる

心がわりを 気にすれば

野良の仕事も 手につかず

風に散る散る 花林檎

なぜにあの人 姿を見せぬ

死ぬほど好きな 恋なのに

娘心も ままならず

泣けばいとしの 津軽路に

咲いて散る散る 花林檎

浜 人 よ

(海に暮らして)

峰
よしを

浜人よ 東のうねりに
手をかざし

遙かな光りに 漁舟の影

移りゆく季節に 魚を追ひ

海と語らい よせるしわの波

雨風に もまれて浪間の

この生命

漁師に生きがい かけて来た

大漁旗はためき 幾歳月

海を愛した 漁夫の心意気

夕焼けの 明日の海辺に

手を合掌す

静かに祈れる 浜人よ

幸福に生業 幸多かれ

海に暮らして 海と生きてゆく

函館恋港

山田世津夫

樽を追って 想い出つれて
あなた住む街 函館港
結ばれぬ一夜の 女の花にさえ
明日の運命に 咲いて散る
酒に涙の酒に涙の あゝ恋港

酔うほど泣ける 過去もあるわ
けんか別れで 津軽の酒場
思い切り愛され 燃えたわ貴男には
夜を騙して 捨てられた
所詮涙が所詮涙が あゝ身を責める

女のすべて しあわせひとつ
夢を見させる 函館港
さすらいの悲しい 女の儚なさに
惚れた男の 薄情け
酒に涙の酒に涙の あゝ恋港

にぎり酒

能
丸
武

たった一言 さよならと
涙が滲んだ 置手紙
明日の運命を あ、占って
暦捲れば 彼岸花
一人しみじみ にぎり酒

せめて電話で 元氣だと
伝えて下さい 夢語り
そつと過ぎ行く あ、人影に
呼べばひゆるひゆる 未練風
めぐり逢えると にぎり酒

別に用事は ないけれど
ふらりと訪ねて 来てみたら
思い出川に あ、細雪
酔えば零した 愚痴だけど
憂さを紛らす にぎり酒

人情紙吹雪

那須野 巖

たとえ破れた 紙切れさえも
表があれば 裏もある

まして人の世 世間の噂

裏が表か 表が裏か

心迷わず 人情 紙一重

人は表を きれいに見るが
必ず裏が ついて来る

裏を見てから 表を見ても

生きて行くには 遅くはないさ

辛抱する木に 人情 花が咲く

他人を指さす 残りの指が

自分をすべて さしている

不幸しあわせ 紙一枚の

裏と表は いつでも一緒

耐えて言うまい 人情 紙吹雪

人間賛歌

関根照子

人って人って すばらしい
人って人って すばらしい
出会って話して 笑顔になれば
知らない人も お友だち
知らない人も お友だち

地球って地球って すばらしい
地球って地球って すばらしい
海も大地も でこぼこだけど
どこから見ても 丸い顔
どこから見ても 丸い顔

空って空って すばらしい
空って空って すばらしい
人も地球も 丸呑まるのみにして
希望と夢を 運んでる
希望と夢を 運んでる

ほとゝぎす物語

田村和男

明り障子の 隙間から
呼んでる様に ほとゝぎす
遅い目覚めの 髪を梳く
山ふところの しのび宿
あなたもすこし 眠^ねんでいてね

俺の女の しるしだと
あなたが 噛んだ 朱いあざ
襟をはだけて そつと見る
鏡^{かがみ}台も古い 山の宿
どこか「夢」の 恋物語

わざと濃目の 口紅で
ほつぺに そつと くちづけを
夢の続きに 溺れてる
寢息が憎い かくれ宿
すこしいじめて あげたいあなた

ほたるぐさ

小林すみ江

別れたあの日の

おまえの涙は

二年の月日に

かわいたろうか

ほたるぐさの

ちいさな花が

ことしもひっそり

日かげに咲いたよ

いじらしいよな

藍いろに

なぜかおまえを

思い出す

さみしい 花だよ

愛していながら

おまえを傷つけ

別れてしまった

若さのあやまち

ほたるぐさの

ちいさな花が

ことしもひっそり

日かげに咲いたよ

風にふるえる

はかなさが

泣いたおまえに

似てるよな

悲しい 花だよ

故郷^{こきやう}に帰った

おまえのうわさは

風さえ伝えず

月日が流れる

ほたるぐさの

ちいさな花が

ことしもひっそり

日かげに咲いたよ

過去は忘れて

しあわせな

夢をさがして

生きろよと

祈^{いの}っているのさ

蛍 雪

こばやし 克至

ひと汽車遅れて あなたを追って

地図をたよりに 北の旅

ぬれてつめたい 氷柱にすがり

淋しい面影 凍ごえてる

両手ですくえば とけそうな

みちのくの恋 あああ蛍雪

ひとりじゃこのさき 生きてくちから

つきてうすれて ゆくばかり

もどりたいのよ 女の夢は

はなれたあの人 ほしがるの

恋しい情が のぞいてる

みちのくの花 あああ蛍雪

春夏秋冬 師走の暦

つらい浮世ね 渡るには

息も絶えるわ 死にたいくらい

二人の命も 結べずに

終ってしまうの 悲しくも

みちのくの宿 あああ蛍雪

豊太閤幻想賦

青木三郎

戦乱の世は

五月の空も 鉛いろ

十八日の 夜半の月

山吹の花 踏み散らし

尾張の砦 桶狭間

あゝあ初陣かざる 藤吉郎

山鳩さわぐ

真ッ暗がりの 梅ヶ香よ

故郷しのぶ 武士の

鎧を濡らす 山しぐれ

勝関つゞく 賤ヶ岳

あゝあ関白その名 秀吉公

動乱の世に

千成飄箏 馬じるし

平和を求め たゞ前み

鞭をばあけて 統一す

醍醐のさくら 咲きほこる

あゝあ英雄の花 豊太閤

望郷橋

おおやぶ 直子

都会の暮しに 少し慣れたけど
電車の中で 古里訛り 聞いた夜
思い出すのは 遠い故郷
春の風は 絹のように 優しく
うす紅色の 雪割草が
あたり一面に 咲きこぼれてる
そんな景色が 恋しい時は
歩道橋の 階段を登ります

鵜が群なし 渡つて来たよと
届いた母の 小包みの あたたかさ
ささくれた 心がなごむ
秋の空は つるべおとし 茜に
夕陽がしみる まぶたにしみる
山の紅葉が ふたりを染めた
そんなあの人に 逢いたい時は
歩道橋の 階段を登ります

慕情はんや節

久 仁 京 介

嫁に行かずに 帰りを待てと

言いつけ守れば 秋が行く

ハンヤーエー

あんた待ちつつ 半年や暮れたナア

あとの半年や サーマ どう暮す

泣いて二十才の えくぼが消えて

風にふるえる はんや節

都会ぐらしに 忘れちやいぬか

負けん気強さが 苦じやないか

ハンヤーエー

あんたばかりにや 苦勞はさせぬナア

苦勞するなら サーマ 共苦勞

遠くはなれて 便りもなけりや

いらぬ氣がかり するばかり

むかしなじみの やさしい友は

みせびらかすよに 嫁に行く

ハンヤーエー

踊り踊るなら 姿よくしゃんとナア

姿のよい娘を サーマ 嫁にとる

かたく帯しめ 解かないままで

あんた待ちます はんや節

利根の哀歌

伴 在 主 計

帰つて来たの 利根の古里
舳^はい舟^{ふね} ゆれてる岸辺に
佇^{たたず}めば さみしい心よ

いつか、いつしよに 生きようと
言つたあの人 もういない

母さんねむる 利根の片丘
花あやめ 供えてつぶやく
我儘を 許してほしいと

辛いだろうと 塚の風
添えぬさだめの もどり橋

遠い灯^{あかり}ともる 利根の夕暮れ
歌かなし 流れを渡つて
この胸に 愁^{おもひ}いを誘うよ

泣いて別れた あの人
今も恋しい 面影よ

ドナウの雨

渡辺千楨

ワイングラスを 頬に当て
思い出だけが 甦える

あの日とおなじドナウに 青い雨がふる
一人きて ひとり聴く ホテルの窓に
もう灯が濡れて 点るのよ

ピンクに染めた 爪もない
花のいのちを 偲ぶだけ

あなたと会った教会に 懺悔の雨がふる
うすれゆく 恋ごころ 色は褪せても
あの鐘の音きけば 身が炎える

パレットナイフの 疵あとを
たどれば夢が もどりそう
わたしの胸にドナウの 青い雨がふる
一人きて ひとり泣く 河の流れに
いつの日また会える あなたなの

東京かくれ街

中村 蔑一

親に背いた 恋だから

仕方がないのね この暮らし

北のふるさと 逃れて捨てて

袋小路に 人目を忍ぶ

東京 東京 東京かくれ街

辛くないかと 云うあなた

我慢をするわと 云うわたし

いつか二人が 許されるまで

強く生きましょ 寄り添いながら

東京 東京 東京かくれ街

冬にや日陰に なる部屋も

春には明るい 日が射すわ

花を一輪 湯のみにさして

夢と云う名の 灯りをともす

東京 東京 東京かくれ街

東京ダモイ

八木 吾郎

涙が涸れ果て 悔しきいずこに
戦争は破れて 捕虜ユウワレこの身の
歩きつかれて 辿ったシベリア
男の青春は 寒さに負けないよ
遠い祖国の母の笑顔は忘れられない
雪どけ水で生きる明日は忘れられない
やがてくる春 その春に
いつかくる春 その春に
東京ダモイは その春に

死ぬことなんかは 覚悟の命よ
光が消え去り 望みが無い今
雪の重みの 傷痕シベリア
男の青春は どこでもハラシヨウダ
降る降る雪の 痛さもハラシヨウダ
遠い祖国の白いおにぎりおいしかったよ
握った雪のこんなおにぎりおいしかったよ
やがてくる春 その春に
いつかくる春 その春に
東京ダモイは その春に
東京ダモイは その春に

東京子守唄

倉持あきを

夢をさがしに 来た街が

夢に追われる 風が吹く

お花畑さ この街は

咲いて散るなら まだいいさ

花もつけずに 散って行く

馬鹿な女だよ 東京子守唄

命あずけた はずなのに

命さまよう 根無草

ひと雨くれば 流されて

ビルの谷間の 濁り水

ネオンちらちら ゆれるだけ

淋しすぎるよ 東京子守唄

恋に惚れたら 泣くだけさ

恋に惚れなきや 生きられぬ

男の情に 酔いたくて

飲んだあげくの 恋ねぐら

化粧おとしの 薄灯り

つけておくれよ 東京子守唄

陶 醉

おだみさを

キスして欲しいのうなじへそつと
後れ毛揺らす 甘い吐息に
燃えるわ ほんと 震えてくるの
じつと幸せ 確かめながら
いつまでも いつまでも
抱かれていたい

キスして欲しいの睫毛へそつと
險に触れる 熱い唇
離さず じつと 黙っていてね
明日を忘れて このよろこびを
いつまでも いつまでも
消さずにいたい

キスして欲しいの心のまゝに
別れの朝が やって来るまで
儂い 恋ね 花火のような
これで逢えない お別れだから
いつまでも いつまでも
抱かれていたい

戸惑い春

鈴木れい子

寒さしのぎの 暮らしのような
そんな気がする あなたの心
愛するほどに 愛されたいと
願う女の 愚かさに
指の先まで ふるえる夜は
酔ってからんで ねむりたい

春がきたなら 別れがくると
そんな気がする 一人の部屋で
愛するほどに 愛されたいと
書いて散らした 紙吹雪
指の先から こぼれる心
情けの糸で つなぎたい

愛の証しを 握んだような
そんな気がする 二人の時は
愛するほどに 愛されたいと
熱い思いを 時計の針に
乗せて戻した 出逢いの夜に
戸惑い春は まだ遠い

小さな恋のメロディ

みずの 稔

さみしい時は ひとり 涙をふいて ひとり
遠くの星へ ひとり 行つてごらんなさい
小さな 小さな 地球の
小さな 小さな 日本の
小さな 小さな 街の
小さな 小さな 恋に
泣いたことなど おかしくなるよ

七光年の 遠い 生れる前の 遠い
はるかな星の ひかり あびてごらんなさい
短い 短い 人生の
短い 短い 青春の
短い 短い 夜の
短い 短い 恋に
ねむれないのが おかしくなるよ

誰でも 誰でも 一度は
誰でも 誰でも いつかは
誰でも 誰でも 大事な
誰でも 誰でも 恋に
別れ告げて 大人になるのさ

秩父路にて

さかきじゅん

生きてくことに とまどいながら

春まだ浅い 秩父路へ

想い出と一緒に 旅しています

古いお寺の 山門前で

誓った約束 おぼえていますか

あなたに いつか 出会えるように

祈りをこめて 歩きます

こわれた夢を 拾い集めて

あなたを偲び 秩父路へ

憧れと一緒に 旅しています

いつも優しい あなたが急に

離れて行ったのは どうしてですか

やすらぎ 求め 歩いていたら

巡礼宿に 着きました

あなたに いつか 出会えるように

祈りをこめて 歩きます

陸に上がって

田畑しげき

怒濤さか巻く 南氷洋で
鯨追いかけ 生きて来た
男ぐらしを キツパリすてて
陸で生きると 決めた夜は
泣くな港の 名残り雨

なにをしたって 生きられますと
俺にすぎてる 恋女房
陸に上がれば 赤兒も同じ
よろしゅう頼むと いいかけて
照れて手にする コップ酒

俄やもめに 半年後家も
これでおわりと 笑い声
そうだ今日から お前と二人
せめて小さな 店を持つ
夢にかけよう 逞しく

姨捨ホロリ

たかぎ かずお

捨てろすてろと 女房にやせかれ
腹は煮えたつ 身は細る ホロリトセ

手こそ下さね 殺すもおなじ
捨てりやお迎え 来るお嬢ぢやう

ホロリ ホロリ ホロリトセ

——わが心なくさめかねつさらしなや
姨捨山に 照る月を見て——

お嬢背負つて 山径登りや
肩の軽さよ 気の重さ ホロリトセ

生まれかわって 来られるならば
せめてその時や しあわせに

ホロリ ホロリ ホロリトセ

すゝり泣くのは お嬢の声か
後ろ髪ひく 虫の声 ホロリトセ

月の明るさ ころの暗さ
泣いて冠着かんぎ ふりかえる

ホロリ ホロリ ホロリトセ

男涙のみれん酒

橋間哲也

わざと冷たく 別れたけれど
何もできない ひとりでは

ごめんよね ごめんよね 戻っておくれ
おまえ恋しい こんな夜は

男涙の みれん酒

重い荷物を からわせながら
おまえばかりを 責めた俺

ごめんよね ごめんよね 許しておくれ
よわいからだが 気にかゝる

男涙の みれん酒

おんなごろも 知らない俺が
今夜おまえに 泣かされる

ごめんよね ごめんよね 戻っておくれ
抱いてやりたい 細い肩

男涙の みれん酒

おとこ富士

飯塚義美

朝の光を まばゆくうけて
雪をいたゞく 富士の嶺

仕事泣きなど 死んでもすまい
好きで選んだ 道ならば

あ、富士は 苦勞耐え抜く男の姿

眉を上げれば くじける心

強くはげます 立ち姿

辛い浮世の 雨風嵐

明日をめざして 耐え抜こう

あ、富士は 望み貫ぬく男の姿

雲を真下に 見おろすように

高くそびえる 富士の山

じつと見上げりや しつかりやれと

肩を抱くよに 背伸びする

あ、富士は 花を咲かせる男の姿

男坂・女坂

新井三七二

鳥居過ぎて　も　石段を

登る勇氣も　起こらない

褪せた二人の　想い出を

数えるように　辛いから

高く険しい　男坂

そんなロマシに　遇いたいと

あなたは旅に　発ったきり

鈴を鳴らして　神様に

祈る言葉も　震えがち

ともに結んだ　「大吉」の

神籤が垣に　残るもの

夜ごと通った　百度石

そんな女性が　想われて

見えない風に　泣くばかり

銀杏並樹が　日暮れても

走る元氣も　起こらない

独りぼっちの　アパートは

虚しくとても　寒いから

緩く果てない　女坂

そんな生活が　欲しいのに

あなたは遠く　発ったきり……

男の祈り

北村直之

今夜いかかと かかる電話に
いつも都合が 悪くてごめん
会いたい気持が半分で

きまらぬ心がもう半分

夜に咲いても 笑顔やさしい君だから
いっそ抱きたい 口づけしたい

馴れぬ手つきで つくる水割り
白いうなじに ほつれ毛ゆれた
あれから一年経ったのに

深くも浅くもない二人

たとえ好きでも 口に出せない俺だから
熱い心を グラスにかくす

いちど擱んだ しあわせ人生
捨てたわけなど 聞かずにおこう
も一度夢みるつもりなら

その手を握ってみるけれど
俺も所詮は 何か求める渡り鳥
星も知らない 男の祈り

男の風車

近藤しげる

俺は男だ

芯棒一つの風車

風の吹きよで くるくるまわる

癪な風には からまわり

拗ねるつもりは さらさらないが

なぜか世間を 横に見る

泣くも笑うも

芯棒一つの風車

かけた情けを またはずされて

くやし涙の こぼれ酒

今に見ていろ あの娘が俺を

くるり振り向く 時が来る

花と咲きたい

芯棒一つの風車

母にやなんにも してやれないが

同じ布団で 眠りたい

鳴かず飛ばずも 何時かは飛ばさ

まわり持ちだよ 人生は

男の願い

石本美由起

涙 こらえて いきてきた

不幸つゞきの 過去なんか

捨て、 しあわせ 見つけよう

「なア、い、だろう」 これから先は

俺と 一緒に 生きてくれ

それが男の 願いだよ

寒くないかと 身を寄せて

抱けば ふるえる やせた肩

苦笑 重ねて きたんだね

「もう、離さない」 やすらぎ求め

俺と 温もり 分けあおう

それが男の 願いだよ

明日の約束 交したら

古い上着を 脱ぎすて、

春を呼ぼうよ あたたかい

「なア、好きなんだ」 生涯賭けて

俺の灯りに なつてくれ

それが男の 願いだよ

男のてのひら

玉利 要

蝶蝶と男の

てのひらは

花どろぼうの

罪つくり

死ぬほどうれしい

夢をみせ

ひらりと何処かへ

逃げるのね

ねんねんよいこと

てのひらで

固いつばみを

ゆりおこす

手荒にされると

憎いけど

芯から綺麗に

咲くものよ

お酒のしみつく

てのひらに

強いおとこの

虹を見る

だまされないよに

しろなんて

所詮は無理よね

女には

大 晦 (おおつごもり)

伊野上 のぼる

寒^さいつしか 粉雪に変わり

肌を刺すよな すきま風

祝う雑煮の 支度はおろか

指をぬくめる 火の気もなくて

おおつごもりの 夜がくる

惚れてめとった 女房だけれど

罪な苦勞の かけ通し

運がまともに こつちを向けば

花も咲くわと 笑って耐える

おおつごもりの ほつれ髪

となり近所の なさけに泣いて

命つないだ 日々もある

苦節十年 来年こそは

陽の目見そうな 気がしてならぬ

おおつごもりの 鐘の音

大阪暮らし

柴田恒男

着物一枚 買ってもやれず
口でごまかす アホなやつ
こんな男に 愚痴もなく
つくしぬいてる 細い肩
抱けば今夜も 曾根崎あかり
夢をむすんで 大阪暮らし

包丁にぎれば 板前かたぎ
年季仕込みの 意地がある
いまに見ていろ このおれを
腕でしにせの 心意気
空にそびえる 通天閣に
誓う男の 大阪暮らし

間口二間の ちいさな店も
おれとおまえにや 大阪城
どんな苦労も ふたりして
耐えていこうと 言っただのを
聞いとおくれよ 水掛け不動
願をかけます 大阪暮らし

大 棧 橋

高 取 武

臉合わせりや 　　臉の裏に

じんと焼きつく 　　風景ばかり

白いペンキを 　　とかしたような

海はしばれる 　　大棧橋さ

逢いたいな 　　あの子にもう一度

「日本最北端稚泊航路、稚内―大泊
昭和二十年八月最終便」

船が出るよう 　　樺太行きの

そんな声さえ 　　とぎれた駅よ

ドラも汽笛も 　　錨の唄も

古い映画の 　　大棧橋さ

逢いたいな 　　あの子にもう一度

「連絡船大正十一年壱岐丸・対馬丸
昭和二年重庭丸・七年宗谷丸」

錆びたドームに 　　海鳥飛んで

飛んで行けたら 　　飛びたいところ

赤いほっぺの 　　あの子にこの子

みんな見えない 　　大棧橋さ

逢いたいな 　　あの子にもう一度

大須の灯

滝田常晴

風に吹かれる あかりのように
揺れてまたたく 灯がいとし
消してたまるか 消してはならぬ
寄席が育てた 大須のまちに
男いのちを かけて行く

指を折るほど まばらな席に
火花散らすも 芸の道
吹くなごがらし 肝まで冷える
はねて夜空の 星影見れば
夢でダイヤの 雨が降る

尾張名古屋で 見せたいものは
浪花そだちの ど根性
呼んでむかしを 戻さにやならぬ
大須いとしや 寄席の灯守る
人のまことに 花が咲く

おねがい恋心

矢 島 弘 英

おまえは命と 抱かれたら

本気にするのよ女なら

あなたを責める 涙じゃないわ

夢のかけらが痛いのよ

おねがい もう一度 この恋心

私のしあわせ 祈るなら

別れることなど許さない

あなたにいつも 三つ指ついて

生きてゆこうと決めてるの

おねがい もう一度 この恋心

ひとりで生きてる ふりしても

心は誰かをさがしてる

あなたにだけは させたくないわ

酒で満たせぬ淋しさを

おねがい もう一度 この恋心

親子船

内田善士

「おやじ任せた 舵とり頼む」

怒濤逆巻く 北の海

叫ぶ声さえ 凍てつく漁場は

腕にしぶきが 凍りつく

重い刺し網 引きあげる

つららの花咲く 親子船

「おやじ滑るぞ しつかりしろよ」

海猫も通わぬ 吹雪く海

冷えた身体を おふくろさんの

編んだ腹巻 暖める

艫で踏んばり 帆綱巻きや

囲炉が恋しい 親子船

「おやじ今夜は 飲もうじゃないか」

潮路遙かに 帰る海

風にはためく 大漁旗を

岬 灯りが 迎えてる

急げ船足 波を蹴り

汽笛もはずんで 親子船

おやじの願い

庄 坪 正 雄

好いて好かれて 一緒になつて

悲しい時や つらい日も

きつと来るのさ きつと来る

いつか分かるよ おやじの苦勞

どうか幸せ いつまでも

おやじの氣持も 知らないで

嫁いでゆきます 娘です

両手合せて 氏神様に

たれる頭かぶに 白いもの

どうか幸せ いつまでも

愚痴になります おやじの想い

一緒になつて 苦勞する

これも世代と いうものか

おやじの願いが 届かぬままに

どうか幸せ いつまでも

おやじの島

—— おやじの眠るふる里 ——

新條カオル

おやじの愛した ふる里を

今はおふくろ 一人で守るヨ

冬の松島 海苔摘む頃か

涙の向こうに あゝ 揺れる島灯り

おやじの代わりに この俺が

きつとおふくろ 支えてみせるヨ

離れ小島に 雪飛ぶ頃か

破れた合羽が あゝ 忘れ形見だよ

おやじの苦勞が 泌み込んだ

舟を人手に 渡されようかヨ

吠える海鳴り この俺呼ぶか

明日は帰るか あゝ おやじ眠る島

お前と一緒

村上 文恵

ほゝを流れる 涙の糸で

編んでいるよな お前の運命

指の先まで か細くなつて

生きて来たのか 今日までひとり

抱いてやりたい お前の命

どこを歩けば 幸せ続く

人生に出るのと お前は泣いた

暗いトンネル 歩いて行けば

いつか青空 かならず見える

俺と陽の目を みようじゃないか

長い月日を 苦勞に耐えて

紅で消せない お前のかげり

気にはするなよ ほゝえみひとつ

添えたエプロン 誰れより似合う

泣くも笑うも お前と一緒

おふくろさんへの土俵入り

真弓田幸一

白雲なびく 故郷の

山ふところで 静かに眠る

俺の生命の おふくろさんよ

「只今 戻りました……」

どうか見てやっておくんなさい」

これが綱です 土俵入り

やぐら大鼓に あこがれて

夢ひとすじが 親への不幸

俺の生命の おふくろさんよ

「目をつむると 夜汽車の汽笛や

おふくろさんの涙を思い出します」

今日は手向けの 土俵入り

心をこめて 送られた

柿、くり、りんごの 酸っぱさ甘さ

俺の生命の おふくろさんよ

「正月は正月 節句にやあ節句で

季節の食いもんをごつつあんでした」

これさ男の 土俵入り

想い出新橋烏森

牧 房 雄

赤い鼻緒の 駒下駄が
カラコロひびく 石だたみ
お座敷前の 普段着で
詣るあの妓の えり足が
ほんのり匂う 烏森^{からすもり}

裸電球に 灯が点り
縁日通りは 人の波
戸板に並んだ 古本の
表紙めくれば 夢二画の
口絵の女も 若かった

女ごころの 移り気を
染めるガードの ネオン街
ふり袖姿の 蝶々の
甘い花粉に 酔い痴れて
泣いた夜もある 恋もある

変る広場に 駅ビルに
昔の影も 夢もない
霜のちらつく 眉あげて
月にいずこと 尋ねれば
ここは新橋 烏森

面影橋

下野登美子

72

渡りきれない 女はいつも

橋の途中で 息をつく

ばかりですか ばかりですね

冷たく 流れる この水に

面影 浮かべて 今もなお

待ちつづけるのは ばかりですね

指をからめて くちづけをした

橋の欄干 背もたれて

無茶ですか 無茶ですね

あなたの心が あの日から

私の ものだと 決めつけた

恨んで 泣くのは 無茶ですね

白い山並 夜明けに 続く

橋を あなたと 渡りたい

だめですか だめですね

噂も 途絶えた 人だもの

季節に 埋もれて 実らない

思い出 捨てなきゃ だめですね

面影山唄

たなか ゆきをを

便り待つかヨー　まだ寝もやらず
一節切り吹く　山風
薄い縁だヨーホ、ホイ
薄い縁だ　あの娘は

手織り紬のヨー　襟元合わせ
肩で泣いてた　花こぶし
榎火とろりとヨーホ、ホイ
榎火とろりと　揺れる面影

肌で温めてヨー　泪で受けた
恋の地酒は　なぜ熱い
今は情ないヨーホ、ホイ
今は情ない　祝い唄

指にたらないヨー　小さな夢を
どこへ連れてく　虎落笛
やがて氷柱のヨーホ、ホイ
やがて氷柱の　並ぶ冬

女^{おん} 郎^な 橋^{はし}

ごとう としのぶ

今日の別れに 泣くだけ泣いて

すがりつきたい お母さん

家の為ゆえ 愚痴もない

あれが郭^{くわく}の 紅^{べに}灯^{あか}り

母と娘の 運命哀しい女郎橋

貧乏ぐらしも 倖せでした

母娘^{おやこ}二人で 暮す身に

身売りする夜は 深酒で

酔って咲かせた 狂い花

遠い故里 春を待ちましょ女郎橋

船が着きます 港の町で

今夜誰^{だれ}方の 紙人形

耐えて忍べば なみだ月

母の病いの 癒^{なを}る日を

祈る夜空に 両手合わせる女郎橋

女があげる別れ唄

平井健一

つみな人です 私から

別れ言葉^{ばな}を 聞くなんて

あなたこれから どうするの

心配しなくて いいものを

私は馬鹿な 女です

一人暮らしの 淋しさに

耐えてゆくほど 強くない

女ですもの この先は

必らずいい人 探します

あなたのことは 忘れます

とめることさえ 出来ないの

それがあなたよ あなたです

せめて一言 欲しいけど

せつなくなるから もういいわ

私あげる 別れ唄

女の生きがい

山田博康

76

これ以上ひと筋に惚れても駄目ですと
あなたから言われても どうにもならないわ
あなたが私の 初恋なんです
愛する喜び 小さなしあわせも
逃がしはしないわ 捨てないわ

しおらしく咽ぶよに 泣いても無理ですと
あなたから言われても 諦め切れないわ
あなたが私の 止まり木なんです
体の芯まで しびれたあの夜を
忘れはしないわ 消さないわ

おとなしく聞きわけて くれてもいいですと
あなたから言われても 後へは引けないわ
あなたが私の 生きがいなんです
苦勞はいとわず やさしくつつましく
合わせてゆきます 尽くします

女の肩は風の宿

平野ひろし

風のお宿は どこにある

さすらい女の 肩にある

別れたひとの 幻を

旅路の果てまで つれてきて

おまえがほしいと 戸をたたく

風のお宿の ため息は

さすらい女の 忘れ物

紅差し指が 覚えてる

男の背中の 冷たさを

畳に「の」の字で なぞる夜

風のお宿は 窓がない

さすらい女は 戻れない

落ち葉と花と さよならが

夜明けにつないだ 夢の中

ないないづくしの 唄になる

おんなの裏酒場

高野 礼子

灯り乏しい 止り木に

すすり泣くよな 雨の音

あなたと暮して いた時は

気づかなかつた 優しさが

しみじみ恋しい 裏酒場

気まま云っては 困らせた

酔えば未練が ますばかり

あなたの外には 愛せない

胸に消えぬ 温^ぬもりが

燃えて切ない しのび酒

逢いにゆきたい すがりたい

想いきれない なみだ雨

あなたは幸せ みつけてと

瘠せた肩を ふるわせて

無理につぶやく 裏酒場

女の恋唄

伊藤 悟

世間の掟は どうであれ
あなたの愛が あればいい
お願いその手で 抱きしめて
たとえ命が 枯れようと
盡して生きたい どこまでも

いっしょに暮らせぬ 淋しさは
承知でついて いくわたし
お願いその手で 抱きしめて
もしも噂が たったなら
私が黙って 死ねばいい

女にとっての 生き甲斐を
あなたに逢って 知ったのよ
お願いその手で 抱きしめて
今日という日が 夢だって
もやす女の 恋炎

女の交差点

藤沢庸子

80

あなたの背中の冷めたさに
別離わかれの近さを予感して

たたずむ 女の 交差点

茜の色濃い 夕焼は

わたしの 未練の残火ね

あなたに すがって いく様に

この次 逢える日 聞くんて

愚かな 女の 交差点

無情な夕風 からかつて

わたしの黒髪乱します

男と女の愛なんて

儚なく 消えゆく虹だわと

つぶやく 女の 交差点

諦色あきらめいろした 黄昏が

わたしを すぎなく包み込む

おんな舟

黒川良人

本気になつたら 怖いから
一步離れて 見ています
惚れて振られて 傷ついて
流れ流れた おんな舟
恋の嵐の 苦しさは
二度と 二度と
知りたくない 私だから

あなたの誘いを 断つて
わざと振り向く 強がりも
弱い女の のがれ酒
酔えば乱れる おんな舟
夜の巷を 流れ行く
辛い 辛い
運命に泣く 私だから

あなたがそんなに 言うのなら
過去を忘れて もう一度
恋の情に すがろうか
行方知らずの おんな舟
明日のことなど わからぬが
せめて せめて
賭けてみたい 私だから

おんな・ひとり酒

仁井谷俊也

お酒は嫌い 男も嫌い

生きてゆくのも もう嫌い

グラスにつぶやく ひとり言

ホントが半分 ウソ半分

聞かせる男（ひと）は もういないけど……

淋しいね 悲しいね 女のひとり酒

信じていたの 尽くしてきたの

だからよけいに 悔しいの

ため息ついでる カウンター

うらみが半分 愚痴半分

涙の種に なるだけなのに……

せつないね 苦しいね 女のひとり酒

かえってきてよ 戻ってきてよ

むかしみたいに 愛してよ

面影しので みれん唄

あきらめ半分 夢半分

残り火胸で ちらちら燃えて……

恋しいね 泣きたいね 女のひとり酒

わたしは希望のぞみという女

佐藤 進

一生一度の 恋をして

死ぬほどつくして 棄てられた

男なんか 二度とは惚れぬ

女のおもちゃに してやるわ

「今夜もおいで」と ネオン鳥

とまり木とまつて 羽ばたくの

わたしは希望と いう名の女

くよくよしたって 泣いたって

生計せいけいの足しには ならないわ

甘い夢みて 酔ってたわたし

男をみる目が なかつたの

涙でお酒を うすめたら

馴染みのお客も 来なくなる

わたしは希望と いう名の女

きれいな衣裳を 着替えれば

乳房の重さが むなしいの

意地を張り合う 女の街で

弱気をみせたら なめられる

お店を持つまで 持てるまで

誰にも負けずに 頑張るわ

わたしは希望と いう名の女

「わびすけ」の花

鈴木 貢

窓辺の庭の 植込みに
伸びる余地すらなきままに
互いに生きる 定めです
あなたと二人 精だして
どんな花咲く 姑椿きょうちん

登り下りの 坂の道
たすけあいつつのり越えて
険けだしき年も 暮れて行く
来年こそは 二人して
蕾つけます 姑椿

外吹く風も 今宵には
静かになって奥座敷
夫婦夫婦の道を 始めから
ひとつひとつに振り返る
その名 佗助たすけ 姑椿

忘れ旅

水上幸子

暮れかかる 紫色の秋の富士
あなたに見せたい 眺めです
傷つけあって 別れたけれど
あなたと私は よく似てた
だからなおさら 恋しくて
忘れられずに 忘れ旅

春の日の やさしい愛のはじめ頃
ふたりで歩いた 田舎です
あの日あなたと 笹舟おって
浮べた小川も 秋の色
ふたりで渡った 丸太橋
忘れられずに 忘れ旅

暮れのこる 墨絵のような夕富士は
淋しい私に 似合いです
できることなら あゝもう一度
やりなおしたい 気持です
遠いあかりが にじみます
忘れられずに 忘れ旅

湾岸道路

若林澄人

小さな自動車に 着替えだけ
積んで旅立つ 故郷の村

うしろばかりを見ているおまえ
おもい切るんだ

辛い涙の 街あかり

湾岸道路は ふたりの旅路

悲しくなったら その時は
青いりんごを かじるんだ
険つむつて夢でも見なよ
雪になるのか

風が寒いよ 身に泌みる

湾岸道路は ふたりの旅路

どこかに落ちてる 倖せを
いつかふたりで つかもうな
肩にもたれてうなづくおまえ
たとえ明日は

夢が冷たい 夜明けでも

湾岸道路は ふたりの旅路

海峡酒場

田村重雄

男女の間に 流れる

ネオン川

積る話の 捨ててる川

恋にやぶれて 身をなげて

あなたに救って ほしかった

馬鹿な 女の 海峡酒場

冷たい別れに 死ぬほど

涙かれ

なんでいまごろ さすらうの

誰れが唄うか 恋唄を

心をこんなに しめつける

馬鹿な 女の 海峡酒場

幸せ素通り 嘘つき

裏通り

波の飛沫の 浮世川

二度も三度も 躓いて

それでもあなたを 追いかける

馬鹿な 女の 海峡酒場

海峡ひとり

甲斐新

女 女 女がひとり

夜の海峡 渡るつらさよ

親の許しも 貰えぬくせに

抱いたあなたが 憎らしかった

今更愚痴ね 女の愚痴ね

わかつてゐるのに わかつてたのに

暗い波間が また泣かす……

狭い 狭い 狭い小島を

追われ海峡 みじめなわたし

馬鹿な娘と 叱った母に

頬の痛さを かみしめたのよ

わたしって駄目ね 女って駄目ね

耐えてきたのに 耐えてゐるのに

遠い漁火 胸にしむ……

汽笛 汽笛 汽笛を残し

夜の海峡 女の潮路

嫁取り話も 日取りも決めた

そんなあなたを 遠ざかるのよ

わたしの運命 女の運命

こころ細さが こころ細さに

港灯りに 泣けてくる……

可^か児^にの夜

白川 鮎太

あなただけよと 身も世も捨てて

恋の虜に なりました

泣いて甘えた あの夜の

熱い情けの くちづけに

肌も濡れます 可児の夜

いやになるほど 好きなのあなた

縫りたいのよ いつまでも

ままにならない 運命^{きまつめ}でも

ひと夜の恋に 溺^なれたい

酔って泣きます 可児の夜

抱いてほしいの このままそつと

人妻^{ひとつま}という字が にくらしい

しょせん添えない 仲ならば

生まれ変って 逢^あいたい

夢をください 可児の夜

刈干し十三夜

——刈干切り唄入り

夢

虹 二

背せの刈干し 降ろして黒馬あおの

脚あしももんだし 飼葉かひもあげた

オーラ おまえも 疲れたろうな

オーラ オーラと 鼻面はなづ撫でりや

外は明るい 十三夜

へこの山の刈干しや すんだよ

明日あすはたんぼの 稲刈いねかりろか ヨ

これで飼葉かひの 仕込みも出来た

父ちちに代わって 刈干し終えて

オーラ 厩栓うまづ棒 鳴らすじやないよ

オーラ オーラに 鼻擦り寄せて

外は明るい 十三夜

鏡のわたし

秋本 敦

どんなに若く 見せたって
鏡のわたしが 知っている
思いどおりに ならないものよ
好きといわれて わたしも好きと
いうにはあなたは 若すぎる

暮しのために 化粧する
鏡のわたしは 誰のもの
たった一人の 男と決めて
燃えるこの肌 あげたいけれど
あげたらあなたが だめになる

愛してくれて ありがとう
鏡のわたしが 泣いている
恋の炎は いつかは消える
なにもいわずに さよならします
さよならするのが 運命です

語り明かそう何年ぶりだろ

田中凡夫

君の帰りを どれ程か

待っていたんだ この僕は

逢えば涙も 湧くだろう

逢って何にから 語ろかな

何年ぶりだろ

積る話も 山程あるさ

君の帰りを ふる里の

海も小川も 待っていた

小舟浮べて 釣もしよう

汐の匂いを 嗅ぎながら

何年ぶりだろ

幼心の 昔にもどり

君の帰りを どれ程か

待っていたんだ 逢いたくて

幼馴染の 初恋の

夢もぼろぼろ 破れたよ

何年ぶりだろ

語り明かそう 酒呑みながら

肩ぐるま

佐久間常夫

野良へ行くかと 頭を撫でて
おやじやさしい 肩ぐるま
子供ごろが 弾んでゆれて
小手をかざせば 空の果て
山の蔭まで 見えて来る
そんな気がした ふるさとよ

祭り太鼓の 響きに酔って
おやじご機嫌 肩ぐるま
並ぶ出店や 素人相撲
みんな見下ろす うれしさに
燥ぎすぎでは 叱られた
年に一度の 鎮守さま

偉くなれよと でっかい声で
おやじ子煩悩 肩ぐるま
男だったら 空より広い
心持つんだ 生きるんだ
ビルの谷間の 夕焼けが
思い出させる 肩ぐるま

片恋占い

角田摩由子

あの人 星は みずがめ座
生まれは京都 午の歳
トランプ繰る手が あつくなる
夜毎ひとりの 恋占い
実る…実らない 実る…実らない
恋は…実らない 実らない

私が声を かけなけりや
見つめてくれる こともない
綺麗に生まれて 来たかった
燃える思いを 恋占い
届く…届かない 届く…届かない
思い…届かない 届かない

起きても寝ても あの人
心を占めて 悩ませる
一度でいいから あの胸に
奇跡祈って 恋占い
起こる…起こらない 起こる…起こらない
奇跡…起こらない 起こらない

絡み酒

叶 命 恵

飲めば飲むほど 絡み酒
他人はそれを 嫌がつて

一人二人と 席を立つ

けれど私は 嫌わない

貴男のすべてに にじみでる
過去のつらさが わかるから

両親に捨てられ 生き抜いた

故郷の父さん 思い出す

ふだんは無口で 良い人が

飲んで昔に あと戻り

飲むほど心が 乱れ酒

悲しいお酒ね 絡み酒

生きるつらさも 喜びも

お酒にたよるの よくないわ

一人心を 痛めずに

聞くわ私で よかったら

貴男の心の 絡み糸

一緒にほどいて 笑い酒

かくれんぼ酒場

塚 谷 清 一

泣いて未練が 消せるなら

それでもいいさと 風が吹く

暗い裏街 ネオンの陰で

嘘と真実^{まこと}が かくれんぼ

もういいかい… まあーだだよ…

もつと酔いたい ひとり酒

どうせ遊びの つもりでも

いつかは苦しい 恋になる

夢をつなげば 酒場の隅で

影と影とが かくれんぼ

もういいかい… まあーだだよ…

なぜか心に しみる酒

憂さを捨てたい 夜だから

すこしは濃いめの 酒がいい

路地をながれる ギターの唄に

夢と涙が かくれんぼ

もういいかい… まあーだだよ

街にやらずの 雨が降る

かくれんぼ峠

荒川利夫

どこへ行こうと ふるさとに

泣いて……

泣いて戻って くるなよと

風がこの肩 また叩く

夢をここに 旅立つ俺を

どこで見送る あの涙

好きなあの娘が 淋しいと

俺に……

俺に振ってる 手のように

白い野花が 揺れている

詫びている身に 峠の風に

聞こえるんだよ さよならが

街へ行っても 忘れない

つれて……

つれてゆけない バスを待つ

淋しすぎるよ 青空が

山や景色に おもいばかり

つらい別れの 道に立つ

風花の女

三丁目高詩

98

髪の乱れに 添える手の
指の白さが 目に痛い
別れ切ない 夜明けの宿で
握りしめても つかめない
君は人妻 風花の女

愛を重ねて 流されて
いつか溺れた 恋の淵
燃えて乱れて やつれたからだ
抱けば今にも 折れそうな
心泣けます 風花の女

背中あわせて 爪をかむ
そんなしぐさが いたわしい
寒い季節を こらえてみても
春に咲けない さだめなら
せめて舞い散れ 風花の女

風花の宿

河野充伸

夢で泣いてる 自分の声で
目覚めりや貴方が そばにいる
これも夢かと 唇を
何度も噛んでは 確かめた
倅せ冷めるな 風花の宿

無理を承知で せがんだ旅に
だまって貴方は 来てくれた
寝物語に よく聞いた
男のけじめは いらないが
思い出下さい 風花の宿

人に隠れて 夜汽車で着いた
此処なら貴方と 呼べるわね
飯でいいから もう一夜
可愛い女房で いられたら
何処かへ消えます 風花の宿

仮面の街

星 秀 和

100

渴いた 都会の 情念に

暗い 心が わめいてる

愛を くれよと 言つたつて

誰も くない このひどさ

ああ 仮面の街に 傷ついて

疲れてねむる ボックスに

聞くは 車輪の 子守歌

淫らな ルビーに 惑わされ

恥を 捨てるが 女なら

愛の 言葉も 空しくて

金が 物言う 世の中よ

ああ 仮面の街の 冷たさに

遠くの 町まで 逃げたいが

ままだ ならない このつらさ

ああ 仮面の街に 傷ついて

疲れてねむる ボックスに

聞くは 車輪の 子守歌

—新郎新婦におくる—

神のめぐみ

松尾ゆきを

生まれた時から 恋人たちは

赤い細い糸で 結ばれてるという

神が織り成す 赤い糸

きらめく光の中で 今よみがえる

永遠の縁 神のめぐみ

幸多かれと……

心にともした 小さな灯り

よりそいとしあえば

明日がくるという

愛がすべての 人の世に

めでたい二人の門出 乾杯しよう

永遠の縁 神のめぐみ

幸多かれと……

宵待ち時雨

大和千泉^{ゆきもと}

102

宵待ち時雨

わたしがくれば

後^おおいながら

なぜふりそぐ

わたしが去れば

時雨もはれる

宵待ちしぐれ

なぜにわたしを

追いかける…

駅を出てから

家路にいそぐ

わたしがくれば

宵待ち時雨

またふりそぐ

なぜふりそぐ

雨に濡らして

わたしどうする

しぐれ雨…

宵待ちしぐれ

通りすぎたら

まわり路して

家路にいそぐ

どこでみてたか

またふりそぐ

化粧ながさせ

ふる時雨あめ

宵しぐれ……

夜に生きる

柊 たけし

すゝり泣くような雨

夜のとばりが 都会をつゝむと

やがてネオンが 眼をさます

ジャズが流れるクラブは 魂がゆれる

酒 酔 恋 ホテル

遊びのつもりと 棄てられた私

泣いて 泣いて 泣いてあきらめた

イミテーションの ネットクス

キラリ光って お似合の バー クラブ

今は涙かれて 夜に生きる

むせび泣くような雨

時を流して ガラスの指輪に

過去が悲しく よみがえる

すてゝしまえば良いのに あの人のことは

恋 愛 嘘 噂さ

私のからだを 通りすぎてゆく

すねて すねて すねて酔いどれで

イミテーションの イヤリング

ゆらりゆらゆら お似合の バー クラブ

今は涙かれて 夜に生きる

夜の浜辺

新谷政浩

浜の砂地に 幾たびも

書いては消した 愛の文字

波が来るたび 消せない疵が

別れた夜の 哀しさと

重なり合って うづく胸

流れ辿って 此の海辺

暮らした五年 寒い日々

ミルクも買えず 泣いてたお前

膝でむづかる あの児の声が

切なく今も 責めてくる

遠い憶い出 古里も

泪でかすむ 夜の海

波間にゆれる 漁火みつめ

何時か逢えると つぶやいて

一人で唄う 愛の唄

夜の舞姫

佐々木安伸

夜に舞うのは 何の蝶
蜜の甘さに 酔わされて
羽根を休めた 恋の花
それが棘ある 徒花で
翔ぶに翔べない 夜の蝶

夢を見るのよ 涙夢
消えたネオンの 別れ街
信じられない 冷たさに
綾な衣裳も 泣き濡れて
翔ぶに翔べない 夜の蝶

飲んで酔えない 酔いきれぬ
暗いカウンター 片隅で
鏡を覗き 紅おとし
涙ぬぐって 瞳を閉じて
翔ぶに翔べない 夜の蝶

夜の砂時計

佐藤 正美

106

思い出が歌い出す 私の心で
通り過ぎた 風の記憶

あの人は もういない

いおてあも も一度強く

いおてあも 私を抱いて

恋は切なくて ギターのトレモロ

そつと重なる 夜の砂時計

レモンティそんな色 夕陽のシャワーを

ふたり浴びて 愛に酔った

時はもう 夏の果て

いおてあも 言葉にすれど

いおてあも 尽きせぬ想い

夢と知りつつ 手紙をしたため

ひとり溜息 夜の砂時計

いおてあも 忘れはしない

いおてあも あなたのぬくもり

ほほをぬらして あふれる涙に

心乱して 夜の砂時計

夜ふけの町で

砂見 爽

会えば別れが きっと来る

可愛いあの娘の 微笑みが

今もちらつく 夢にまで

男が男が しのび泣く

夜ふけの町は 霧のなか

恋の炎に 傷ついた

弱い女の 秘めごとを

好きで通った あの町の

女が女が むせび泣く

夜ふけの町は 霧のなか

ネオン流れる 歌舞伎町

ビルも眠った 静けさに

さよならだけは いわないで

誰かが誰かが すすり泣く

夜ふけの町は 霧のなか

夜明けの訪問者

山北由希夫

108

逢いたいわ あの人の声かしら
窓を打つ風の音 訪問者
心では 他人でも
からだでは おぼえてる
よろこびに 燃えた日々
一人占め したかった

ひざを抱き ほんやりと部屋の隅
たまらない淋しさが しのび寄る
冷めかけた コーヒーは
ほろ苦い 恋の味
しみじみと 置手紙
くりかえし 読む夜明け

窓灯り 夢灯りつけたまま
訪問者待つ気持 泣けそうよ
浮気ぐせ なおらない
いいわけの へたなひと
今ならば 許せます
そばにいて 欲しいから

吉野山

萩原秀夫

春はうぐいす 沢越え渡り
鳴いてうららか 夢の里
吉野の山は はなやかな
桜霞に 義経静
たわむれ遊ぶ 花の影

へしずやしずしずのをだまき くりかえし
昔を今に なすよしもがな

誓いあらたに 義経さまと
祈る静の 恋ごころ
吉野の山に 雲低く
迫る追い手は 鎌倉勢か
紅葉はいまや もえ盛る

へ吉野山峯の白雪 ふみわけて
入りにし人の あとぞこいしき

さだめ哀しき 乱世にありて
咲いてはかなく 散る花か
吉野の山に 降る雪に
つもる想いの 名残りを惜しみ
別れにひらく 舞扇

大漁酒

岩瀬ひろし

海がナ―

海が凧いでも 魚はとれぬ

魚とれなきや 命とり

貧乏なんかは 苦勞じやないが

老いたオヤジに 安焼酎の

一本買えない 情なさ

獲ればナ―

獲れば捕まる とらねば喰えぬ

海のオキテよ なぜむごい

昔はよかつた 海幸積んで

ニシン御殿と もてはやされた

オヤジの言葉が じんとくる

蟹をナ―

蟹をとうるか コンブをとろか

せめてアキアジ とれるまで

いい夢見ないで とうとう死んだ

オヤジ見てくれ この大漁酒

たつぷりお墓に かけてやる

たった五つのかなだけど

上田有策

ありがとう たった五つの かなだけど

心温もる ほのぼの言葉

毎日たのしい しあわせは

やさしい皆んなの おかげです

先生 友だち おてんとさん

とうさん かあさん ありがとう

おめでとう たった五つの かなだけど

心の こもった ほほえみ言葉

お金じゃ買えない 贈りもの

お誕生日に 七 五 三

入学 卒業 ^{ハツチ}二十の日

お嫁入りには おめでとう

さようなら たった五つの かなだけど

心の通った さわやか言葉

今度会う日の 約束の

指切り代りに 言いましょ

真ッ赤な夕日よ 小鳥たち

あしたの朝まで さようなら

騙し船

山本恵三子

112

女は ルージュを 薄めにかえて
惚れた男を 待ちわびる
港の灯りが にじんで見える
あの日抱かれた 安ホテル
女は 今でも 信じてる
今夜 男の 帰り船

女は 鏡の 自分に向かい
泣いちゃ駄目よと 叱ってる
男の好みの 長めの髪を
明日は切ろうと 思ってる
お酒に 今夜は 酔いどれで
酔って おぼれて 揺られ船

女は 男が もどった夢で
寒い夜明けに 目が覚める
膝小僧かかえて もいちど寝よか
夢のつづきが 欲しいもの
女は ほんとは 知っている
帰るもんかよ 騙し船

旅の宿

木立雄幸

冬の海峡 漁火ふたつ

流れる涙に 似ています

こころを揺さぶる みちのく岬

寒い北風 なぜ責める

いのち枯れそな ああ…旅の宿

暗い波間に 悲しい汽笛

燈台つつんで 雪が舞う

運命を憎んだ おんなの愛に

沖の海鳴り ひびくたび

貴方呼ぶよな ああ…旅の宿

死ねと言うよに いじわる吹雪

フェリーの灯りも 消えてゆく

抱いてはもらえぬ この夜が淋し

恋の弱さに 又泣けば

胸が裂けそな ああ…旅の宿

恋 情

杉 山 英 香

114

朝目覚めれば 帰るあなた

強くもつと強く 抱いて下さい

ひとつの約束も 出来ない二人なら

喜びが拵がれば 哀しみは深くなる

それでもそれでも 尚 あなたを……

首に胸元に あざをつけて

今度逢える日まで 消えないように

灯りを消した部屋 あなたの寝息だけ

肩を抱くその腕を いつまでも離せない

夜明けは夜明けは すぐ くるから……

成さぬ恋故に 夢を緬ぐ

先を少しばかり 私に下さい

今なら間に合う 幸福つかめという

戻り道捨てました 幸福は咲きました

こんなにこんなに ただ 愛して……

追伸

諸我聡一

春の日暮れにこの手紙したためています

左下がりの癖文字 覚えていますか

窓の外では鳥達が 風と遊んでる

二人背中向けたのも こんな日でしたね

つまらぬ事で喧嘩して 大事な人を見失い

季節は春を教えても 心の冬は消えません

追伸 もう一度逢ってくださいませんか

春の夜更けはまだ寒く 淋しくなります

一人飲んでるコーヒーも どこか味気ない

あなた今では 良い人が出来たのでしょうかね

昨日見たよと友達が 電話くれました

お酒も煙草もやめたけど 泣き癖だけが直せない

季節は春を運んでも 心に雪は降りつもる

追伸 もう一度 愛していませんか

追伸 もう一度 愛してくれませんか

壺 占 い

荻 真利子

壺を見るたび 私思うのよ
女は壺に よく似てるって
壺にも いろいろあるけれど
さしづめ私は どんな壺
傷を隠して今にも壊れそうな
埃かぶった壺かしら……

花を活すたび 一寸手をとめて
男を花に たとえてみるの
花にも いろいろあるけれど
ところであなたは どんな花
心隠して大樹にからみつく
うす紫の藤かしら……

壺を手にとり なでて楽しむの
表と裏の 秘密をさぐるの
壺にも いろいろあるけれど
やっぱり私は 重い壺
時代おくれの いびつで不器用な
投げ入れ好きの壺かしら……

つっぱり芝居

宇山清太郎

女拾った 泣かせた 捨てた
意地も通した けんかも買った
親と故郷に 背中を向けて
馬鹿もつらいぜ 馬鹿もつらいぜ
つっぱり芝居

生まれながらの 悪人^{わる}などいない
恋もあつたさ きれいな夢も
みんな世間が つぶしてくれた
理くつ抜きだぜ 理くつ抜きだぜ
つっぱり芝居

すねをかちって 気楽な奴にや
おれを嘲ける 資格はないぜ
何もないから 体を張って
生きて行くのさ 生きて行くのさ
つっぱり芝居

通勤野郎

小島高志

「冬の朝家を出る時の寒さったら…ないね」

朝の五時半 夢うつつ

行かなきゃならぬと 眼をさます

女房小供の 為ならば

飯も噛み噛み 家を出る

駅へ自転車 乗り捨てて

とび込む時間は どんびしゃり

すし詰電車の つり皮に

離すもんかと しがみつく

「おい 今日電車が遅れるってさ…チエツ

どうしてくれるんだよ」

始業合図を 五分過ぎ

着替える間のない 昨日今日

課長のにらんだ その顔が

なにやら鬼にも 見えてくる

「時には明るい中に帰って ぐーとやりたいね…」

会社を終って 駅前で

いっぱいやるのも 束の間さ

時計を気にして 一日の

今日と云う日が 過ぎてゆく

月夜の忘れ貝

—— わすれがいのファンタジー ——

成瀬 左千夫

思い出すさえ 佗びしいからは
みんな 忘れて 忘れ貝
月のひかりが ささやく夜の
青い浜辺は つめたかろ

心いたんで せつない夢は
みんな 忘れて 忘れ貝
波のうたごえ 潮騒きいて
眠る浜辺は さびしかろ

呼べば浮き出る 面影さえも
みんな 忘れて 忘れ貝
海のロマンを 包んだままで
埋める浜辺は かなしかろ

—— 能登の はまべは むなしかろ

ネオン砂漠に

大森富士子

夢と消えたわ あの人と
情け重ねた 思い出は

だけど私は 生きていく
ネオン砂漠に ただひとり

春の野原の たんぽぽは
かえるあてない 飛行士の
花の墓標と きいたけど
ネオン砂漠に 待って咲く

飛行機雲なら 消えるのに
恋の未練は 消されない
何を信じて どここの空
ネオン砂漠にや 遠すぎる

哀歌ばかりを 唄うねと
肩にやさしい 声がする
どこか空似の おにいさん
ネオン砂漠に 通り雨

猫

ふくだみのる

猫という ニックネームがついてるよ

本当の名前は お酒と一緒に飲んじやった

ネオン幕しの 呼名より

すこし身に合う つもりだよ

抱いた男が 言っていた

撓う体が 似ていると

無いよりは あればいいよなものなのさ

お店の名前も 自分でえらんだものじゃない

戯れてあげよか 口説くなら

けれど痛いよ 赤い爪

よけりゃこつそり 屋根裏の

部屋で待ってて あげるから

名乗るなら ニックネームが気楽だね

すました名前は あたしじゃないよな気がするよ

惚れたつもりの 夢見ても

季節かぎりの 恋ばかり

浮気模様の 人生さ

うす目ひらいて 寝てようか

中洲ネオン恋しぐれ

傳

祖 恭

意地を張っては いけないと

中洲のネオンも 囁やいた

雨が冷たい 風に舞い

淋しく窓に 糸を引く

みんなあげても よかったわ

泣いて別れた 好きな人

甘いムードに 誘われて

歌って踊って 燃えました

薩摩訛りが なつかしく

花火のように 愛したの

きざな人だと 思ったが

やさしかったわ 私には

注いだ茶碗に 茶柱が

二つも仲良く 浮いている

きつといゝこと おきるから

心の奥に しまいましょう

残り少ない 青春を

好きなあなたに 賭けて見る

なつ姿

長谷川 洋

秘めた恋なら ゆかたの袖に
そっとかくして 忍び逢う
祭りばやしを 遠くに聞いて
夜風やさしい なつ姿

ゆれる柳が 二人の肩を
なでりや恥かし いとおしい
うつす灯影も 大川端の
瀬音涼しい なつ姿

うちわ片手に 片手は肩に
そっと寄り添う 遠花火
消えたあとから 聞える音が
胸にしむよな なつ姿

夏の後先

佐東たどる

親父を愛した おふくろが
舟に揺られて 嫁に来た
あやめの堀割り 花づたい
君もおいでよ ぼくのもと
言えば頬染め うなづいた
可愛いあの娘は もういない
悲しみ萌える 水の郷

短い命を 火に変えて
螢飛び交う 糸柳
夢見るようだと 遠くから
人がわざわざ 足運ぶ
夜が今年も めぐるけど
可愛いあの娘は もういない
涙でうるむ 水の郷

旧盆の踊りの 輪を抜けて
並びしゃがんだ 橋の蔭
作って浮かべた 笹舟に
乗せたときめき 今いづこ
何度想い出 たぐっても
可愛いあの娘は もういない
秋風間近 水の郷

ななかまど挽歌

小川比富美

秋の扇子と 捨てられて
涙を抱いて はぐれどり
女ですもの 情がほしい
ななかまどの 白き花に
せめてもしるす 紅のいろ

山の湯宿の ともしびに
滲んで浮かぶ 影一つ
過ぎたむかしは 女の唇
ななかまどの 赤い木の実
含めばホロリ 泣けてくる

昼の星なら 見えないが
あなたの星は この胸に
女ですもの 旅行く身には
ななかまどの 白き花
溜息いとし 茜雲

泣き砂浜

藤田鶴之丞

捨てた女が 後追うように
打ち上げ波が 追いつがる
遠い過去なら あきらめつくが
踏んだ砂さえ くずれ泣く
女の声か 泣き砂浜よ
十八鳴 勿末 九十九里

勝手気ままな 男の仕打ち
ハマギク一つ ひきちぎる
ここで今更 ふりむくことは
男らしくは ないけれど
泣かずに欲しい 泣き砂浜よ
琴引き 泣き 角海浜

波が消しくて さすらう旅の
足跡がす 海の風
別れ別れの 出直しならば
春をはこべよ ウミツバメ
泣きごとというな 泣き砂浜よ
波来浜 青谷 恋の浦

泪ポロン

おち　としこ

お金をたくさん　くれるのね
紅いマニキュア　した指で
小切手破いて　しまいたい
でも今はちがうの
シャネルのバッグル

大事に入れて　止め金パチン

お金であなたは　気がすむの
いゝのそれなら　戴くわ

やさしさぬくもり　くれたひと
でも今はちがうの

わたしの顔など
見もせずドアを　背中ではた

お金をたくさん　くれたのね
どこへいこうか　さすらいの
おんぼろぼろぼろ　宿無しは
えゝ今はそうなの

ひとりで乗り込む
哀しみゆきに　泪がポロン

涙の港

小野津加佐

いつもこころの　ひと隅に
ひとは港を　持っている
ね・そうだろう　誰だって
生きる辛さに　耐えながら
今日もゆくのか　木の葉舟
心細いよ　時雨降る……涙の港

そつと泣きたい　夕ぐれは
昔・別れた　女に逢う
ね・未練だね　夢だって
逢えばお前に　すまないね
ひとり舵とる　枯れ葉舟
酒でおもかげ　夢を追う……涙の港

白いマストに　遠めがね
ひとは港を　恋しがる
ね・わかるだろ　誰だって
浮世しぶきに　濡れながら
帰るのぞみに　ゆれる舟
愛の絆が　支えてる……涙の港

泪の詩集

秋
ひろし

好きなお酒を 苦くして
憎い男が また消えた
どうせ酔どれ 酔ざまし
こんな女じゃ 無理もない
なのに泣けるは 誰のせい

夢を頼りに 生きていた
純な昔が 懐しい
辛い恋なら 忘れろと
淋しがりやの 弱虫に
夜が教えた 一人酒

酒の肴に この詩集
読んで聞かせて 上げましょか
胸の古傷 搔^かき
馬鹿な女が 酔どれで
書いた泪の 日記帳

生れたばかりの太陽が
胸に灼きつく珊瑚礁
おやじ草取り糖きび畑
妹は精出す紬織り

赤い蘇鉄の実が光る

あねーいいないな南はいいな

早く帰ろう南の島へ

海亀あじさし白い砂

繁るガジュマル生命ひげ

月に想いの蛇皮線鳴らしや

隣りの島から舟が来る

のどが自慢の嫁乗せて

あねーいいないな南はいいな

早く帰ろう南の島へ

南の風は生きている

石も瓦も生きている

バナナパイや恵みの実り

都会でくじけた弱い奴

しゃんとさせるぜ島娘

あねーいいないな南はいいな

早く帰ろう南の島へ

(註)「あねー」…薩南諸島の言葉で「なつかしいなあ」と
いうほどの意

LOVE IN SOHO

三木悠花

ペンキの剥がれた

ロフトの窓から

鳩が飛び立つ

汚れた羽拡げて

DONT LOVE ME,

Just MAKE LOVE

一瞬だけの

火をつけて

愛しあえたら

それもいい

DONT LOVE ME,

Just MAKE LOVE

私のきのう

あなたの明日

崩れ落ちそうな

非常階段に

猫が死んでる

なんでもなう一日

DONT LOVE ME,

Just MAKE LOVE

ワインのグラス

あけながら

時の流れる

音を聞く

DONT LOVE ME,

Just MAKE LOVE

重ねた体

はなれた心

むすめよ

菊地英夫

むすめよ

けさも少々焼けすぎた
シヤケ（鮭）は苦いか塩っぱいか
勤めに父が出る前に
つくる食事のせわしさに
ことば少なく箸をとる

むすめよ

しあわせなんてほど遠い

むすめよ

むすめよ

去年のまゝの振袖を
笛にせかれて馴れぬ手で
短いまゝに着せてやる
母のない子の宵まつり
たったひとりでかけてゆく

むすめよ

しあわせなんてほど遠い

むすめよ

むすめよ

父の帰りのおそい夜
服のほころび縫いかけて
からんだ糸の解けぬまゝ
寝息かすかにうたたねの
頬に涙のあとがある

むすめよ

しあわせなんてほど遠い

むすめよ

うわさ船

山田 晃 義

頬の涙が 置き土産

別れ言葉と 云うものね

待っているよは 捨てゼリフ

汽笛にせかれて いつかえる

嘘が落ちでしょ うわさ船

霧の港の 夢一夜

未練つのらす うしろ影

はぐれ鷗か 船灯り

恋に捨て身で 惚れたのに

錨上げれば うわさ船

情知らない 風便り

越える海峡 波しぶき

赤いちょうちん こぼれ花

乗っていけない 女なら

洒を肴の うわさ船

噂のあと

白井克治

噂聞いたよ 嫁いだことを
グラスの酒が 小さく揺れた
素直に よろこびを 遺^やれないけれど
しあわせ祈^{いの}って 涙で乾杯
ご免ね 俺には 淋しい噂

聞いて呉れるか 愛した詩^{うた}を
ネオンの影で 小さく唄^うう
聞くのが 辛^{くる}けりやあ 眠^ねっていいよ
嬉^{うれ}しさあふれ 弾^はんだ口付け
ご免ね 俺には 大事な恋さ

いつも待たせた この店だって
ほ、えみ交^まわす 言葉があつた
消された 街灯^{まちづみ}が 二人の道さ
一層君を 忘^{わす}れる旅立ち
ご免ね 俺には 小さな希望^{のぞみ}

“やがて日没、それが総てのものを染め上げる、
あなたが眠る丘に供えた白い薔薇さえも赤く、嗚
呼、私を詩で愛してくれた人、あなたは白い花が
好きだったのに……”

仄暗い酒場の片隅で待ち

ボンソワール 今晩わ 言うと

その日が始まる あの頃

詩で愛してくれた あなたと

恋に燃えていたから

それが当り前に思えていたの あの頃

明け初める辻辺で すれ違う人

ボンジュール お早ようと 言って

その日が終った あの頃

詩で愛してくれた あなたと

恋に燃えていたから

空が白らむのさえ気付かぬ日々の あの頃

「ボンソワール」モンパルナスの街角で

「ボンソワール」挨拶しよう

「ボンソワール」見知らぬ人に

「ボンソワール」気が済むまで

そして、朝が来てしまったら、還りようもない私
の時に、呼びかけよう、「ボンジュール」「ボン
ジュール」……「ボンジュール」……

歌^{うた}人^{ひと}時^し雨^{ぐれ}

夢二・牧水・光太郎慕情歌

小林金次郎

時雨^{あめ}がかくす 吾妻山^{あづまやま}

遠い山川^{とほ} 来たものを

なぜに 見せぬか 恋の山

胸の傷跡^{きずあと} おさえつつ

思い残して とぼとぼと

夢二は 哀しい 一人旅

桃の花咲く 阿武隈^{あぶくま}の

岸辺^{きしべ}さまよう つばくらめ

ちちと泣き交^かう 恋の川

愛の痛手に たえかねて

旅の歌人^{うたびと} 牧水^{ぼくすい}が

涙で 歌った 紅葉山^{もみぢやま}

智恵子のふるさと 二本松

安達^{あた}太良山^{たらやま}も 化粧して

本当の空が 呼んでいる

夢は 永遠^{とこ永久} 消えぬもの

愛の 山河に 涙する

折鶴 哀しい 光太郎

嘘つきつばめ

小出アキ

醒めても さめても もう一度
本気で見たい 夢なのに
すがれば消える さよならばかり
夢でも いゝのよ 愛してほしい
うそつきつばめが 恋しいよ

散っても 散っても 又春を
本気で咲かす 花もある
お酒に染まり 浮かれてみても
貴男が心に 住んでるうちは
本気で恋など 出来ないわ

足りない足りない づくめでも
本気な愛が あったのに
幸せなんて 気まぐれですね
なんにも いない あの日がほしい
うそつきつばめが 恋しいよ

裏通り

麻こよみ

かして下さい お酒の力

思い切りたい 男おとこがいる

赤いネオンの 実がまた揺れて

酔えずに今夜も はしご酒

つくし過ぎれば 逃げ出して行く

男心を 知りました

あなたの嘘を 見ないふりして

馬鹿ね二年も まわり道

やさしく名前 呼び捨てにして

呼んでよあなた もう一度

ヘッドライトの 洪水に追われ

一人さまよう 裏通り

裏町しぐれ

板倉 文子

時折窓をたたいて消えて

おんなを泣かす裏町しぐれ

此の頃影もみせないあんな

ほどよくおでん煮えてるのにさ

お見限りだね切ないよ

夜更けに褪せた赤提燈を

濡らしてすぎる裏町しぐれ

いい人いると聞いてもあたし

開くガラス戸にドキリとしてさ

惚れてるんだよ切ないよ

きれいな人と噂じゃ聞いた

諦めなよと裏町しぐれ

解っちゃいてもおんなの心

赤提燈の灯を消しながら

待つ身に雨が冷たいよ

裏 酒 場

根 本 昌 幸

140

のれんぐれば せつないうたが
いつも聞える 裏酒場

おとことおんな おんなとおとこ
出会ったけれど

恋して泣いた 別れて泣いた
いつも人生 さびしいものね

人が行き交う 忙しそうに

いつも聞える あのうたが

おとことおんな おんなとおとこ
出会ったけれど

愛して泣いた つらくて泣いた
いつも人生 かなしいものね

別れて知った あなたのよさが

だけど今では もう遅い

おとことおんな おんなとおとこ
出会ったけれど

悶えて泣いた 震えて泣いた
いつも人生 はかないものね

うぐいの詩

玉木 一史

許してもらえぬ 恋だから

逢わせてもらえぬ ふたりなの

陰部のほとりに 住むうぐい

恋は命と おなじもの

恋人たちの嘆きを 聞いていた

春から夏すぎ 秋が来て

ヨシ原そよがし 遡る鮭

恋にせかれて 二人が

のどを突き刺し 川の中

沈めた遠い昔の お話しさ

陰部のうぐいは 二人の

愛の血潮が 腹に染め

年経て今も消えずに 朱いという

年経て今も消えずに 朱いという

※陰部＝川口の意（アイヌのひとたちは、川は生き物と考え、水源地を頭とし逐次下流毎に胸、肘等部分の呼称する）

海の蝶

鳥羽貞子

142

海を越えゆく 小さな蝶は
悲しいわたしの姿です

青いうねりを追いかけて

あなたを乗せてる 船をさがす

あらしがくるよと カモメが啼いた

ああ ひたすらに 飛ぶ命

手紙ひとつで 旅立つあなた

いつかは戻ると書いてある

待てぬ女は蝶になる

ちぎれた羽が 痛むけれど

はるかな沖には マストが一つ

ああ もうすぐね 逢えるのね

ひかる稲妻 逆巻く波に

疲れたわたしは吸いこまれ

雨に打たれて潮まかせ

あらしが過ぎたら きつと飛ぶわ

あなたの肩に 止まってみせる

ああ 夢を見て 目を閉じる

ウスバカゲロウ

牧野おさみ

帰りたいけど 帰れない

わたしのふるさと 蟻地獄

灯り欲しさに 人恋しさに

ウスバカゲロウ ひらひらと

浮気ネオンに 身を染める

泣いた涙で 透き通る

女のからだの 頼りなさ

情け欲しさに 人恋しさに

ウスバカゲロウ ひらひらと

男ごころの 風に舞う

夜に吹かれて 流されて

思い出^{おも}温める 胸もない

ねぐら欲しさに 人恋しさに

ウスバカゲロウ ひらひらと

酒の雫で 夢を見る

能取岬

荒木忠雄

海が 吠える…吠える…涙まじりで

女の ところに 突き刺さる

どこまで 行ったら このくるしみを
捨て、 気強く 生きられるのか

あ、 ダメ…ダメ…

一人で 死ぬには 自分がみじめ
風も…風も 泣いてる 能取岬

愛が 消える…消える…不幸色して

しあわせ なんかは すれ違い

荒波 くだける 灯台 見つめ

そつと おくれ毛 かきあげながら

あ、 ダメ…ダメ…

信じた 夢でも いつかはさめて
花も…花も 散る／＼ 能取岬

胸が 濡れる…濡れる…風の言葉に

別れた あのひと 思い出す

哀しい 運命を ひきずるように

オホーツクから 明日はどこへ

あ、 ダメ…ダメ…

すがって 生きたい おんなの弱さ
雪に…雪に かくれる 能取岬

野ら犬のブルース

秋 本 昭

寒い夜風に ふるえていたと
指をからめて 笑う奴
苦勞背負った この俺に
何を求める はぐれ花
夢も咲かない 陽も差さないが
それでいいなら ついてこい

泪一粒 涸れない限り
生きる望みも あるだろう
歩きさまよい 倒れても
乾く命に 染み透る
花のお前の ぬくもりあれば
いつか安らぎ 甦る

明日は不幸か 幸せなのか
星に占う 影法師
水も空気も 泥まみれ
ころころ欺く 石の街
せめて今夜は ささやかだけど
酔って二人で 唄おうよ

くるめ木囃子^{ばやし}

英 玲 二

由緒かしこし 狐^{きつね}瓜^{うり}木様の
ひびく太鼓は 五里とどく

三里五里とは おろかなことよ
神代^{かみよ}ながらの 勇^{ゆう}み音^{おと}

へ見んさい来んさい唄いんさい
くるめ木囃子で 踊りんさい

名さえやさしい くるめ木住^{すま}宅^{たく}

心ふれあう 一、二丁目

古い床しさ 若さと融けて

笑顔やさしい 坂の町

へ囃子 同前

御堂^{みどう}(山) 脊^せ負^おうて 太田^{おおた}(川)を抱いて
あいのくるめ木 宵しぐれ

南側窓 東向けポーチ

心やすらぐ 灯がともる

へ囃子 同前

ねじり鉢巻 そろいの法被^{はっぴ}

意気ではじける 祭り唄

晴れて明るい 浅黄^{あき}の空で

風に寄進^{きしん}の 轆^おが鳴る

へ見んさい来んさい唄いんさい
くるめ木囃子で 踊りんさい

屈折の花

桜本 繁

いくら呼んでも 戻りはしない
別れた人に すがっても
どうせはかない この世なら
つらさこらえて 生きるのか
あゝ恋にはぐれた 屈折の花

こんな苦しい 心の中は
誰れにもわかる はずはない
恋の傷あと 抱きしめて
どこに探そう 幸を

あゝ恋にやつれた 屈折の花

たとえ噂の 一つや二つ
別れた人に あったとて
いまはあの日が にくいだけ
過去のきずなを 振りしぼる
あゝ恋にやぶれた 屈折の花

役者ひとすじ

水野甚太郎

芸は命と 舞台にかけて

お薦悲しや 湯島の梅の

花のころを 泣かせます

女形一代 艶姿

役者ひとすじ 道を行く

化粧ひとはけ 大入り席に

明治一代 大川端に

あわれ柳に 乱れ髪

夢と芝居に 生きてゆく

役者ひとすじ 道を行く

紅のかんざし いとしいひとに

恋にこがれて 萌えたところ

貫一宮の 幕があき

あがる拍手の 花道へ

役者ひとすじ 道を行く

山間やまあいの宿

伊藤 一生

つらい世間を 逃がれるように
咲いた谷間の 日蔭花
顔をうずめて 恥じらうひとの
白いうなじを 染める陽に
雲も燃えてる 山間の宿

過去も未来も さらりと捨てて
今に生きたい ふたりづれ
生命燃やして 螢が飛ぶと
うちわ片手に 涙ぐむ
瀬音泣く泣く 山間の宿

濡れたシャドウを かくして笑う
肩がさびしい 乱れ髪
こんなやさしい 一途なひとに
かける言葉の 端はばしも
とけて流れた 山間の宿

夜 愁

湯浅 としあき

窓をよぎる 夜更けの 迷い鳥
沖の灯り目指す あれは漁り火
此処は 海沿い 惜別原野
愛して 尽して 泣いて お前は消えた
凍りつく 想い出を 今夜も溶かす
加奈子 加奈子 胸が寒いよ

遠く響く 夜汽車の 細い笛
南風に乗って 俺に届くよ
やがて 雪解け 惜別原野
お前の 知らない 季節 巡って来るよ
花が咲き 蝶が舞う 空しいだけさ
加奈子 加奈子 春はお前さ

愛して 尽して 泣いて 今頃何処に
吹く風は 噂など 連れは来ない
加奈子 加奈子 俺のすべてさ

舞 姿

周 東 敬 二

春は桜の 遠がすみ

蝶が群れとぶ 花の宴

いかりまばゆい 盃に

浮かぶ花びら 飲み乾して

かざす扇や 舞姿

夏は夜空の 揚げ花火

映す大川 屋形船

祭り囃子も なつかしく

幼なじみと 連れ舞いの

笑まい嬉しや 舞姿

秋は黄菊の 香を込めて

廻り舞台に 灯が点る

三味と鼓の 音冴えて

揺れるかんざし 恋衣

今宵めでたの 舞姿

まぼろし女

川西美智子

152

風に誘われ かぜのよに
きらりと光る ひとだった
ポプラ並木の 石ころ道を
人目をさけて よりそう二人
あぶなげな 足もとに
あゝ、日がしずむ 日がしずむ

霧に誘われ きりのよに
しつとりもえる ひとだった
かもめ漁火 連絡船の
返す大なみ うずまく汐に
おもいでが ふきぬける
あゝ、流れ星 流れ星

雪に誘われ ゆきのよに
ボサツのような ひとだった
夜のふれあい 寝ることだけが
愛ではないと はじらいながら
口づけの さようなら
あゝ、凍る月 凍る月

迷い

高瀬臣子

きめかねて なりゆきに
まかせて別れた あなただけ
何年ぶりかで 訪ねた街の
橋の手摺も なつかしく
映す川面の 茜の空を
ひとり見ている 秋の暮れ

あの時と 変わりない
あなたの暮らしが 噂になつて
思わずたかぶる ところを隠し
歩く街並 街路樹の
枯れた梢に ざわめく風を
ひとり聞いている 秋の暮れ

あなたから 聞かされて
みたいと思つた 言葉の行方
訪ねて行つたら 見つかりそうな
夢を捨てたり 拾つたり
影も細ぼそ 夕陽の中に
ひとり佇む 秋の暮れ

松食い虫

三宅立美

銭は残して やれないからと

山に生命を かけてた親父

松のみどりを 茶色に変えた

松食い虫の コン畜生奴

山を見上げりやヨオ 泣けてくる

山の 罅は 答えもするが

誰も 恨みを 聞いてはくれぬ

気兼ねするのか からすも逃げる

松食い虫の コン畜生奴

夢が 崩れるヨオ 日暮れ空

山は 動かぬ 財産だから

守り抜くよが 口癖だった

親父すまぬと ところで詫びる

松食い虫の コン畜生奴

枯れた松の木ヨオ 切り倒す

マ
マ

門井八郎

恋から恋の　くるしさを

忘れる酒が　仇となり

おさけすすめる　女になつた

おしんほどでは　ないけれど

苦勞したのよ　泣いたわよ

町から町の　露地裏の

ネオンで夜の　身染めて

おさけ上手の　女になつた

胸で泣いてる　笑い顔

判るでしょうネ　あなたには

夢から夢と　追いかけて

逃げられながら　あきらめて

おさけ愛^{いと}しむ　女になつた

あなた相手の　からくちが

今の私の　似合い酒

結婚しませんか

山上路夫

156

こんなに気の合う 二人なんて
あんまりいると思えないわ

今度の夏が過ぎたならば

結婚しませんか

教会のお庭を借りて

サンドイッチで ウエディング・パーティ

その日はきつと青空よ

結婚しませんか

寝坊なあなたを 朝は起し

コーヒー入れて窓を開ける

南を向いた部屋を見つけ

結婚しませんか

夜になりあなたはギター

弾いてくれるわ 新しい歌を

窓には月もかかるでしょう

結婚しませんか

夢を見ているのじゃないの

二人の愛が一つになるの

今年の夏が終わったら

結婚しませんか

結婚ものがたり

どい
あきら

まわりに緑が 多いから
二人で選んだ 愛の部屋
外は木枯し 吹く夜も
月賦でそろえた ステレオや
これから始まる 生活が
バラよりきれいに 見えました

悪い娘ぶつても 可愛くて
つっぱりながらも 優しくて
道をはづれず 来れたのも
愛のころを 知ったから
一つの歯ブラシ 使った日
いっしょに行こうと 決めました

哀しい事なら 半分に
楽しい夢なら 倍にして
寒い体を 寄せあえば
いつか心も あったかく
結婚届けを 出したのは
みぞれの降るよな 朝でした

倅せなんかは 他人事と
思ったことさえ ある二人
どっちに似た子が できるのか
お腹がまあるく ふくらんで
桜のつぼみが ふくらんで
春がそこまで 来ています

原生花園

池田充男

男がひとりに なりたけりや
北へ流れて ゆけばいゝ
きのうは風吹く さびれ町
きようは海辺の 道をゆく
はまなすの紅い花
俺をいたわる 原生花園

かばそい背中に 淋しさが
揺れているよな 女を見た
どこかゝおまえに 似ていると
うしろ振り向く 俺だった
すゞらの白い花
浮かぶ面影 原生花園

海へと突き出た 知床の
遠い岬よ さいはてよ
おまえを忘れる 放浪は
どこまで行ったら 終るのか
名も知らぬ青い花
枯れてくれるな 原生花園

ふりむけど

大屋 哲夫

三十路になっても まだわからない
人生ってやつが わからない
俺は俺なり 生きてきたつもり
喜び悲しみ 涙を流し
酒くみかわした あのころあの日
人には人の 見る目があり
人には人の 生き方がある
生きていることが 人生なのか
ふりむけど 何がある
ただ歩こう つかれ果てるまで

二十才のころには もう帰れない
若さってやつが 似合わない
俺は俺だよ 悔いはないけれど
恋して夢みて 傷つきながら
さがしていたよね 心の空を
誰にもあつた 青春の
誰にもあつた 一ページ
生きていることが 人生なのか
ふりむけど 何がある
ただ歩こう つかれ果てるまで

ブルースター讃歌

原 牧 江

遙か空の果ては 銀河へ続く道

宇宙の海に浮く 地球は青い星

ピースアンドラブ 歌おうみんなで

ピースアンドラブ 宇宙へひびけと

生命あふれる星 故郷は我が地球

なつかしい母なる 我等の星地球

花は風にそよぎ 小鳥も歌う星

子供ら手をつなぎ 小犬もかけまわる

ピースアンドラブ 愛する仲間さ

ピースアンドラブ 平和な星だよ

生命育くむ星 みどりなすオアシスよ

なつかしい母なる 我等の星地球

ふるさと

古野哲也

母がいるから ふるさとは
離れていても あたたかい
菜の花畠も 山道も
村の目じるし むくの木も
昔のままに 生きていて
たまには帰れと 呼びかける

母がいるから ふるさとの
幼い頃の 夢を見る
遠い昔の おさげ髪
手には千代紙 紙風船
影絵のように かわいくて
心に優しさ 呼び戻す

母がいるから ふるさに
便りを書いて みたくなる
何年帰って ないかしら
指で教える 歳月日
田舎の匂い 虫の声
そろそろ恋しく なる頃か

故里は富士のみえる町

雪野斗詩夫

長いトンネル ぐぐりぬければ
窓にほほえむ 白い峰

南風吹く 海沿いの

故里は 故里は 富士のみえる町
やっと帰って 来たんだね

熱い両手を さしのべる

心やさしい 人もいる

あれはみかんの 花の咲く頃

ふつと芽生えた 旅ごころ

ごめんなさいね 身勝手を

故里は 故里は 富士のみえる町

風のうわさに あこがれて

あなたひとりを 置きざりに

乗ってしまった 終列車

（タイムマシンに 乗っていたような
今のわたしの この気持）

赤いみかんの 枝ごしに

故里は 故里は 富士のみえる町

生まれ変って もういちど

誓う心に なつかしい

駅があなたが 近くなる

ふるさとの家

篠原順子

別れ辛さに 泣いた夜の
小さな駅は 変らない
久しぶりだね なにもかも
笑顔やさしい 父母に
会えてうれしい ふるさとの家

都会ぐらしに 慣れたって
田舎育ちの 素朴さは
忘れないでと 云った娘^{むすめ}
今じゃ嫁いで 遠い町
逢いたかったな ふるさとの家

空の青さの 輝きに
幼い頃の 思い出が
胸にしみじみ 甦える
花と語れる 幸せに
酔ってうれしい ふるさとの家

ふるさと夜愁

山上雅人

どこかで誰かが 呼んでいる
そんな気がして 小窓を開けた
暗い夜空の 雲間から
やさしい貴男の 瞳のように
ほ、笑む星が ただ悲し

私の涙を 拭きながら
待っていてよと 小雨の中を
貴男ひとりで 旅に出た
別れぐらしの 切なさに
縋れば空し 夢模様

貴男がふるさと 出たときに
咲いていました 空木の花が
三度 蕾を もちました
逢えぬ運命に 泣く夜の
愁いの涙 いつ乾く

ふるさとへ帰ろう

黒 滝 高 一

りんご畑が 団地になって

うしろのお山も ゴルフ場

すっかり変った ふるさとだけど

盆暮れ待ってる ひとがいる

帰ろう 帰ろう 俺のふるさとへ

酒落たデパート 近くに出来て

なんでも買えると きいたけど

やっぱり手ぶらじゃ 具合が悪い

カステラ一箱 ぶらさげて

帰ろう 帰ろう 俺のふるさとへ

北へ伸びてる 新幹線で

ずいぶん便利に なったけど

だんだん近づく 故郷の景色

見つめる思いは おんなじさ

帰ろう 帰ろう 俺のふるさとへ

風雪日本海

小川 淳

佐渡は荒海ヨ 吹雪く日本海

岩を噛む波 風神岬

佇てばこの手に 届きそで

愛のぬくもり なぜ遠い

俺にお前は 失くてはならぬ

男いのち 一途 一途 賭けてきた

風に哭く声ヨ あれは鬼太鼓か

俺はさすらい 一匹野郎

ひざを揺すって 飲むくせが

寒い酒場で よく似合う

俺にお前は 失くてはならぬ

いつになれば 春と 春と 呼べるやら

時化りや一寸ヨ 先も見えぬほど

こんな夜には 夢すら凍る

胸の芯まで 炎をつけた

今も一番 好きな奴

俺にお前は 失くてはならぬ

今日も西は 荒れる 荒れる 日本海

冬 支 度

若 山 か ほ る

こだまが こだまする山のシンフォニー

トンテンカン／＼ あれは何の音ですか
トンテンカン／＼ あれはリフトを締める音

夏と冬の間を

秋が走りおりてくる

樽池 親の原

小さな愛の花よ

自然園は まもなく休みです

トンテンカン／＼ あれは何の音ですか
トンテンカン／＼ あれはリフトを締める音

塩の道を横切る

古い百体観音

樽池 親の原

あの娘はやさしかった

天狗原は まもなく凍ります

トンテンカン／＼ あれは何の音ですか
トンテンカン／＼ あれはリフトを締める音

誰もいない高原

一人がいちばん気が合う

樽池 親の原

涙が風に消えて

白馬岳は まもなく雪化粧

恋はL・S・D

鈴木陽子

168

6月が近づけば ファッション雑誌は
ジューン・ブライド伝説 書きたて騒ぐよ
そんな手にのるような 君じゃないはずなのに
グラビアを見つめては ため息ついでる
このドレス素敵ねと 話題を持ちかけ
僕のうかない返事に ご機嫌ナナメさ
愛だけがあればいい そう言って微笑んだ
あの頃を君自身 忘れているのさ
恋はL.S.D.——Long Slow Distance
続けることが 大切さ
自然なまま Long Slow Distance
愛したいね いつまでも

3年になるのよと 唇とがらす
君の気持ちも確かに わかる気がするよ
このままじゃ目かくしを されたまま泳いでく
スイミング・コースだと 瞳をくもらす
結婚は簡単さ サインをするだけ
カードのように 愛情分割払いさ
安心とひきかえに ときめきを失くすより
この恋にどこまでも 挑戦チャレンジしたいよ
恋はL.S.D.——Long Slow Distance
ギネス・ブックに載るような
恋をしよう Long Slow Distance
世界中が ライバルさ

小犬の唄

西沢 爽

つめたい雨に 泣きながら
飢えた小犬が いたんだよ
パンのかけらを 分けあつて
抱いた 男が いたんだよ

— あいつは 追われる 殺人犯 —

小犬が なめる 髭づらに
銀の 涙が 光つてた

どんな 情も うれしいか
過去に おびえる 人間は

— あいつは 追われる 殺人犯 —

あいつは いまに 捕^{とら}つて
行^いつて しまふさ 監獄へ
だけど 小犬は 忘れない
たった ひとりの 神様を

— あいつは 追われる 殺人犯 —

恋なじみ

宴

ゆり

170

昔なじみの やさしきは
胸のほくろが おぼえてる
涙がわたしの 道づれだった
お酒があなたの 道づれだった
逢えてうれしい 恋なじみ

幼なじみの ぬくもりは
うわさ話で 夜がふける
ふるさとなまりを 肴にすれば
しみじみ飲めます しみじみ酔える
夢が泣いてる 恋なじみ

誰が落して 行ったのか
雨に濡れてる 恋がある
体こわした 女がひとり
けんかに敗けた 男がひとり
似た者同志ね 恋なじみ

恋の色彩り

能勢英男

春の恋は 弾む恋

パンジーパープル 風に揺れて
溢れる若さ 馳けて行く

夏の恋は 燃える恋

コバルトブルー 波にぬれて
水平線を 越えて行く

秋の恋は 忍ぶ恋

シナモンページュ 霧にぬれて
よりそいながら 消えて行く

冬の恋は 秘めた恋

レモンイエロー 灯揺れて
倅^{かた}の夢 抱いて行く

恋の荷物

相馬詩彦

恋の荷物は どなたがくれた

アラアラ アラセ

いとしい あんなにくれた

コラコラ コラセ

旅をする時や 気をつけしやんせ

ソラソラ ソラセ

足は重いし 心はいたむ

ナンテコッタ コラセ(以下略)

うっとりする間に 骨抜きされた

やさしいあんな娘の 口もと目もと

山へ行く時や 気をつけしやんせ

ころげころげる 恋坂峠

さしたさかずき につこりうけて

酒場通いも 三年三月

酒をのむ時や 気をつけしやんせ

えくぼ一つに いま穴だらけ

恋のゴンドラ

江橋富子

あなたが言った 別れ話を
のがれるような 旅でした
ゴンドラに乗り 向うの山へ
悲しいことを 捨てに行きます
私はあなたと 離れられない

あなたと行った 愛の湖
遠くに青く 見えてます
並んだ二人 水辺の写真
抱きしめ今は 祈るだけです
私はあなたと 離れられない

あなたを奪う 憎い女を
忘れてここへ 来てほしい
ゴンドラ白く 包んだ狭霧
悲しいことを 消して下さい
私はあなたを 離れられない

恋の数え唄

竹村 勝

人に隠して いるけれど
あたしなりたいたい 薦^{つた}かずら
小枝に絡んで いる様に
あたしあの人に 絡みたい

太いお灸で 治るなら
炙^ヒえてやりたい 内の良^ヨ夫^ト
何の取得も ないくせに
女だますにや 凄^ヒい腕

みんな女は だまされる
大きな嘘いう 男には
ちいさい誠で がまんすりや
あとで泣かずに すむものを

横から俺のを 取^とっちゃいて
仲良く暮すと 思^{おも}つたら
たった三月も 立^たたん内に
夫婦げんかで はや他人

色黒同志が 結ばれて
生れて来た子が 色白や
無学な者には わからんが
とんびが孔雀を 生めるのか

昔の 伝説に

雨の岩戸が しめられて

諸々神様 思案から

恋の舞にて あいたとき

なんで今更 捨てれるか

人の妻じやと わかっても

別れたらあの女 死ぬつもり

生木は裂くまい 世の中さん

やせても俺も 男の子

人がする事は 何でもするが

夜を返して 云われても

それだけ俺も ようしない

恋に汚れた しみ跡が

洗える洗剤 あったなら

お金のいる事は いやしない

あたしがみんな 買うものを

通り雨なら 良いけれど

過ぎてしまえば 晴れるから

あたしの濡れてる 雨なんか

止む事知らない ながせ雨

恋 灯 り

宮 部 好 弘

かんだ小指の 齒の跡に
夢を持たせて くれた人
泣いちゃいけない 恋なのに
涙でくずれる 恋灯り

灯り消しても 眠れない
今のわたしの 夜の床
女心が せつなくて
今夜も更けゆく 午前二時

きつと来るよと 言った人
風の便りも ない人を
抱いて生きてく 女です
点もして下さい 恋灯り

ゴニヨラゴニヨラと雨が降る

徳永みどり

ゴニヨラゴニヨラ ゴニヨラゴニヨラ
秋の雨が降る

ゴニヨラゴニヨラ ゴニヨラゴニヨラ
私を泣かせるように

思いがけない 別れの言葉

どうしてどうしてと 訊ねたいけど
なんにも言えずに うつむいて
あなたの心の 位牌を抱いていた

ゴニヨラゴニヨラ ゴニヨラゴニヨラ
夜の雨が降る

ゴニヨラゴニヨラ ゴニヨラゴニヨラ
私を酔わせるように

情けないほど 体が震え

忘れろ忘れろと 自分を責める

あなたが選んで くださった

黄色のコサージュ グラスに挿していた

ゴニヨラゴニヨラ ゴニヨラゴニヨラ
旅の雨が降る

ゴニヨラゴニヨラ ゴニヨラゴニヨラ
私をなだめるように

ひとり残った ホテルの部屋で

遠のく靴音 ぼんやり聞いた

心配しないで 三年の

楽しい思い出 数えて眠ります

氷の音の子守唄

松 生 静

水割グラスの中で

氷がゆらゆら 唄ってる

一人の夜は 楽しいかい

ダイヤの指輪が 嬉しいかい

ミンクのコートに つつまれて

みる夢 幸福かい

思い出^き弄る夜は

氷も淋しく 唄ってる

タバコの煙で 輪を作り

婚約指輪と おどけてた

男の気持も 知らないで

我儘 者だねと

水割グラスの中で

氷が哀しく 唄ってる

今更遅いよ あの人の

優しさ愛しさ わかっても

真赤な爪さえ 諦めて

グラスを 持っている

誤解

美貴ひろこ

そんな覚えも やましい事もないと言うだけ 無駄でした
そつと差し出す 合鍵だけが
別れことばを 伝えます

声も涙も 出遅れました
胸のふるえが 泣くだけでした

人を信じて 愛する事を
教えてくれた ひとでした
嘘を仕掛けた 見えない影に
逢ってみたいと 思います

いいえそれより 逢いたいのです
あなたも一度 逢いたいのです

夢でやさしい 笑顔にふれて
ワイン冷やして 待ちました
部屋の灯りを 消してたほうが
ドアをたゝいて くれますか
夢のつづきを 追いかけました
胸にすがって 泣きたいのです

今宵かぎりの

木原悦子

隠しきれずに あなたの心
瞳の奥で 揺れてます
止めないわ 何も言わない
愛してるって つぶやいた
わたしの言葉 遅すぎたのね
今宵かぎりの ぬくもりと
今宵かぎりの 夢がたり

愛し忘れた ギターを抱いて
心の糸を かき鳴らす
泣かないわ 恋はゲームね
愛してるって ささやいた
あなたの言葉 早すぎたのね
今宵かぎりの ほほえみと
今宵かぎりの 物がたり

愛してるって つぶやいた
わたしの言葉 遅すぎたのね
今宵かぎりの ぬくもりと
今宵かぎりの 夢がたり

小平次舟頭唄

有田花外

流れ見つめて 河原の小屋で

俺も人並み 夢を見る

舟頭生活じゃ いつまで過てど

恋もしたけど 嫁も来ん

ヤッパシ 町さ 行くべかな

迷う小平次 いろり酒

決めた思案の こゝろの奥に

好きと残して 左棲

把ったお美代の あの紅扱帯

乗せて手をとる 小瀬渡し

ホンマニ 俺を 泣かせたぜ

惚れた言葉も 出ぬ別れ

伝手を頼って ひろしま已斐で

年季づとめの 炭問屋

黒う苦の粉に 弾く算盤

家も辛棒で 女房も貰ろた

ドッコイ 商売 鼻唄客

乗せて棹させ 太田川

駒彫一代

田口もりを

将棋彫りかと 笑うじやないよ
爪に隠れる 素彫すでうの小文字
俺にとっては 我が子と同じ
血豆つぶして 彫れぬ夜は
何度泣いたろ 人知れず

朝の茶柱 笑顔でみつめ
あんた見てよと 寄り添う瞳
顔をかくして 質屋ののれん
潜ひそるお前の 細い肩
知っていりゃこそ 意地も湧く

夜の山道 行く手はひとつ
滝にうたれて 修業にくれた
将棋彫りなら 彼奴あいつにや負けぬ
はずむ駒音 聞きたきに
黄楊つげの杙き目を 肚はらでよむ

こころ化粧

折戸勝史

苦勞かけると 心でわびて
今夜も酒に おぼれて帰る
こんな男に 笑顔で尽くす
指に指輪も ないお前
きれいだよ きれいだよ
こころ化粧が きれいだよ

赤いバラより スミレが好きと
小さな鉢を 両手で包む
何時か着せたい 花嫁衣裳
言えば小さく 首を振る
いじらしい いじらしい
こころ化粧が いじらしい

夫婦茶碗を きれいに洗う
エプロン姿 お前は似合う
今のわたしは 幸せですと
声をつまらせ 下を向く
泣かせるぜ 泣かせるぜ
こころ化粧が 泣かせるぜ

小雨の海峡

浅野哲秋

けむる小雨の 海峡はるか

おんな泣かせの 船が行く

愛し愛した 二人なら

憎い憎い……運命に泣かされて

むかししのべば 逢いたくて

しぐれる津軽 あゝ流れ唄

愛の涙も 凍てつくような

かもめ寒そに 乱れ飛ぶ

どこに流れて 行くのやら

汽笛汽笛…… ふるえて聞こえます

今じやいとしく 逢いたくて

つのらす思いが あゝこみあげる

暗い小雨 海峡こえて

波がところを 惑わせる

忘れましようか いやなこと

熱い熱い…… 情はつらくなる

冷たい潮風 あゝ身にしみる

故郷の天地

越野みのる

花を咲かせる 男もいるが
咲かずに消えてく 男もいるさ
汗にまみれて 腰手拭で
鍬を振るって 大地に挑む
弱気になつたら 生きてはゆけぬ
実りもたらす この土地がある
光り溢れる 空もある

力いっぱい 働くことが
幸せなんだと 信じていたい
人に迷惑 かけたりしなきゃ
出世せずとも いいではないか
慰めなんかは 俺には要らぬ
雨をしのげる この家がある
苦劳いたわる 妻もいる

骨をうずめる 覚悟があれば
田舎の暮らしも 悪くはないさ
草を褥に 一服吸えば
金で買えない 故郷の味だ
愚痴は云うまい ぜいたく過ぎる
幼馴染の この山がある
夢を育くむ 川がある

こんな女で いゝのなら

さきゆうかつみ

あなたに抱かれた あの夜から
恋の いのちを 知りました
あ、 古い傷あと しみるけど
こんな 女で いゝのなら
も一度 甘えて いゝですか

あれから 三年 この胸に
なぜか あなたが 消えません
あ、 夜に溺れて 生きてきた
こんな 女で いゝのなら
も一度 愛して くれますか

今夜も あなたに 夢の中
そつと 手料理 作ります
あ、 愛の灯りが 欲しいのよ
こんな 女で いいのなら
も一度 すがって いいですか

根 性 船

亜 樹 純

荒波よせる 大海原は
男の命をかける漁場
こんな小さな 木船^{こけふね}だけど
俺より海を知っている
苦しい時には はげまされ
大漁の時には 喜こんで
苦勞をともした木船さ
おやじゆずりの
おやじゆずりの 根性船

夜空に星が 輝く夜は
男が海に 抱かれてる
郷里^{きよさと}のおやじを 想い出す
海がおれば シケになる
命知らずのこの俺を
つつみ守って はげまして
生活^{くらし}をともした木船は
おやじゆずりの
おやじゆずりの 根性船

海がおれば シケになる
命知らずのこの俺を
つつみ守って はげまして
生活をともした木船は
おやじゆずりの
おやじゆずりの 根性船

江戸前舟唄

岩田道之輔

いわし雲見りやヨー聞こえてくるさ

小舟漕いでた おやじの唄が

へハアー木更津照るとも東京は曇れー

可愛い翼をうららに染めた

ちどり羽ばたく 干潟にも

ソラソラエー

冬の海苔採りやヨー冷ひやつこい海さ

まして貝掘りや 命がちぢむ

へハアー狸かわいや証城寺の庭でー

おやじゆずりの塩辛声で

寒さむさ相手の唄が出る

ソラソラエー

汐でしぐれりやヨー恋しくなるさ

風が手招く呑み屋ののれん

へハアー泣いてくれるな出船の時はー

酔えば花咲く 大漁じまん

あすの夢みて夜が更ける

ソラソラエー

江の島慕情

おだ みつ

泣いて泣いて 泣きぬれて
たどる砂浜 夕顔が
風にふるえる 日暮れです
愛をかわした 江の島の
灯台の灯が 波に散る

昨夜の宿に 灯がともる
今宵はすがる 胸もない
別れはすんだ はずなのに
たちきれないの この未練
いくら待っても 来ぬものを

カモメよカモメ 啼くがいい
波のしぶきに ぬれながら
恋しさだけが つのります
身を切るような 悲しみを
あなた分って くれますか

鉄橋

鈴木昭一

ガタゴトと 音立て鉄橋を
兄ちゃんのせた 汽車が行く
田舎ぐらしは いやだよと
逃げる気持は 分るけど
母ちゃん一人を 残せない

砂利舟が 通るたび 鉄橋の
黒い影が ゆれてたよ
あすはお嫁に 行く人と
言葉一つも 交わせずに
別れた日暮に 恋しいよ

思い出を 知っている 鉄橋に
淋しさ棄てに 来たけれど
秋の夕空 むなしくて
野良の仕事の 荒れた手で
そつと煙草の 火をつける

出直し列車

出島ひろし

苦勞かけるよ 大丈夫かい
あなた未来が あるじゃない
世間はぐれの おしどりが
傷をさすって 出直し列車
いいのいいのよ あたしなら
あなたに縋って ふたり旅

よせばいいのに 身の程忘れ
背のびしすぎて 燃えつきた
年は若くも ないけれど
死んだつもりで 各駅停車
いいのいいのよ あたしなら
あなたと合い傘 ふたり旅

ネオンがしみた 都会の空か
トンビ輪をかく ふるさとか
根無し草でも ふたりして
いつか根を付け 咲かせましょうよ
いいのいいのよ あたしなら
あなたを信じて ふたり旅

愛に

紫野 ゆき

親の言葉が さだめなら
聞いてさからう 二人はまこと
ついて行きたい

離れずいたい

たとえ苦勞の 明日でも
それが幸せ 夜に紛れて
旅立つ 愛に

ひとつの視線を 気にせずに
肩を寄せたい ちいさな願い
せまい世間に

それさえならず

影におびえる 暮しより
悔いはしません 何を捨てても
えらんだ 愛に

二度と戻れぬ 道だから
うしろ向かずに 歩いて行ける
指に伝わる

たがいのぬくみ
たとえその場所 遠くとも
目指す幸せ みつめひとすじ
旅立つ 愛に

愛はオーロラ

岡本和子

氷のように 冷たい星空

あなたの哀しい 別れの言葉

なにもかも 失くした わたしは

生きていることさえ

空しかった あの日の頃

ひたすらに あなたのために

捧げつくした 涙なのに

愛はオーロラ まぼろしの夢

こころの寒さ いたわり合えたら

明日に灯りを 点せた二人

淋しさの あまりに あなたの

かくされた優しさ

見ぬけないで 泣いたあの頃

美しい 想い出だけを

今は抱きしめ ふりかえる

愛はオーロラ 銀いろの夢

立ち止まる 季節の中で

星のひかりを 追いかける

愛はオーロラ まぼろしの夢

愛はオーロラ 銀いろの夢

哀 恋

山 口

純

好きなあなたで あればこそ
お逢いするのよ 人知れず
やがていつかは 悲しい別れ
待っていそうな 明け暮れが
哀しいのです ただひとつ

泣いてみたとして 無駄なこと
燃えた想いが とけるまで
きつとこのまま 死ぬまでつづく
恋の思い出 傷あとを
どこにすてたら いいのでしょう

好きなあなたで あればこそ
お逢いしたいの いつの日も
やがて涙も 乾いて消えて
合わぬ昔に かえるのが
哀しいのです ただひとつ

愛のさすらい

倉島雅三

思いこんだら 命がけと
いったお前の 涙顔
忘れられない 別れの時も
今は遠ざかる

※ここは北陸 若狭湾
海に向うに 虹が立つ
渡り切れない せつなさだけが
胸によせてくる

今はまぼろし 愛の日日も
うるむ夜空の 銀の星
風の便りに 頼よせながら
一人旅をゆく

※ここは南の 中の島
ネオン灯を さまよえば
つかみきれない 幸せだけが
遠くゆれている

愛の忍草

植田竹雄

196

人目はばかり づらさより
逢えぬ哀しさ しのぶ草
燃えて 切ない 女の気持ち
たまの逢う瀬に 耐えて咲く
恋かなし 忍草 なみだ花

添えぬあなたと わかっても
さだめ 憎めぬ しのぶ草
いっそ 死にたい 抱かれたままで
夢のひととき 濡れて散る

恋かなし 忍草 忘れ花

別れせつなく 縋る手に
なみだ雨降る しのぶ草
いのち までもと 愛したあなた
たとえ 枯れても 忘れずに
恋かなし 忍草 みれん花

哀愁の炭坑節

村山 務

時の流れに 生きてる限り
いつか消え行く 運命でも
生れ育った 町だから
忘れられない 思い出ばかり
あるさ山程 俺だつて

港若松 始発の駅を
下り夜汽車は 原田^{はらだ}まで
黒いグイヤの 町に行く
炭^や坑^ばで栄えた 男の町は
義理と人情が 生きていた

移り変りは むなしさ残す
炭坑もさびれて 町の灯も
消えて寂しい 筑豊に
歌い継がれて 昔を今に
忍ぶ名残りの 炭坑の歌

青いスーツの女

折井一光

酒が私の 恋人なのと

作り笑顔で 飲んでいる

酔うほどに 酔うほどに

別れた人が 恋しくなって

哀しい唄しか 歌えない

夜の新宿 青いスーツの女

駄目な私を 愛してくれた

とてもやさしい 人だから

泣きながら 泣きながら

失くした過去を 追いかけている

淋しい夢しか 見られない

夜の赤坂 青いスーツの女

馬鹿な私と さよならしなきゃ

すぐに不幸に なるという

明日こそ 明日こそ

栈橋はなれ さすらう旅に

ほんとの幸せ さがしたい

夜の横浜 青いスーツの女

赤いお守り

石井まこと

思わぬひとのお嫁にされる
鏡にうつしたお白粉の
頬をなみだがぬらします
親の言うまま流されてゆく
気弱なわたしを許してください

日暮れの白い河原でそっと
あなたがくちづけしてくれた
あの日がまぶたに浮かびます
辛く悲しいさよならだけど
心はあなたに残してゆきます

あなたに貰った天神様の
赤くて小さなお守りを
帯にはさんで持ってゆきます
添えぬさだめの初恋だけど
死ぬほどあなたが大好きでした

赤いカンナを忘れたの

戸成ふさ栄

好きと云えずに マフラー編んで
涙で渡した 川ぞいの道
庭にカンナのおし 咲く頃きつと
帰るとあの晩 東京に行った
なのにあなは なのにあなは
あ、 ふる里も約束も
みんな忘れて しまったの

祭りばやしも 呼んでいますと
便りにしたため 今年も咲いた
赤いカンナのおし花そえて
会える日信じて ポストに入れた
なのにあなは なのにあなは
あ、 ふる里も約束も
みんな忘れてしまったの

この手握って 遊んでくれた
幼い昔を 思い出します
赤いカンナの花影で泣く
虫の音かなしい 夕ぐれの雨
今のあなたは 今のあなたは
あ、 ふる里も約束も
みんな忘れてしまったの

赤坂育ち

中西 寛

恋も遊びも 捨てました
命かけます 舞踊り

今の稽古は 辛いけど

師匠ゆずりの 根性で

明日に賭けます 赤坂育ち

山王さまに 願かけて

今日も稽古で 明けくれる

こんな生活は 辛いけど

心に笑顔をたやさずに

耐えてゆきます 赤坂育ち

稽古帰りの 乃木坂で

三昧を片手に 忍び泣く

他人に言えない 身の運命

恥を涙で 消しながら

将来を夢みる 赤坂育ち

熱いお湯割り

江馬つとむ

202

熱いお湯割り　冷めないうちに
好きだといって　しまおうか
それとも黙って　帰えろうか
もうすぐ別れの　朝が来る
体がふるえて　止まらない

飲めぬお湯割り　無理して飲んで
つくしたいのよ　いつまでも
じらすあなたが　憎いのよ
それとも私が　悪いのか
涙があふれて　止まらない

抱いてほしいの　可愛いやつと
素直になれる　今ならば
あすでは遅い　遅すぎる
女の命を　燃やしたい
体がふるえて　止まらない

あなた慕情

やまだりゆう

小雨が 降っていませんか
ひとり寝は 佗びしくありませんか
しみじみと しみじみと
離れて あなたと 結びあう
強い強い 絆を 知りました

ミカンの 花が見れますか
船を見る 港がありますか
くりかえし くりかえし
浮かべる あなたが 恋しくて
すぐにすぐに 涙が こぼれます

わたしの 夢を見ましたか
帰る日の 予定はないですか
いつまでも いつまでも
やさしい あなたを 信じては
つもるつもる 話を 綴ります

あなたをさがして

矢真田真沙恵

見知らぬ土地に　ひとり来て
あなたをさがして　歩いています

半年前に　二人して

確か来たのは　この町ですね

さよならだけの　置き手紙

しっかり握って　この手に抱いてます

あなたあなた

あなたは何処に　いるのでしょうか

小雨がパラパラ　舞いおりて

私の心を　ぬらしています

なんにも云わず　置き去りに

消えたあなたを　恨んでいます

今夜の泊る　宿さえも

当てもないのに　どうしてくれますか

あなたあなた

あなたは何処に　いるのでしょうか

あきらめないわ　逢えるまで

ひと目逢えたら　死んでもいいのです

あなたあなた

あなたは何処に　いるのでしょうか

あなたは海

横井 弘

夜明けの浜の 貝殻は

気ままな潮の 置き手紙

あなたは海 憎い海

さよならさえも 言わせない

背中が揺れて 遠くなる

言葉の波に 流されて

遊びと知らず 溺れたの

あなたは海 憎い海

この手に戻る 気もなくて

移り香ばかり なぜ残す

影まで細い 貝殻は

短い夢の 白い墓

あなたは海 憎い海

想い出埋めた 砂山を

風笛吹いて また泣かす

あの人を下さい

羽村真人

206

着せ替え人形 ままごとセット

赤い手ぶくろ お星さま

欲しいと泣いた 幼いあの頃

恋しさに 恋しさに泣く夜は

女は子供にかえります

ああ どうしてもあなたが欲しい

神様お願いします あの人を下さい

あなたの唇 あなたのあの手

厚いあの胸 その心

私のものは 一つもないわね

ひそやかに ひそやかに雨が止み

寂しさ深まる夜更けです

ああ どうしたら愛されますか

神様お願いします あの人を下さい

夢でさえ 夢でさえ冷ややかな

あなたが現われ消えていく

ああ どうしてもあなたが欲しい

神様お願いします あの人を下さい

あくまで悪魔

松^{まつ}
代^{しろ}
達^{たつ}
生^お

バラの花捧げて 悪魔がささやく
こちらへおいでよ 裸におなりよ
笑顔の下 棘^{とげ}を隠して

私はいつに抱かれてみせる

澄ましてみたって 男と女

仮面をはずせば みんな悪魔さ

あくまで悪魔さ

襟立てたコートのポケットの中で

あいつの指先 札束数えた

サングラスを伊^い達になおして

私の目の色 計算してみる

澄ましてみたって 男と女

仮面をはずして みんな悪魔さ

あくまで悪魔さ

魂を売るのも たまにはいいだろう

バーゲン・セールの季節じゃないけど

どうせあいつ 遊びのつもり

私を愛しているはずないさ

澄ましてみたって 男と女

仮面をはずせば みんな悪魔さ

あくまで悪魔さ

悪夢

芝山和子

208

あなたの胸の ポケットに
私が いない いない いない
いつも 気になる
あの人への 誉め言葉
その人が いるいる いるわ
ひらり ひらり 花びら 散りちり
ジェラシー 感じて
痛む 私って嫌やだわ
あなたは 知らない 気づかない
極楽トンボね 秋の空模様

私の中の もう一人の
私が あなたを 許さない
わたしは 耐えた
その人への 誉め言葉
あの人へ あなたが好きよ
ふわり ふわり 追いかけて 離れて
ジェラシー いけない
私が 私でないとき
あなたは 知らない 気づかない
糸をたらした 赤い風船よ

くるりくるり 場面が変わる
ジェラシー 何時かは
悪夢のように 覚める
あなたは 知らない 気づかない
風船の中に 写る恋模様

あやめの宿は

文 月 豊

桃割れゆうた 横顔を

カメラに納めた あの人よ

染めて哀しい 水かがみ

ああ降る降る 濡れたところの切つなくて

さみだれさみだれ あやめの宿は――

むらさき色に しほり花

開いて寄り添う 世のならい

赤い雲洞 池の端

ああちくちく これが初恋痛みます

さみだれさみだれ あやめの宿は――

幸包む 願い文

結んで待ちます 逢える日を

社かえりの ひとり傘

ああしとしと そぞろ歩きの身は寂し

さみだれさみだれ あやめの宿は――

A・G・A・I・N

仁位美由紀

AGAIN 二人だけの時を

AGAIN とりもどせたら

ゆらゆらと わたしの影が

人気のない 壁でゆれている

男物のシャツを パジャマ代りに

ベッドの上に 座っているの

ひろすぎる 部屋の中

あなたの匂いも消えてしまいそう

AGAIN 二人だけの時を

AGAIN とりもどせたら

あかい酒 透かしてみたら

何もかもが あなた色になる

あて名のない手紙 ヒコークィにして

写真のあなたに 飛ばしてみるの

メッセージ 届いたら

私といっしょに 乾杯してほしい

油手にして

中里晴夫

裸電球　そのもとで
旋盤回してる　働き者さ
待ちに待つよな　電話鳴り
油手にして　受話器とる
仕事終えたら　逢いたいのと

なっぱ服着た　そのままで
たそがれ下町の　路地を行く
可愛いあの娘と　飲みに行く
油手にして　肩を抱き

そんなにおいが　好きだというよ

確か二十才の　誕生日
メタルのペンダント　贈るものだよ
恋の唄なら　デュエットで
油手にして　マイク持つ
ふたり寄りそい　拍手を浴びる

あゝ沖田総司

竹内きよと

人を斬るのが 掟なら

誠の文字に 死命を誓い

明日の運命を 知るや君

あゝ沖田総司は 何想う

鞘をはらえば 剣の鬼

ほゝえむ瞳 幼き顔は

恋の情けも まゝならぬ

あゝ 偲ぶ父母 里恋し

粹な散切り 紺緋り

愁いをふくむ 若武者影に

京の春風 すすり泣き

あゝ 沖田総司は 何処へ行く

あゝ落日燃ゆ

ぼく はじめ

江古田^{えこだ}ヶ原の 夢やぶれ
無念の雫^{しずく}か 夜半の雨
豊島^{としま}一族 武門の意地は
文明九年 春卯月

和睦の道は 閉ざしても
一縷^{いつる}の希望^{のぞみ}は 時の運
武士が今際^{いまば}は 斜陽^{しゃやう}の炎
燃え盡き果てん 我が命

出丸はすでに 燃え落ちて
味方の多くは 討たれたり
哀れ照姫 十九の春青^{はるあお}を
藻屑と化^けせし 池無情

眞菰^{まごも}が芽吹く 水の面に
余韻も悲しい 鐘の音よ
泪あらたな 石神井城跡^{いしきみいぎ}
桜を染めて 陽が落ちる

浅太郎子守唄

市川武志

214

親を知らない　この俺が
親のない子を　おんぶして
『ねんねんころり　勘太郎』
ちゃんの背中は　冷めたかろうが
許せやくざな　浅太郎

義理に生きれば　この胸の
奥で人情が　泣いている
『ねんねんころり　勘太郎』
これでおさらば　赤城の山も
雁がゆくゆく　西の空

破れ合羽に　身をかくし
風にまかせた　子守唄
『ねんねんころり　勘太郎』
せめて寝顔は　笑っておくれ
履いた草鞋も　涙ぐせ

あざみの君

岐多川

純

春の野にひっそりと咲いているあざみよ
黄金色のトゲをふるわせ
こむらさきの花の香が匂う

けれど握ることさえ
拒もうとするのはなぜ

時に瞼に刷いた アイシャドーが

わたしを魅惑す

花片にふれた指が ホラ

こんなに疼いている

あざみよおまえへの慕情で

わたしの胸は張りさけそうだ

愛しているよは胸の内 心は閉じたまま

——あざみの君よ あざみのきみよ

すこやかに

遠い日に幾度か通った野道には

レンゲの花とスマイレ以外に

なにも目には止らなかった

もっと早くわたしを

誘ってくれなかったの

時に はにかみを含んだ瞳が

心をまどわす

ためらっていたのは わたしを

さける為の仕草か

あざみよおまえへの一途さが

わたし自身わからないんだよ

愛しているよは胸の内 心は閉じたまま

——あざみの君よ あざみの君よ

しあわせに

旭川慕情

松本 摂子

216

凍つく肩に はらはらと

舞い散る紛雪 胸にしむ

想いあふれる あの人の

愛のぬくもり たぐり寄せ

別れの夜の……

面影しのぶ 旭川

夢より淡い 恋故に

淋しきかくして 泣きました

今日も小雨に 濡れながら

遠いあなたの 名を呼べば

名残りはつきぬ……

涙をさそふ 旭川

しばれる愛の いのちさえ

かがり火のように 燃えたのに

過ぎしあの日は 返らない

風に散りゆく 花びらを

見つめて泣いた……

思い出ねむる 旭川

雨の硝子窓

白水 かおる

窓に映るあなたの瞳が
雨の雫で涙ながしてた
愛してはいけないと云われた
二人はまだ若すぎたのね
たわむれの恋と引離されて
苦しみに耐えながら祈ってた
ああ 限らない愛の倖せを
さしのべる私の指先が
あなたのその手にとどかない
愛していると書いた文字も
にじんで消えた 雨の雨の硝子窓

雨でくもる冷たい硝子に
燃えるくちびる二人重ねてた
逢ってはいけないと云われて
なすべさえ知らずにいたの
初恋は何故かこわれやすくて
なつかしい思い出と哀しみを
ああ ころに残して消えてゆく
さよならとあなたは雨の中
うしろも見ないで去っていった
戻って来ない愛の月日
私はしのぶ 雨の雨の硝子窓

雨 模 様

やま 一 央

生命までもと 思うほど
みんなあなたに あげました
好きでたまらぬ 人だから
悔はしません これきりの宿
泪みせない 別れです

あ、今夜は雨もよう

せめてあなたの 温もりは
忘りやしません いつまでも
枕かさねて もえたとて
どうせ一夜の これきりの宿
消さにやならない 朝が来る
あ、今夜は雨もよう

たまにや思い出 探してね
こんな女の いたことを
夢を見させて くれました
あなた私の これきりの宿
思い残しは ありません
あ、今夜は雨もよう

さいはて流れ旅

富田清吾

「来ては駄目よ」と 泣き泣き振った
白いその手が 目に浮ぶ
風の噂は 北から吹いて
津軽海峡 飛ぶしぶき
港函館 霧笛に追われ
未練ひきずる 未練ひきずる
さいはて流れ旅

心の底から 惚れぬいた
女はひとり ただひとり

嘘じゃなかった 一度はやれた
幸せひとつ 夢ひとつ
釧路 網走 酒場のひとは
みんな似たような 流転花
北の星座は 夜ごとに冴えて
ここは納沙布 ここは納沙布
さいはて流れ旅

心の底から 惚れぬいた
女はひとり ただひとり

小樽 札幌 噂を追えば
花が散ります アカシヤの
雨のススキノ ネオンに消えた
うしろ姿の 空似のひとよ
夢とさすらう 旅路の果てに
泣けというのか 泣けというのか
さいはて流れ旅

幸子の雨

伊予圭相

220

たった一度の
幸子は死んだ
愛のみのらぬ
隠してひとり
二十歳を三つ
遠い遠い
旅空で
幸子は死んだ
雨の朝

暗い夜空で
泣いている
幸せうすい
乙女星
燃える心の
せつなさを
誰れにも言わず
旅に出た
二十歳を三つ
過ぎた春
花を手
に
白い白
雨の朝
幸子は死んだ

頬に覚悟の
紅をつけ
幸子は死んだ
雨の朝
胸の痛みを
思い出を
忘れるために
旅に出た
二十歳を三つ
過ぎた春
湖畔で
遠い遠い
雨の朝
幸子は死んだ

盛り場おんな唄

小林佳恵子

ネオン化粧に 盛り塩 切り火

網を張ります 夜の蜘蛛

浮気カモメに ほろ酔い鳥も

どうせ淋しい 見えっ張り

酒落た演歌に 酔いしれて

浮世忘れる 酒場唄

迷い悩んで とまどいながら

生きてきました 夜の川

惚れてつまづき おぼれて流れ

いろんな男の 生きざまを

グラスの底で 味わった

さめた女の 酒場唄

客が入りの わびしい宵は

からみつきます 重い裾

露地の屋台の 湯気たつ鍋が

うらやましくて つい愚痴に

良い日悪い日 くり返し

はかない明日の 酒場唄

嵯峨野慕情

南 早 苗

夕闇迫る 嵯峨野路を

今日もひとりで 歩きます

昔あなたと 来た道に

恋の末練が 揺れてます

私は古い女でしうか

あなたのくれた 指切りに

今も縫って 生きてます

涙曇りの 嵐山

川の流れも かすみます

あの日二人で 来た部屋に

愛の匂いが しみてます

私は古い女でしうか

あなたの愛の うらぎりを

知ってそれでも 待つのです

悲しい噂 聞く度に

ひとり枕を 濡らします

凍え死にそな この胸に

まだ見ぬ春を 夢みます

私は古い女でしうか

生命あずける その人は

あなたの他に ないのです

坂道の踏切

炭谷昌彦

砂浜がみえる 小さな踏切

ふたりでとおった ふたつの秋

踏切渡れば 下り坂

空しさつづく 今は白い道

籠から落した りんごを

ふたりで 追いかけて

笑いころげた 下り坂

あの笑い声 あのやすらぎを

残していった 君がにくらしい

コスモスが揺れる 無人の踏切

ひとりでたたずむ うつろな秋

踏切戻れば 上り坂

哀しみのせて 今は白い風

おぶった背中で わたしは

とつても しあわせと

ほほをうずめた 上り坂

あのほえみや あのぬくもりを

残していった 君がにくらしい

さよなら異国

新保治平

224

なつかしい 港

ここが 本当の 故郷こきやうだよ

泣き 泣き 渡った棧橋で

覚えて いるよ あの時の

日の丸 手にした おぢさん達を

傷ついた 心

これが 私の おみやげよ

思い出 つらさも さよならと

デッキで 捨てた お別れが

今更 さみしい 異国の町よ

捨てたんだ みんな

ここが 私の 故郷だよ

異国の 旅路の 苦しさも

はるばる 着いた うれしさに

思はず 涙が こぼれたんだよ

サラリーマンが一番偉い

みや秀和

天下に名を売る 男の夢は
きつと死ぬまで 夢のゆめ
ひとりかきこむ 立ち喰いそばの
つゆまで余さず 飲みほして
何と言おうと 言われよと
サラリーマンが 一番偉い

佗しいばかりの つとめじゃないが
酒が恋しい 夜もある
下手な歌でも 歌っていれば
グチを言うより ましな筈
趣味はごろ寝か カラオケか
サラリーマンが 一番偉い

もてない男は この指とまれ
グレーの背広を 着た仲間
タイプライター 電話のベルが
飛び交うちいさな 俺の城
金も名誉も ないけれど
サラリーマンが 一番偉い

桜

詩 和 峯

影絵のように君の姿が

窓のところに映ってた

出てきたばかりの部屋の明りが

僕の心を締めつけたんだよ

あれから君はどうしたの

仕合わせになっっているかい

季節はめぐって桜が咲いたけれど

うわさ話も聞かないね

いつかの桜並木通りを

僕はひとりで歩いている

お花見だからと君ははしゃいで

重いバスケット抱えていたっけ

あの日を君は忘れたかい

元気ならいいと思うよ

恋人同士に戻れはしないけれど

せめてもう一度逢いたいね

酒のえにしにしばられて

友里裕介

俺の味方は きみだけさ

飲んで強くは なれないが

淋しがりやに 効く薬

酒のえにしに しばられて

冷えたところに 酒を注ぐ

たとえふるさと 違っても

お国言葉が 口に出りや

知らぬ同士も 友達になる

酒のえにしに しばられて

夢を肴に きょうも飲む

おまえ寝ぐらは あるのかい

振った尻尾が 返事なら

ついておいでよ はぐれ犬

酒のえにしに しばられて

拾いあつめる 月あかり

さすらいの宿

鈴木 きよ

女がひとり 旅する時は
生きてく灯りが 消えた時
忘れたい 忘れられない
面影ひとつを 道づれに
北へ／＼来ました さすらいの宿

あなたの腕に 抱きしめられて
わたしは女に なりました
信じたい 信じられない
やさしい言葉を 一つずつ
書いて／＼捨てます さすらいの宿

いつものように 合わせた胸で
別れが来たこと 知りました
恨みたい 恨みきれない
死ぬほど今でも 好きだから
泣いて／＼今夜も さすらいの宿

三番波止場

津田辰臣

寒かないかと 指先に
息吹きかけて くれた人
思わず薄着で とび出した
馬鹿な私の 肩さきに
そつとコートで 包んでくれた
あれは月夜の 三番波止場

降り月かよ また秋が
溜息ひとつ 愚痴ひとつ
酔待ちグラスの 水割りは
未練うすめて くれますか
レモン変りに 涙を入れて
想い出してる 三番波止場

今日も何処かの 船が着く
耳馴れしない 汽笛だが
もしやと積荷の 影で待つ
潮の匂いは 同じでも
知らぬ他国の 髭面ばかり
風が冷たい 三番波止場

山東省之旅の歌

山門芳馨

隣の中国 皆さんと

親しくなるため それ行こう

下関から 船に乗り

思いを馳せて 青島に

着いた港に 目を見張る

此処は山東省 観光地

ビールの都を 後にして

歴史を偲ぶ 済南市

名勝 古蹟を 見学し

別れ惜しみて 汽車の窓

今躍進の 北京市

中国首都に 大会堂

仰ぐ万里の 長城は

何処まで続くか 果てもなく

35才主婦

星野哲郎

がまん がまんの 子育て時代
どうやら無事に 過ぎました
いよいよ始まる 第二の青春^{はる}を
包めば燃える レオタード

ああ 35才 主婦
女の夢の 花盛り

或る日 あわてて 惚れなおしても
もう遅いわよ だんなさま
夫の血を吸い 熟した肌が
陽ざしのなかで 咲き匂う
ああ 37才 主婦

女の艶の 花盛り

なにさ小娘^{こむすめ} 女の良さは
三十過ぎなきや生まれぬ
鏡の埃を 小指でどけて
のぞけば 魔女も Vサイン
ああ 39才 主婦
女の華の 花盛り

さんすい
シへんの女

大澤陽央

232

後も見ないで 夜汽車に乗った
あれは甕の 北の街

きれいな事は 云いたくないが
汚れたくない これ以上

あゝ もういや 流されるのは
なんで女は シなのか

涙で濡らした 心のひだは
いつになったら 乾くのか

未練じゃないが 溺れた夜の
憎い男を 恋しがる

あゝ もういや 忘れさせてよ
なんで女は シなのか

お酒を相手に 愚痴ってみても
聞いちゃくれない 酒は酒

誰でもいいの 真綿の様に
冷えた私を 抱きしめて

あゝ もういや 泣かされるのは
なんで女は シなのか

霧降り港

松井由利夫

こんなに泣いても まだ泣ける
別れて十日も 過ぎたのに
港の片隅 酒場町
つめたい男の 口笛が
きこえてきそうな… 霧降り港

港の女が 命まで

本気であずけて 夢をみた

「待てよ」と言われりや いつまでも

待つ気でいたのに あの人は

後も向かずに… 霧降り港

露笛が咽んで またひとつ

浮草酒場の 灯が消える

鯀をつないだ 棧橋で

つなげる望みも ないままに

面影抱きしめ… 霧降り港

祇園・おんな雨

星合節子

234

女のさだめ　しばるよに
きつくむすんだ　黒い帯

「かんにんえ　今日もお座敷あるから」と
なみだかくした　じゃのめ傘

祇園の街に　女の雨が降る
おまえが泣くよな　雨が降る

「お金のためよ　仕方がないの」
嘘がつかない　あの瞳

「あきらめて　誰かいい女^{ひと}みつけて」と
そつと渡した　京扇子

祇園の街に　女の雨が降る
おまえが泣くよな　雨が降る

親子も年が　離れたひとに
身受けされたと　いう噂

「とんでんしゃん」三味が流れる坂道を
おまえしので　立ちどまる

祇園の街に　女の雨が降る
おまえが泣くよな　雨が降る

京都しのび傘

高田ゆきお

わびすけの

花がこぼれる 大原の

小さな寺に 絹の雨

着物が濡れると 肩を抱き

重ねて持った 蛇の目傘

なんて冷たい 指だろう

ぬくめてやりたい 心の底を

添えない君は 他人^{ひと}の妻

雨の京都 ふたりのしのび傘

せせらぎに

泣いてさめざめ 降るような

貴船の川に 別れ雨

あしたは他人と 知りながら

ふたりで持った 蛇の目傘

濡れて汚れた 白足袋に

涙がこぼれる 男の心

叶わぬ恋と 知りながら

雨の京都 みちゆきしのび傘

添えない君は 他人の妻

雨の京都 ふたりのしのび傘

今日から明日へ^{あした}

神作光志

236

死ぬほどあなたが 好きだけど
肌と肌とを 燃やすだけでは
この世の中は 生きて行けない
あなたは強い 男になって
愛があるのよ 裏切りじゃない
消えてゆくしか 出口はないわ
お願いだから
私のわがまま ゆるしてほしい
今日から 明日へ 旅に立ちます

あかるく別れて ほしいから
荷物まとめて 鏡に向い
ロングヘアーを 指にからめて
私は好きな女優を真似る
涙かくした 冗談^{ジョーク}さえ
両ひざかかえて つめたい仕種^{しぐさ}
もうおしまいね
何も云わずに 指環をはずし
今日から 明日へ 旅に立ちます

京の宿

大坂秀次郎

愛のすき間を 冷たくぬらす

辛い運命の なみだ雨

人の噂に ひかされながら

たずね来てみた 木屋町通り

夢も遠のく 京の宿

涙いろした 一輪ざしが

今の私に よく似てる

お前だけだと 死ぬほど抱かれ

命あづけて あなたの夜に

散って寂しい 京の宿

おんな心を 泣かせるように

燃えて身を焼く 大文字

あなたお願い 戻ってきてと

ひとり八坂に 両手を合わす

恋にみれんの 京の宿

北旅愁

高橋直人

238

海が見えます 朝陽に光る碧い海
窓を開けたら かもめの声も聞こえます

こんなお部屋で あなたと二人
一度でいいから 過ごしてみたかった

※私は今 遠い北の町にいます

ひとりで暮らすには 淋しい町だけど
しばらく帰らない つもりです

あなたの幸せ みるのがつらいから※

船が行きます 小さな港後にして

昆布干してる 日和の浜は縞模様

こんな静かで 平和な生活

夢見ていました 心に描いてた

私は今 長い手紙書いています

愛した思い出の すべてを綴ったら

きれいなあの海へ 流します

未練の涙と さよならしたいから

※から※までくりかえし

北風海峡

多岐川昌史

おんなの涙で つないでも
出てゆく船は 引き戻せない
雪さえ降りだす こんな日に
この町捨てて どこへゆく
くらい海峡 吹きわたる
北風ならば 知ってるでしょうか

別れの哀しみ ふりきって
お嫁にゆけと あの人は云う
港を見おろす 丘の上
霧笛がひっそり 舞いもどる
ふたり暮した この部屋が
今夜はひどく 冷えこんできます

打ちあけられずに 見送った
あなたの船は もう沖はるか
ちいさな命を はぐくんで
あてない明日を 待つ身です
夜の海峡 凍らせて

北風が泣く みなし児のように

北の棧橋

大橋哲郎

240

北の果てまで ついてきて

心ほそかろ なおお前

北の棧橋 夜明けが近い

涙ふきなよ そのままじゃ

ふたりの明日あしたが見えなくなるよ

俺もお前も さすらって

つばさ痛めた かめめどり

北の棧橋 春まだおそい

きつとなろうよ 幸せに

こころを寄せ合い 出直したいよ

船の切符を 握りしめ

夢がほしいと 言うお前

北の棧橋 海鳴り寒い

みぞれ降る中 海猫ゴノが舞う

お前にゃ笑顔が 似合っているよ

北の港町慕情

渡辺和於

炎^しえて消えない
望みをかけて
北の小さな
そつと灯りが
いつも あなたを

胸の火に
生きて来た
港町
波止場に咲けば
待ってます

やさしい言葉
わたしふるえて
汽笛 呼ぶよな
どんな噂さが
あなた信じて

今宵また
燃えてます
港町
あろうと いまも
待ってます

夢のかけらを
幸福^{しあわせ}だいて
茜夕焼け
思いひとすじ
あなた 今宵も

信じつゝ
今日もまた
港町
いついつまでも
待ってます

北の銀砂漠

鮎川 公正

二十日も早い 今年の雪に
男ごころは

果てない銀の砂漠だよ

花の北見で 恋しても

佐呂間おろしが 吹雪くから

みんな埋もれて

抱いたあの娘も 蜃気楼

逢わない先に 別れたような

運命たずねりや

この手に黙って 溶ける雪

涙まじりの 想い出を

そっところがす くちびるに

春を迎える

明日を信じる 唄はない

幸せならば 見向きもしない

ネオン盛り場

美幌は俺の オアシスさ

夢を預けた 火の酒に

酔えばまぶたの 裏側で

あの娘たずねて

旅の駱駝の 鈴が鳴る

北航路

息 咲 詩 郎

沖に漁火　ここに恋あかり
揺れて泣かせる　旅の船
もしもこのまま　わたしが死ねば
あなた　あなた　あなた
涙をひとつぶ　くれますか
ひえた夜空に　おもいでさえも
凍りつきそな　北航路

こんな仕草と　髪の毛かきあげて
真似るあなたの　癖ひとつ
あすは雪降る　ちいさな町へ
きつと　きつと　きつと
うわさを届けて　くれますか
熱い未練の　尾をひきながら
星も流れる　北航路

添えぬひとでも　愛してくれたもの
たえてみせます　ひとり身に
夢でわたしを　みかけたときは
せめて　せめて　せめて
いたわる言葉を　くれますか
恋のつらさに　おいうちかけて
風が頬うつ　北航路

北へ帰る女^{ひと}

飛鳥井芳朗

どんな想いで この海峡^{かいきょう}越える
声をからした鷗^うのように

みんな無口で 連絡船^{れんらくせん}にのり
とおい海鳴り きいている

北へ帰る女

あ、肩につめたい雪^{ゆき}がふる

夢にまでみた 都会^{みやこ}をすてて
おんな哀しい心の傷を

そつといやしに きたものの
雪にうもれて ふるさとは

北へ帰る女

あ、生命^{いのち}むなしく汽笛^{かてつ}哭く

いつか逢えると この身をけずり
ともしつづけた未練^{みれん}の灯り

それとはかない 夢^{ゆめ}でした

雪の海峡^{かいきょう}いま 越えて

北へ帰る女

あ、明日^{あした}の幸^{あき}わせまだみえぬ

キャバレー

小島香澄

あなたと出かけた ワンマンショウ
あの日のスターが 僕の町に來た
酔つてゐるお客の 声に消されて
誰も聞いてない 歌を歌つてゐる
愛してる／＼ そんな繰り返し
しみじみと／＼ 胸に迫るのさ
人生なんて つままないよね
あんなに愛した 人ももういない

あの歌手誰よと 指差す彼女に
月日の流れを 僕は感じてゐる
陽気に飲もうと 声を張り上げ
無理に笑つても 今日に乗れないよ
別れても／＼ そんな繰り返し
つぶやけば／＼ 胸が熱くなる
人間なんて嫌になるよね
どうにもならない ことが多すぎる

如月哀歌

坂本一男

ひねもすの 季節風が

朝から窓を たたいてる

ベランダの 小鉢のアネモネ

気遣いながら

別れのしたく しています

傷ついた 冬鳥が

翼を休め 春を待つ

いつの日か 飛び去る日がくる

帰って行くわ

その日がこわい 私です

如月の 雪が舞う

思い出消して 降り積もる

雪溶けの 終りがくる頃

遠くの町で

幸せ見つけて 暮らします

帰郷

真樹 亜矢

夜汽車を降りたら 目を泣きはらし
小さく老いた 母が待つ
あの人追いつつ ふるさと捨てた
夢去り傷つき 舞い戻る
みやげ話もないのよ お母さん

手紙のひとつも 書かない罰か
頑固な父は 墓の下
弱ったからだを 駅まではこび
お前の帰りを 待ってた
聞けば涙も枯れます お母さん

肩もみする手を 思わず止めて
あまりの白髪 なでてみる
吹く風寂しい 夜なべの仕事
心配させてた その分は
樂をさせたい私よ お母さん

九州人

本間繁義

248

あなたは黙って 笑っているが
からだの中には 真赤な血潮
無法松だよ 九州人は

やると決めたら とことんやるさ

九州人だよ 九州人

あなたも私も 九州人

陽気になります 九州なまり
バッテンヨカバイ 並んだ笑顔
日焼け酒やけ 九州人は
すぐに気持ち が とけあうものさ

九州人だよ 九州人

あなたも私も 九州人

知らないふりして 歩いているが
あなたの心は 大きな心
西郷さんだよ 九州人は
明日の日本は まかせておくれ

九州人だよ 九州人

あなたも私も 九州人

君のアルバムを見たい

千葉 幸雄

君の子供の頃の顔って　いまと似てるかな
こんど僕の下宿に

アルバムを持ってきて　見せておくれよ

君の顔や　君の家族といっしょに

君のふるさとの　景色がうつってる写真を

僕は見たいんだ

君の　ふるさとの家に

僕が　たずねて行くのは

まだ少し　早いから

君のアルバムを　見たいんだ

君の家や　君の姿といっしょに

君のふるさとの　季節がうつってる写真を

僕は見たいんだ

君の　ふるさとの家に

僕が　たずねて行くまで

少しでも　知りたくて

君のアルバムを　見たいんだ

君の子供の頃の顔って　いまと似てるかな
こんど僕の下宿に

アルバムを持ってきて　見せておくれよ

夕顔暮らし

栗 沢 涼

夕方咲いて 朝に散る

夕顔みたいな 私の生活くらし

幸せ探して 来たけれど

もういいの もうやめた

世間に疲れた 男達おとこたちに

やすらぎあげる 女になるわ

苦勞はいつも ついて来た

女に生まれた この身が憎い

時には旅など 出たいけど

でもだめね 休めない

世間にあふれた 男達が

私を待つわ いつもの店で

これからひとり 咲いて行く

夕顔みたいに きれいになって

優しい心を 忘れずに

愛ひとつ 愛つくる

世間を捨てた 男達に

希望をあげる 女になるわ

夕月の雨

大倉芳郎

しぐれさす 街のはずれは

夕月の なみだ雨

この世で 添えぬ さだめなら

あの世で きつと添いとげますわ

かほそい命 支えて生きた

片割れ女の 吐息です

“荷風がこよなく愛してた

ここは 三輪の 淨閑寺

誰が上げたか 夕月の墓に

りんどうの花 雨にぬれてた”

ふりむけば 涸れた家並に

川もない なみだ橋

投げ込み寺と 人は言う

ひとり寝ゆえに 身をつまされて

かなしい別れ こらえて生きた

不幸な女の 歎きです

佑子

表 八千代

佑子 ここへおすわり

すっかり 褪せた 心を抱いて

お前は今 何思う

俺にはわかる 佑子 愛してるから

俺にはわかる 佑子 お前の気持

別れたのだろ いかした奴と

佑子 おお 佑子

ここへ おすわり

お前の瞳 昔のままだ

佑子 ここへおやすみ

疲れた 肌に かわいた心

お前は今 ぐっすりと

眠るがいいよ 佑子 忘れてみんな

眠るがいいよ 佑子 あたたかいだろ

疵など癒える そのうちきつと

佑子 おお 佑子

ここへ おやすみ

お前の髪は 昔のままだ

有情

貫井昭五

のれんくゞれば ほのかなかおり
遊びに疲れた 仲良しこよし
財布の中味は ちと足りないや
湯気はぶん／＼ いいにおい
どんぶり一つに 笑顔が三つ

金はないけど 僕らは負けない
ラーメンすゝって もり／＼ 元気
続きの野球を ひとがんばりだ
寒太の北風 うんと吹け
どんなに吹いても 千切れぬ有情

過ぎた十年 偶然あつた
握手も震えて 記念の写真
四方山話に 笑顔がはずむ
すゝったラーメン なつかしい
思い出尽きない 幼ないあの日

湯の町哀歌

中山二夫

254

宿の廊下で ふと会うあなた
滲みつくように 湧く恋もよう
旅のお方の 優しい笑い
眩しい瞳よ わたしの眼もと
何か散るよな 紅ざくら

誘うともなく 誘われ行けば
湯の香に揺れる 湯の町灯り
どうせ別れは 時計の針と
夜の深さを 爪弾く絃の
音_メかなしや 紅ざくら

別れ淋しい 乱れた髪に
あなたの名残り 胸かきみだす
ままになるなら このままそつと
恋の残り火 抱きしめながら
燃えて死にたい 紅ざくら

湯沢エレジー

松平史紀

落葉鳴らして 木枯しが
通りすぎれば 冬が来る

越後湯沢に 淡雪降れば

こゝろ細いよ 身がほそる

どうせ湯の町 流れ花

逢えば別れが 辛くなる

いくど泣いたか 夢の数

越後湯沢に 悲しく咲いた

色も儚ない 恋あざみ

褪せて散りゆく 雪の宿

つきぬ思いを 抱きしめて

遠く夜汽車に むせび泣く

越後湯沢の 灯影に濡れて

燃えてみたいの 今いちど

せめて淡雪 消えぬ間に

雪・とけて おんな

みやけ知絵

戻せるものなら 戻せるものなら
あゝ 遅いでしょうか

ひとひら ふたひら 降る雪が
想い出涙を 誘います
かじかむ指先 つつんでくれた
あの日の手のひら 恋しいワ
あれから二つの 冬が来て
泣き虫おんなに なりました

雪より冷たい 女だねと
言われて終った仲でした
甘えることしか 知らないわたし
ほんとのおんなじゃなかったワ
あれから二つの 冬が来て
あなたの哀しみ 見えてます

噂のあなたは うら街あたり
乱れたお酒を のむという
何にも問わずに この胸あけて
静かに抱いてて あげたいワ
あれから二つの 冬が来て
あなたに詫びてる わたしです

戻せるものなら 戻せるものなら
あゝ 遅いでしょうか
遅いでしょうか

雪と水

渡辺 治

短い暮らしの あなたとわたし
雪の積った あの里は
想い出だけの 年月としづきよ
やがて春が 来る頃は
二人の愛も 水になり
何処か知らない 北の海
流れ着いても いゝのです

冬に咲いてる あなたとわたし
雪が描いた 花模様
たゞずむ姿 わたしなの
力つくして 生きたのに
二人の愛も 水になり
押し流されて いくなんて
悲しい運命しあわせ うらみま

雪と水との あなたとわたし
何時いつか別れが 来るものと
心にきめて いたけれど
それでもついて いきました
二人の愛も 水になり
倅こせ来る日 祈りつゝ
故郷ふるさと あとに したのです

雪割燈

秋田泰治

258

吹雪にふるえる おまえの過去を
おれのこの手で 溶かしたい
泣くなよ 泣いたら 涙まで
凍りつきそな 夜の駅

今日からふたり 今日からふたり
愛のあかしの ああ 雪割燈

いつかはおまえの 笑顔が見たい
棄ててゆくんだ 泣きぼくろ
離しはしないさ どこまでも
噂舞い込む 夜の駅

今日からふたり 今日からふたり
ともす灯りの ああ 雪割燈

失くした夢でも いつかはきつと
見つけ出せるさ ふたりなら
かじかむその手を 引き寄せて
明日を待てる 夜の駅
今日からふたり 今日からふたり
吹雪散れ散れ ああ 雪割燈

雪のアトリエ

のたきひであき

あなたのいない アトリエの
窓にしんしん 雪が降る
雪より白い カンバスの
さよならの文字 見えています
おしまいですか わたし達
赤いベチカも 燃えつきて

あなたの描いた わたしの絵
どこか似ている モジリアニ
毎晩コーヒー 飲みながら
おしゃべりしたわ あの頃は…
あなたのくれた 口づけは
パイプ煙草の 匂いです

机の上で こごえてる
編まずじまいの 毛糸玉
雪降る夜の 揺り椅子は
涙のように 冷たくて
ふたつに割れた パレットも
愛のかたちに 似ています

雪灯り

三浦康照

260

白い吐息で 凍れる指を

暖めながら たたずむ駅よ

あ、北国の 片隅で

愛に破れた 女がひとり

涙で見ました 雪灯り

酒に酔っても さめれば胸に

未練がつるる さい果て酒場

あ、雪深い この町で

こらえきれない 淋しさ抱いて

あなたの面影 探したの

北の国にも 春くるように

心の傷も なほるでしょうか

あ、愛された 思い出を

捨てて悲しい 女の旅に

今夜も炎えるの 雪灯り

ゆきずりカモメにや

伊丹將人

北の港に 何しにきたと
聞いてあんたは どうするの
霧の夜更けの 淋しい酒場
身の上を 聞いたところで
ゆきずりカモメにや ますい酒

北の港で 生きてく女^{おんな}じゃ
ないとかどいて どうするの
酒のちからで 寄り添う酒場
醒めた朝 他人じゃないか
ゆきずりカモメにや うらみ酒

北の港に 馴れたらだめと
旅に誘って どうするの
潮の香りに むせるか酒場
泣きじゃくる 霧笛波間で
ゆきずりカモメにや つらい酒

夢日記

池上 信

262

あたしのこゝろの 真中に
熱いあなたの 指のあと
愛という字が しるされて
恋という字が そのとなり
しあわせいろした 夢日記

おんなの運命^{さだめ}の はかなさは
風にくるくる 風車

泣いて暮らすも 歓びも
みんなまかせた はずなのに
哀しみばかりが なぜつもの

あなたがのこした 温もりに
肌がせつなく うずく夜
恋という字が 削られて
愛という字も 消えました
あたしのいのちも 消えますか

夢堀川ゆめほりがわ

あき
たかし

疲れた女が たたずむ川にや
疲れた水が 流れてる

別れてきたのか また涙
落して溜息 もうひとつ

あ、夢堀川は 暮れてゆく

新内流しの トチチリきこえ
浮かれた声が よどんでる

それでも待つのか この夜更け
柳の木陰で けなげにも

あ、夢堀川の 灯は消える

悲しい女が 立ち去る川にや
悲しい水が 流れてる

帰っていくのか ふるさとへ
恋しい名前を 呼びながら

あ、夢堀川に 朝がくる

夢 無情

山中しげる

264

涙にくもる ネオン街
消えぬ未れんの残り火胸に
過去を相手の一人酒
酔えば佗しさなお募る
恋は儚い夢無情

二度と恋などしないわと
言つた目許に涙が光る
死ぬほど好きな人でした
忘れはしないあの世まで
恋は儚い夢無情

灯も消えた路地裏を
凍りつくよな女の影が
揺れて揺られてつまずいて
今ではすがる人もない
恋は儚い夢無情

夢の中の夢

鈴木実利

別れて上げるわ

好きだけど

これが最後の

水割ね

赤いネオンに

咲かせた花は

夜明が近ずきや

消える花

だけどく

はかない夢など

見ていたわ

貴男に抱かれて

覚えたわ

女に生れた

喜びを

だけど最後の

悲しい夢も

やっぱり貴男が

見せた夢

だけどく

貴男の重荷に

ならないわ

だまされ続けた

私には

甘い言葉は

毒なのよ

拭いて落ちない

ネオンの色は

もどれぬ女の

深い染み

だけどく

このまゝ静かに

眠むらせて

夢あかり

海老沢 孝一

あなたが見えない

暗くて見えない

早く点して 夢あかり

男があすにかけるよに

女は愛に生きるのよ

古すぎますか こんな女は

心の傷跡

涙で押えて

生きて行くのよ 夢あかり

うわさがあればどこまでも

あなたを追って飛んで行く

古すぎますか こんな女は

ひとりのくらしに

なれてはいけない

ゆれる心の 夢あかり

あの時くれた誠だけ

信じています待ってます

古すぎますか こんな女は

夢あざみ

高 畠 諄 子

路地に 鉢植 並ぶよな

間借り 暮らしも 倖せでした

今夜 あなたと 別れたら

二度と 逢えない 愛せもしない

春に咲く木が 椿なら

わたしは 野におけ 夢あざみ

過去は おたがい ありました

泣いた 数なら 負けないでしょう

そうよ 涙が かわいたら

仕事みつけて 働かなくちゃ

きつと 心配 かけないわ

わたしは 野におけ 夢あざみ

あなた 不思議な ことです

想いだすのは いいことばかり

苦勞したのも かけたのも

みんな大事な 心のたから

汽車の時間に 遅れそう

わたしは 野におけ 夢あざみ

夢見花

室屋安美

268

北の生まれと 言うだけで

心が通い 合った人

それでも幸せ 感じたの

指が覚えた あなたのゲイヤル

来るの来ないの 来てくれないの

馬鹿なのね あんな男に惚れすぎちゃって

死ぬほど夢中に なっていた

どうせ女はみんな 男の飾りもの

散るも花なら 一度咲きたい夢見花

街の灯りが 誘うから

昨日の店に 今日も来て

コークをお代り しています

悪い噂が グラスの底に

深く沈んで 私を泣かす

馬鹿なのね あんな男に惚れすぎちゃって

死ぬほど夢中に なっていた

どうせ女はみんな 男の飾りもの

散るも花なら 一度咲きたい夢見花

夢一夜

萩原百合子

あなたの愛を貸してください
ほんの少しの時間だけ

今の私は命のぬけた

ただのマネキン人形

一粒の涙も流れない

乾いた瞳にやさしくキスして

あゝ…… 夢一夜

あなたの愛を貸してください

たとえ遊びだっていいの

乾いた心のひだを潤す

ただのアバンチュールなの

束の間の契りをたしかめる

ほてった項にやさしくキスして

あゝ…… 夢一夜

夢 浄 土

斎 藤 卓

270

恐い顔して叱ってくれた
酒は男の飲みもんだよと

その場限りの優しさに

すがりつきたい夜もある

十坪足らずの止まり木酒場

それでも女の 夢浄土

聞いてあげるようち明け話し

消してあげるよネオンの香り

使いふるしの言葉にも

くずれおちたい夜もある

すき間風吹く止まり木酒場

それでも女の 夢浄土

忘れかけてたおふくろさんの

味ににってきた今夜のつまみ

そんな男の無邪気さに

ついてゆきたい夜もある

嫌気さしてた止まり木酒場

それでも女の 夢浄土

夢しぐれ

三谷 勉

みぞれ混じりの 木枯らしに

明日^あが見えない 雪見窓

泣いたって 泣いたって

ああ 夢しぐれ

解けて結べぬ 黒髪を

濡らす枕の 女宿

お酒飲んでも 消えません

あなた恋しい 傷心^{きず}の痕

未練^{みれん}でしょ 未練^{みれん}でしょ

ああ 夢しぐれ

燃えて尽くした 初恋も

散って哀しい 女宿

女心の 儂^{おろ}なさが

一夜^{ひとよ}泊りを 延ばしても

辛い^{つらい}のよ 辛い^{つらい}のよ

ああ 夢しぐれ

涙こぼした 寝化粧に

曇る鏡の 女宿

譲り船

上野たけし

親父亡くして 間もないが
ここに生きてる 傍に居る
何時も一緒の 譲り船
あげる錨に 度胸が据^する
やるぞ男さ
東支那海 俺を待つ：

磯の香りと おふくろに
気張ってゆけよと 送られて
親父譲りの 船を出す
雪のつふてと 荒波飛沫^{しぶき}
なんの寒から
舵を取る手が なお燃える：

海に仕掛けた 引き網が
男の勝負だ 生き甲斐だ
ねじり鉢巻 眼に浮ぶ
親父頷く 鰐^{えび}が躍る
腹の底から
漁歌^{うしうた}も飛び出す 譲り船：

名刺舟

高上あゆむ

袖すり合うも 縁なら

真心こめて お酒をつぐわ

たーさん丸は 北国なまり

うーさん丸は 遊びが上手

ネオンの川の 名刺舟

流れついた この街に

釧路の頃に 空似の人が

よーさん丸は 泣かされた人

すーさん丸は 妻あるお方

思い出のせる 名刺舟

幸せなんか 夢だけど

のぞみをかけて 今夜も生きる

かーさん丸の やさしさが好き

いーさん丸の 笑顔がいいわ

涙がしみた 名刺舟

夫婦旅

滝川たけお

一人はっちじゃ 越せない山も
二人で力を 合せりや越せる
ついて来るかと 振り返えりや
ついていくわと 目が笑う
そんなおまえの 可愛さに
惚れて人生 夫婦旅

人より先には 歩けぬだろうが
それでもいいさ おまえと二人
花の季節にや 花を摘み
実りの季節にや 実を拾う
その楽しさや 喜びに
生きて行こうよ 夫婦旅

俺が迷って つまずくときは
やさしいおまえの 心が支え
おまえが歩けぬ そのときは
俺がこの背に 背負ってやる
誰に遠慮が いるものか
長い人生 夫婦旅

夫^め婦^と岬

中野惣太郎

海の鳥でも 嵐の日には
泣いて明日を 待つのでしょうか

夫婦岬の お月様

呼んでも届かぬ 玄海灘は
寒いでしょうね

あ、あなた あなた
あなた偲びます

風と怒濤に 生命を晒す
あなた体を 大事にしてね

夫婦岬の 赤い灯よ

あなたに私が 惚れたんだもの
苦労したって

あ、あなた あなた
あなた泣きません

情け無用の 浮世の波も
耐えて行きます あなたとならば

夫婦岬の お月様

どうしているだろ 対馬のあたり
船はいつくる

あ、あなた あなた
あなた待ってます

短い恋

松本敦央

風が若葉を ゆらすとき
出合った ひとでした
目元涼しい ひとでした
白いベンチに 腰かけて
いつも 詩集を読んでいた
そんな 姿に
私の心は 惹かれました

夏の日差しを あびながら
愛した ひとでした
たくましい胸の ひとでした
かもめむれとぶ 白い波
あつく きらめく砂浜を
肩よせ 歩いた
そんな まぶしい恋でした

風が枯葉を おとすとき
別れた ひとでした
愁いを秘めた ひとでした
涙をほろりと こぼしたら
思い出ひとつ 夢ひとつ
はかなく 消えた
そんな 短い恋でした

みちづれの花

斉藤清吉

こんな処で 突然逢えて

こんな処で 涙をながす

運命かなしい みちづれの花

燃えて 燃えて 燃え尽きて

二人の愛を 散らせましょうか

心残りが 断ち切れないで

心残りが 未練をつなぐ

恋はわがまま みちづれの花

泣いて 泣いて 泣き濡れて

二人の過去を 忘れています

あなただったら 縋ってくれる

おまえだったら 縋ってゆける

離れられない みちづれの花

酔って 酔って 酔い潰れ

二人の絆 深めています

みちのく酒場

豊原史丈

すてていいのと 手わたす傘に

恋の雪道 わかれ酒

飲んで灯を消す みちのく酒場

あしたを夢みて 待ってます

帰るはずない あ、人なのに

誰が唄うか 演歌を背せに

雨の東京 しのぶ酒

汽笛 出船か みちのく酒場

あなたの便りを 待ってます

帰るはずない あ、人なのに

朝のまぶしさ 樹氷の白さ

悔いは消します ひとり酒

死ぬに死ねない みちのく酒場

ふたりの暮らしを 待ってます

帰るはずない あ、人なのに

みちのく未練恋

有加利^{ゆかり}
淳^{きよ}

ここはさい果て　みちのく波止場
むせび泣くよに　出船のドラが鳴る
なんであなたは
わたしを忘れて　行きたい思いの
すがりつく手を　振りはらう

ああ…　未練の恋よ

情けながした　みちのく波止場
別れテープの　女のかなしさよ
めおとカモメも
ひと声鳴けば　身を切る吹雪に
わたしを残して　飛んで行く

ああ…　未練の恋よ

しぶき凍^こてつく　みちのく波止場
通い船なら　帰ってくるものを
これが定めか

待てど空しい　きのうの恋は
わたしが一人で　抱いて行く
ああ…　未練の恋よ

乱れる

淡島千佳夫

280

恋に渴いた 唇燃えて

愛のくちづけ 待つわたし

あなたを憶えた 体が憎い

夜がうずいて あゝ…

乱れ乱れて 命がけ

死ねと云われりや 死んでもいいの

抱いておくれよ しびれたい

それから恍惚 夢見ておぼろ

夜がうずいて あゝ…

乱れ乱れて 燃えつきる

逃げて行くなら 風ともなつて

あなた追いかけ からみつく

女にや妖しい 魔性があるの

夜がうずいて あゝ…

乱れ乱れて 乱れ酒

水たまり

藤岡真理

あんたはいつでも 通り雨
予報も無しに 降って来る
ほんとに気まゝな 通り雨
傘もさ、ずに 待たされて
濡れても着がえる 服がない
そうよあんたが くれたのよ
とっても似合うと 思ってた
恋と云う名の 一張羅^{いっさろ}
心にもない 口づけで
今じゃ泪を くれるだけ
私芯まで びしょ濡れよ

あんたはいつでも 俄か雨
どこかにい、娘^{むすめ} いると云う
うわさの合間の 俄か雨
あんな奴など 忘れちゃえ
電話が鳴っても 出たくない
だけど私も 馬鹿だよ
シチューが出来たの お好きでしょ
甘いセリフが 出てきちゃう
心にもない 強がり
雨のあんたを 追いかけて
私泪の 水たまり

港よこはま恋時雨

谷田草路

何故か 他国の 言葉でも
何時か 心が ほぐれたの
ゆれる 夜霧の 棧橋に
残る 別れの 一言が
胸に 冷たく しみてゆく
港 よこはま ドラになる

切れた テープを 握る手に
ぬらす 霧笛の 悲しさは
今も 切なく よみがえる
消えた あなたの 一言は
寄せて かえらぬ ちぎれ波
港 よこはま 波止場道

青い 灯りの カウンター
そっと うすめる 未練酒
波止場 からの 泣く声は
むせぶ 涙の 一言よ
ひとり つぶやく しのび唄
港 よこはま 恋時雨

港のおまえ待ってろな

外松 たつ雄

どんとひとつの 荒波こえて
こえて俺らも でかくなる

でかくでかくと 気をはって

あの娘俺らにや ままならぬ

男船乗り 男船乗り

おやじゆすりの 意志が泣く

潮の香りが 黒髪につき

しみていながら 愛してる

でかい瞳も おふくろに

あの娘どうして ままならぬ

男船乗り 男船乗り

波が身をもむ 恋が泣く

風は北風 アリユーシャン

船は上下に きりりまい

いつもいつもと 行く先きに

あの娘俺らにや ままならぬ

男船乗り 男船乗り

春を抱きたい 男泣き

港…恋町・泪町

眇田榮一

泣いてあなたの 背を追った

港…恋町・泪町

憎みきれない おとこの嘘が

とても恋しい 今だから

逢いたいな泣きたいな あなたの胸で

抱いて下さい 今一度

あなた… 呼んでる港町

不幸つづきの おんなになんか

波も汽笛も 知らん顔

冷めたいな切ないな やつれた胸が

夢のかけらも 散るような

港…恋町・泪町

せめて今夜は お酒を飲んで

想い捨てよう 泪もね

しみとおるこの胸に 恋が重たい

萎れ花

藤枝省一

肩の先から しあわせが

ぬけて崩れた 萎れ花

かなしい運命 見変えしに

お気持ち甘えて いいかしら

あなたの愛で 咲かせてね

あえて捨てられ 貰われる

夢をここに 萎れ花

かれないように 抱かれて

お酒を飲んでも いいかしら

あなたの愛で 咲かせてね

テラス窓寄り ふと惚ぶ

なみだ夜露の 萎れ花

くるしいことを 忘れない

お泊りしても いいかしら

あなたの愛で 咲かせてね

情じやうの川

対馬慎一郎

命の恋に賭けるのも

あなたにみせた誠心まことこころも

あゝ… 女おんなが抱いだく 情の川

この胸そつと搔かきむしる

男は憎い浮舟の

花の気儘をいいことに

ふる郷すてたその理由わけも

明日あしたのためと言いきかす

あゝ… 女の運命 情の川

溺れて愛に死ぬために

私わたしがきめた一ひとと筋の

これが女の証明あかしです

着物をかけて欲しいのに

素顔が好きと言うあなた

あゝ… 女の姿 情の川

この手で燃やす命火いのちびの

往ゆきつく岸はどうあろうと

なんであなたが離はなさりよか

上州湯の香唄

丘 治 也

一つと 惹かれて来て見る 三日月村にや

サイエ 可愛い緋の 茶屋娘

恋が呼びそな やぶ塚灯り

二つと ふらりと榛名湖 遊んだ帰り

サイエ 石段ひな段 恋の段

おぼろ月夜に 夢見る伊香保

三つと 見応えたっぷり 湯畑前で

サイエ 踊りをさかなに 湯もみ唄

暑さ白根山の 風吹く草津

四つと 寄り添い尋ねる 紅葉四万の

サイエ 奥には日向見 薬師像

願をかけましょ 幸せひとつ

五つと いで湯の情けが 絡んだままの

サイエ 外には粉雪 恋の雪

とけて散ります 水上あたり

終りと 音頭は八木節 名代は三山

サイエ 赤城に榛名に 妙義山

それに名物 そうカラッ風

傷心ひとり旅

村田安広

288

心の傷が癒えるまで

旅をつづける つもりです

汐の香りの するこの部屋で

自分の気持ちを 確かめてます

あ、傷心ひとり旅

帰れない ふるさとがある旅の宿

肴は目刺し 螢鳥賊

海を見つめて コップ酒

酔えばゆららと あの漁り火が

還らぬ思い出 呼び戻すのよ

あ、傷心ひとり旅

帰れない ふるさとがある旅の宿

別れの涙 知るたびに

人は大きく なるという

命燃やした 恋だったから

萎れた心が また痛みます

あ、傷心ひとり旅

帰れない ふるさとがある旅の宿

正直人生

仁礼美智雄

台詞

なんやて 正直すぎて損ばかりしてる
い、じゃないか 人は人 俺は俺 人を騙してまで
出世なんかしようないわい

自分の心 だませたら
らくな暮らしが させられる
馬鹿な奴だぜ 俺って奴は
正直すぎて 人生を
貧乏神と 三人連れだ

台詞

なに 俺の生き方は フーテンの寅に似てるやて
嬉しい事言うて呉れるやないか 彼も真っ正直な男や
こんな乱れた世の中に 真っ正直に生きてく男が
二人や三人居ても 邪魔には ならんわい

真面目さだけが とりえだと
苦勞承知で ついてくる
馬鹿な奴だぜ 女房の奴も
似た者夫婦 よく言うた
これから先も よろしくたのむ

台詞

なあお前 上を見ても下を見ても きりのないもんや
丁度まん中や思つて 生きてるのが 幸せってもんや
わかるかい わかつたらだまつてついて来い

正直者が 損をする
こんな世間が にくらしい
馬鹿な奴だぜ わかつていても
この生き方を かえやせぬ
嘘では心 飾れぬからさ

初 体 験

中 川 連

言葉ひとこと　かわさずに
セーラー服の　横顔を
眺めて燃えた　あの頃だった
その面影が　目に泌みる

萌えるかげろう　原っぱで
みどりの蔭に　只一人
あの娘の写真　抱きしめながら
燃い吐息の　恋を知る

じっと耐えても　こらえても
ぐるぐる廻る　夢心地
震えて知った　思い出の
男の匂い　濡れて知る

空の青さが　霞むころ
ぐったり疲れ　草の香が
ただようあたり　たそがれ近く
初体験の　春うらら

信濃川・流れ花

志賀大介

いやと云う程 泣かされた
だけどあの人 にくめない
死ぬ気で惚れた 信濃川
あんな優しい 顔をして
別れ言葉の 冷たさよ

ああ 仕方ないよね

信濃川・流れ花

逢った時から 今日までの
忘れられない 恋苦労
未練にむせぶ 信濃川
連れて行つてと 縋つても

今朝は他人の うしろ姿

ああ 仕方ないよね

信濃川・流れ花

さむいからだを 寄せ合つて
別れ朝ざけ 名残り酒
なみだの川か 信濃川

いつか逢えると 云うけれど
どうせ気休め おとこ口

ああ 仕方ないよね

信濃川・流れ花

白川^{しらかわ}の宿

柴田よしかず

「しっかり 生きろよ」

「くじけちゃ だめだよ」

あの人の涙が こぼれてせせらぎの

音にかわる 白川の宿

妻という名を 捨てたいために

女も捨てて 来たわたし

「うしろを 向くなよ」

「向いたら 負けだよ」

泣き明かした臉に 母呼ぶ幼児^{おとこ}の

顔がうかぶ 白川の宿

可愛いけりやこそ 鬼にも蛇^{へび}にも

ならなきや明日が 生きられぬ

「信じて 待とうよ」

「かならず 逢えるよ」

歳月が真実^{まこと}を 語^{かた}して くれるまで

隠れ潜む 白川の宿

せんべ蒲団^{ふとん}に くるまりながら

せめても見たいわ 故郷^{ふるさと}の夢

志野

横山光夫

峠こえれば 登り窯
ゆれる炎の 志野の里
声をひそめて 生きるよな
そんな暮しが 悲しくて
あなたの胸に すがりつく
志野 志野 私には志野
恋に息づく 女の肌は
炎に抱かれて 雪になる

瀬音かなしき 恵那峡は
男と女の 旅の宿
かなわぬ夢と 知りつつも
別れことばが せつなくて
涙ぬぐって 紅をさす
志野 志野 私には志野
恋に息づく 女の肌は
炎に抱かれて 雪になる

瀬戸から美濃へと つづく道
土の香かおる 志野の里
二度と逢えない さだめなら
私ひとりで 生きるため
せめて残して 悲の器
志野 志野 私には志野
恋に息づく 女の肌は
炎に抱かれて 雪になる

しぐれ茶屋情話

川口松太郎作
しぐれ茶屋おりくより

鳥居浩子

数寄屋づくりの 丸窓ごしに

見れば今戸の 渡し舟

粹な別れを 心にきめて

泪かくした しぐれ茶屋

へ夕暮れに 眺め見渡す 隅田川

月に風情を 待乳山

うしろ振向く 小舟の男を

唄で見送る 秋の宵

とぎれとぎれの 三味の音ゆれて

女おりくの しのび泣き

恋ものぞみも 隅田の川へ

流す月夜の あで姿

ひとり手酌の 塗りさかずきを

ほろり落とせば 鳥も啼く

しぐれ宿

荒木良治

一人にしてとは 願わなかった
それがいまでは 一人きり
淋しさつのる しぐれ宿
軒につるした 風鈴が
季節はずれの 音で泣く

枯れ葉が小枝を 離れる頃は
すでにこころは 冬模様
襟元さむい しぐれ宿
冷えたこの手を 温めて
ほしいあなたは 遠い人

旅して覚えた 地酒の酔いも
消してくれない ころろ傷
ため息湿める しぐれ宿
明日が見えない 女にも
せめて見させて 夢だけは

幸せにしてあげて

大前裕子

296

お願いがあるの 少しでも聞いて

ゆれる髪した 美しい彼女が

昨夜来たの そしてわたしに 聞いたわ

あなた 彼を 愛しているの？

あなた 彼に 愛されているの？… っ

悲しかったわ ひとり朝まで泣いていた

さようなら さようなら

一番大事な季節 一緒に生きたのね

どうぞ あの彼女を 幸せにしてあげて

お願いがあるの もう少し聞いて

いつもあなたを 大切に生きた

わたしでした いまも愛して いるのよ

せめて せめて 思い出だけは

胸の 奥に 残してほしい… のよ

うらみはしない 愛のよろこびくれたから

さようなら さようなら

一番大事な季節 一緒に生きたのね

どうぞ あの彼女を 幸せにしてあげて

倅せそうだね

木村賢司

俺をすきだと
離さないでと
あの時の君が
男と一緒に
別れて心配
素敵に恋して
可愛いがられる
倅せそうで
背中をぶつて
すがつてた
新宿で
歩いていたね
してたけど
いたんだな
女になれよ
よかったよ

髪のかたちや
すべて好みが
あの頃は地味で
か細いからだか
別れて心配
倅せつかんで
愛しつくせる
元気な君で
服装なんか
かわってた
青白く
気がかりだった
してたけど
いたんだな
女になれよ
よかったよ

別れて心配
心配すること
いのち賭けてる
倅せそうで
してたけど
もうないな
女になった
よかったよ

倅せくれたうちの奴やつ

木谷鴻治

どうせつまらぬ 未練酒
逃げた女など 忘れなと
暮らす荒すんだ とまり木の
俺の背中をなでながら
諭さしてくれた その女は
赤いえにしの糸結び
倅せくれたうちの奴

あの日 こいつに 逢わなけりや
暗い明日あしたが 待っていた
思ひ出すたび 寒くなる
背筋流れる冷や汗も
だまつて過去も のむ女
縁えんと言う字に結ばれて
手鍋厭いとわぬうちの奴

俺が選んだ いい女と
言えはほんとは うそになる
馬鹿を拾って くれた女
今はこいつに命まで
いらぬいほどに 惚ほれました
誓い言葉もないけれど
忘れやしないさ うちの奴

倅せまわり道

西 順子

ネオン暮らしに ほろりと酔えば
日蔭暮らしが ほろりと泣かす
七分咲きした 女の花が
風に舞い散る 倅せまわり道
うしろ指さす 世間の裏で
そつと そつと そつと灯りを ともしたい

今夜わたしの あなたでいても
明日はわたしの あなたでないわ
恋も淋しい おんなの春を
涙ぬらして 倅せまわり道
妻という字にや 勝てないけれど
せめて せめて せめてなりたい ころろ妻

遊び上手と 噂をきけば
苦勞上手で 噂をかくす
ふたり出直す おんなの夢も
あてにならない 倅せまわり道
すてはしないの その一言に
祈る 祈る 祈る思いで すがりつく

出世太鼓

増山一郎

へオーイ 出世太鼓が聞えるかい

ドドン ドドンくくく (太鼓)

富士を枕に でっかい夢を

抱いて寝て泣く 夜もある

たとえ涙が 枯れるとも

これが男の 辿る道

出世太鼓の 出世太鼓の

ドドン ドドンくくく (太鼓)

乱れ打ち

へオーイ 出世太鼓が聞えるかい

ドドン ドドンくくく (太鼓)

人の情けに さからって

子供ごろに おぼえた苦勞

苦勞は 天下のまわりもの

これが男の 辿る道

出世太鼓の 出世太鼓の

ドドン ドドンくくく (太鼓)

流し打ち

へオーイ 出世太鼓が聞えるかい

ドドン ドドン／＼（太鼓）

指をさされた この俺だって

かけた命が 火と燃える

やつと花咲く ときが来た

これが男の 辿る道

出世太鼓の 出世太鼓の

ドドン ドドン／＼（太鼓）

錦打ち

終^{しゅう}

恋^{れん}

山崎公聖

忍び逢う恋四年も続け
彩^{いろ}とりどりの夢を見た
御伽^{おとぎ}噺^{ばな}にけりつけて
旅に出るのもいいかしら
愛と云う字をも一度書いて
捨てる所を探してみます

出来ることなら哀しみなんて
知らずに居たらずつと楽
愚痴のカケラを吐き出して
一人酌する雨の宿
妻と云う字をも一度書いて
捨てる所を探してみます

忘れ草なら一本欲しや
植えて育てて観^みて忘る
誰^{たれ}が詠^よんだか未練歌^{みれんか}
似合う女になりました
夢と云う字をも一度書いて
捨てる所を探してみます

新宿横恋慕

栗田治夫

嘘のお酒で 氣取つてみても

誘いにゆれる 新宿ネオン

女の炎に 火が灯けば

やさしいあなたに 賭けたいの

悪い 悪い予感よ 新宿横恋慕

飾る気持は さらさらないわ

ドレスが知つてゐる 新宿ごろ

いつも聞いている あのひとの

噂さを今夜は しないでね

悪い 悪い予感よ 新宿横恋慕

好きになつても 終りがくるの

甘えてすねてる 新宿ぐらし

それでも追いたい 夢おんな

最後の涙が まだあるの

悪い 悪い予感よ 新宿横恋慕

新宿みれん唄

鈴木夜詩夫

みんな夢よと 思つてみたが
思ふあとから 夢をみる
よるの新宿 露地裏に
降るはおんなの みれん雨
せめて濡らしてよ 憎いうしろ影

酒にうかんだ 男の顔を
グラスゆらして 消して飲む
誰が唄うか カラオケの
なぞる身の上 歌舞伎町
ふられ者たちの ここは吹きだまり

みせる笑顔は 看板だけど
裏は涙に ぬれている
故里に待つてる 母さんの
声がしたよで 振りむけば
ネオンチカチカと 母にみえてきた

人生大曲り角

泉 淳 三

天にひとつの 太陽があるように
天に 生命の 親神ありき祈りあり
睫毛一本 草の根ひとつ

人の智力じゃ 造れない
天地一切 主神 大仕組み

人の生活に 火と水の恩

命 生かされ 働ける今日がある
金だ 名誉だ 出世が花と

とかくあせれば 落し穴
お人よしほど また 泣きをみる

試練耐え抜け この世の修業

愛和 真心 光りさす「天の時」

笑顔あかるく 人 助け合い

天意を世界に 咲かせたい

乱れ人生 大、曲り角

(註) 主神(天地創造の大神様)

ひろげよう愛の輪を

浦田常治

306

心の泉に わく愛は

光をうけて 虹となる

愛はこの世を しあわせに

愛はこの世に やすらぎを

愛の輪 虹の輪 希望の輪

みんなでみんなで ひろげよう

心の泉に わく愛は

大地にあふれ 花となる

愛はこの世を 美しく

愛はこの世に よろこびを

愛の輪 花の輪 笑顔の輪

大きく大きく ひろげよう

心の泉に わく愛は

風のハーブで 歌となる

愛はこの世を あたたかく

愛はこの世に やさしさを

愛の輪 歌の輪 こだまの輪

みんなでみんなで ひろげよう

ひとり

愛 行 子

幸せなんて どこにある

暗い浮世の 片隅に

一人ぼっちの 朝がくる

誰もが私に 背をむける

それでも 生きなきゃならないの

よどみに浮ぶ わくらばと

どこか似ている このさだめ

ネオンの灯りに 身染めて

うぶな昔の あの夢を

どこへ忘れて きたのやら

枯葉舞い散る うら通り

迷い小犬が すすり泣く

みぞれ混りの 雨が降る

北のふる里 吹雪くころ

母は達者で いるだろうか

ひとりぼちの子守唄

松崎 暎子

あすの思案に眠れぬ夜は
慣れた枕で　ねんころり

母が歌った子守唄

思い出さがして歌ってる

夢をただよい　ねんころり

胸が寒くて凍える夜は

ひとり窓辺で　ねんころり

母にせがんだ子守唄

涙にまかせて歌ってる

時もかなたに　ねんころり

生きるのぞみが消えそな夜は

じつと湯舟で　ねんころり

母に覚えた子守唄

湯気にくつろぎ歌ってる

芯もぬくもり　ねんころり

すさぶ気持ちがいやせぬ夜は

飲んで飲まれて　ねんころり

母を慕った子守唄

まわらぬられつで歌ってる

朝が背中で　ねんころり

ひとりうもれた私でも

篠田定吉

ひとりうもれた 私でも

伴せほしいわ 好きな男

明日も来てねと おねだりしても

ちらりうなずく 流し目は

儚い恋の ネオン花

明日花咲く 恋もある

運命かなしい 徒の花

綺麗に咲いても みのらずに

燃えて愛して さよならなんて

狂い咲くのも 恋の花

儚い恋の ネオン花

明日花咲く 恋もある

さみしがりやの お酒です

あなたはもてるの 憎い程

狂いそうなの 浮気はいやよ

あなたひとりが 恋人よ

儚い恋の ネオン花

あなたひとりが 恋人よ

悲恋蝶

原文彦

女の夢と あなたの未来

計りにかけて 泣いてます

身を引くことも 女の芸ね

三味の乱れが 盃の ああ

酒に泌みこむ 奥座敷

あなたにいつか 解とかれた帯の

きしみが今も 身を焦がす

心の傷も 女の顔ね

雪見障子を そつと引きや ああ

縁にこぼれる 細雪

姉さん女房 柄ではないと

指輪を包む 紅べに襖きょ紗

強がることも 女の情ね

春の行方を 追うような ああ

蝶が泣いてる 舞扇

熒^ひ

惑^{なつ}

星^{ほし}

百瀬淑子

白い砂浜 青い海

芒^{きり}の丘に 波を聴く

幽^{ゆう}かに匂う 想い出の

髪^{かみ}の香りか 金木犀

素絹^{すけぬ}の衣^{きぬ}を 身にまとい

そつと嫁いで いった人

夕日に染まる 岩蔭に

黄金^{きんご}の花びら 散る小径

丹塗^にりの橋の 欄干に

もたれて好きと 泣いていた

女心の せつなさが

胸を朝夕 しめつける

遙かな船を めがけては

花の礫^{つらら}の 五つ六つ

はかない愚痴と 知りながら

絶る夢さえ ない夜を

影と並んで すすり泣く

身をば嗤^{わら}うか 熒惑星

日昏れの波止場

高 安 弘

錆びた船体 かたむけながら

函館港^{はこだて}に やつてきた

オイルやけした 髭面かもめ

まっていた 二年の月日

苦労したのネ ねえあなた

雪が泣いてる 日昏れの波止場

ブイがやつれて 波間にゆれる

横浜港に ドラが鳴る

テープちぎって あなたの船が

私泣かせて 航跡白く

影も残さず 消えてった

雨がふってる 日昏れの波止場

船の男は きまぐれなのネ

長崎港に 霧がふる

夕日落ちてく 水平線の

雲が真赤に そまったように

燃えた一夜を 想い出す

潮風^{かぜ}が泣いてる 日昏れの波止場

ひ き 汐

やました しん

灼けた素肌に水着のあと
残したまま家路をゆく

はしやぎ疲れた子供のように
サンダル両手にぶら下げた

私をひとりにして消えた人よ

過ぎてゆくのは夏だけじゃない

さらってゆくのは波だけじゃない

洗いざらしの長い髪

かきあげて振り返れば

燃えることなく終った恋と

知らずに汐が引いてゆく

私をひとりにして消えた人よ

過ぎてゆくのは夏だけじゃない

さらってゆくのは波だけじゃない

私をひとりにして消えた人よ

過ぎてゆくのは夏だけじゃない

さらってゆくのは波だけじゃない

秘めごと

大溝玲子

314

親にもいえない 秘めごとが
親の知らぬ間 燃えて散る
山の湯の宿 せせらぎ聴いて
さめた酒つぐ 醉えないふたり
あわす襟もと すきま風

いつしか時雨れて 夜も更けて
あなた寢息を たてている
ひとり湯舟に 身を沈ませりや
髪のはつれに 湯の香がゆれる
なみだ洗って 捨てる夢

あなたの背中に さよならを
つけて足音 しのばせる
わかれ湯の宿 夜明けの霧に
濡れて咲いてる 佗助つばき
縁もうす紅 ひとえ花

もういちどコウノトリ

小谷 健一

白い野菊よ 夕焼けよ
どこにいるのか コウノトリ
何か知ってる 地藏さん
聞いてください 願いごと
わたしもお嫁に 行けますね
それから赤ちゃん 産めますね

昔 裏山 霧の中
そっと見つけた コウノトリ
だれも信じて くれなくて
親のない子は 損をする
子どものときから ひとりっ子
大人になっても まだひとり

父をさらった 日本海
知っているよね コウノトリ
舟も帰って 来ないのに
星を見つめて 待っている
育ての親には 親孝行
ばあちゃん長生き しておくれ

見たい逢いたい もういちど
母の姿と コウノトリ
わたしお嫁に 行けたなら
もっと丈夫な 母になる
こんどはだれにも 話さない
月夜に出て来い コウノトリ

燃え立つ時が人生だ

榎本克彦

この世のいみなら 風が知る
聞けば なにやら なんとやら
夢が 最初の 旅がある
旅は つらいか 楽しいか
燃え立つ時が 人生だ

春夏秋冬 どこで咲く
君と 僕との 愛の花
夢を 夢みて もう一歩
旅は 長いか 短い
燃え立つ時が 人生だ

この世に 命がある限り
いつも 心に 青春を
抱いて いりゃこそ 味もでる
旅は 甘いかな しょっぱいかな
燃え立つ時が 人生だ

紅葉川

石川泰久

離しはしないと 抱かれた肩を

なんにも聞くなと なぜ突きはなす

夢ひとつ またひとつ

燃える想いを さよなら橋の

瀬音に散らす 紅葉川

生命の限りと 誓った恋も

今では悲しい 落葉の運命

夢ひとつ またひとつ

しのぶ涙の 面影橋に

未練が揺れる 紅葉川

忘れはしないと 冷たい指を

やさしく握った あの手の温み

夢ひとつ またひとつ

想い切れない あきらめ橋に

瀬音がむせぶ 紅葉川

瀬戸内情歌

水木れいじ

赤い椿が　ホロリと散れば
海も温^ぬんで　島は春

待てど暮らせど　戻らぬ　あなた
呼んで啼くのか　磯千鳥

想い　ひとすじ　櫓に込めて
千里漕いだら　逢えるやら…

波が高けりや　小船も着かぬ
裏の笹山　月も出ぬ

眠れないまま　名前を呼んで
泣いて廻した　糸ぐるま

ひとり　あなたの　恋しさに
いくど　袂^{たもと}を　噛^かんだやら…

はるか瀬戸内　夕日は落ちて
帰る苦^{くる}屋^やにや　夢もない

沖にチラチラ　またたく灯り
あれは　あなたの迎え火か
しぶく　荒磯^{あらいそ}に　身を投げて
死ねば　あの世で　添えるやら…

線路

高畑和之

上り列車が 貴方をつれて
山の向こうに 消えたあと
線路に耳を あてながら
車輪の音を聞いていた

今日もあてれば この耳に
ひびくは木枯し 風ばかり

どこで貴方は 暮らしているの
便り一つも くないで
線路に音を ひびかせて
帰って来る気 ないものか
山もあの日と 変らない
わたしの心も 変らない

一人待つ身に 貴方のことは
思いたくない 嘘だとは
線路に耳を そば立てて
貴方の帰り 今日も聞く
空で燃えてる あかね雲
淋しさまぎらし 呼んでみる

善三母恋しぐれ^{ぜんざ}

熊
た
け
し

渡世冷たい 夜の雨

義理を感じた その日から

美濃の善三に ふりそそぐ

どうせしがない 一本差しにや

帰るあてない 中仙道^{なかせんどう}

へ緑しく間の 山の花々まぼろしの

母に甘えし 夢をみる

三度笠にも 浸みてくる

男修業の なれの果て

時雨かなしい ヤクザ道

恋しおふくろ 東の恵那山^{えなさん}

足は故郷へ わらじは西へ

人目忍んで 来たけれど

胸を突かれる 苦勞じわ

両手合わせて 旅合羽

背なで呼ぶ母 伴^{とも}じやないと

險濡らして 又雨になる

酔歌

堺ナオコ

空も見えない 女の部屋を
ためいき雲が また流れ
帰らぬあなたの まねをして
たそがれ酒を また飲んで
こよい よいうた ひとりうた

地図をひらけば 東がにくい
あなたの街を 赤く塗る
一緒に暮らせる はずだった
つかのま甘い 夢をみた
こよい よいうた みれんうた

花を忘れた 一輪ざしに
思い出ばかり 投げいれて
酔えないお酒に 酔い疲れ
手さぐりだけで また生きて
こよい よいうた おんなうた

×の数だけ あなたを待った
女の暦 恋ごよみ
便りもうわさも ないままに
今日から春が 立つという
こよい よいうた なみだうた

素適な他人

土屋正敬

(男) 駅に着いたら 逢いたくて

足をのばした 赤提灯

(女) 寝ている未練を 起こしに來たの

(男) あれから幸せ 咲いてるようだね

(女) あなたの肩にも揺れてる夢が

(男) 僕のボトルは どこかにかくれて

(男) 誰かのボトルが すましてる

(男)(女) いいんだ いいのよ 二人は

(男)(女) 笑って別れた 仲だもの

あの日からとっても 素適な

素適な他人

(男) 髪を短かく したけれど

若さ可愛さ 散らないね

(女) お世辞と知りつつ 振り向く気持

(男) おまえの心を のぞいてみたくて

(女) 戻って来そうで いけないあなた

(男) 違うぬくもり 体に伝わる

(女) やさしいいい人 いるんだね

(女)(男) いいんだ いいのよ 二人は

手を振り別れた 仲だもの

あの日からとっても 素適な

素適な他人

あとがき

編纂委員長

牧 房 雄

本詩謡集に寄せられた、三〇三篇の作品に目を通し、その多彩と絢爛さに感動した。

参加者のひとりひとりが、それぞれの持味、個性を発揮して作品の妍を競い、正に現歌謡詩界の頂点に光彩を放つ詩華集であると云っても過言でない。

云うまでもなく歌謡詩は、詩として読むに堪え得る文学性と、歌として作曲され歌唱され得る音楽性とを兼ね備える、きめこまやかさが求められる。そこに詩句の苦心と構成の妙が問われるわけである。

本詩謡集に載せられた作品すべてが、その条件を満たしているとは云えないが、少なくともここには今までにない新鮮な視角と、斬新な題材の発掘がある。人生の哀歓がときには優しく、ときにははげしく、情感豊かに脈打ち、作品の詩語の一つ一つの重みが確かな手応えと共感となって胸を打つ。百花正に匂うごとくである。

この花の一花一花が作曲家の協力を得て、美しく実を結ぶことを切に期待するものである。

編纂委員

若山	山上	松井	たなか	志賀	宇山	岩瀬	池田	牧房	星野	関沢	石本	西沢
かほる	路夫	由利夫	ゆきを	大介	清太郎	ひろし	充男	雄	哲郎	新一	美由起	爽

きょうの詩あじたの詩

—日本作詩家協会年刊詩謡集—

(一九八四年版)

¥3,500
(送料共)

昭和五十九年七月十五日 発行

発行者 石 本 美 由 起

編纂者 日 本 作 詩 家 協 会
年刊詩謡集編纂委員会

印刷所 株式会社 三幸印刷

発行所 日本作詩家協会

〒104 東京都中央区銀座八二二一

(新田ビル)

☎(〇三)五七三一二九八〇

掲載作品を付曲使用される場合は発行所宛ご一報ください。